

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集

浦 戸 城 跡

— 国民宿舎「桂浜荘」改築工事に伴う発掘調査報告書 —

1995. 2

高 知 市

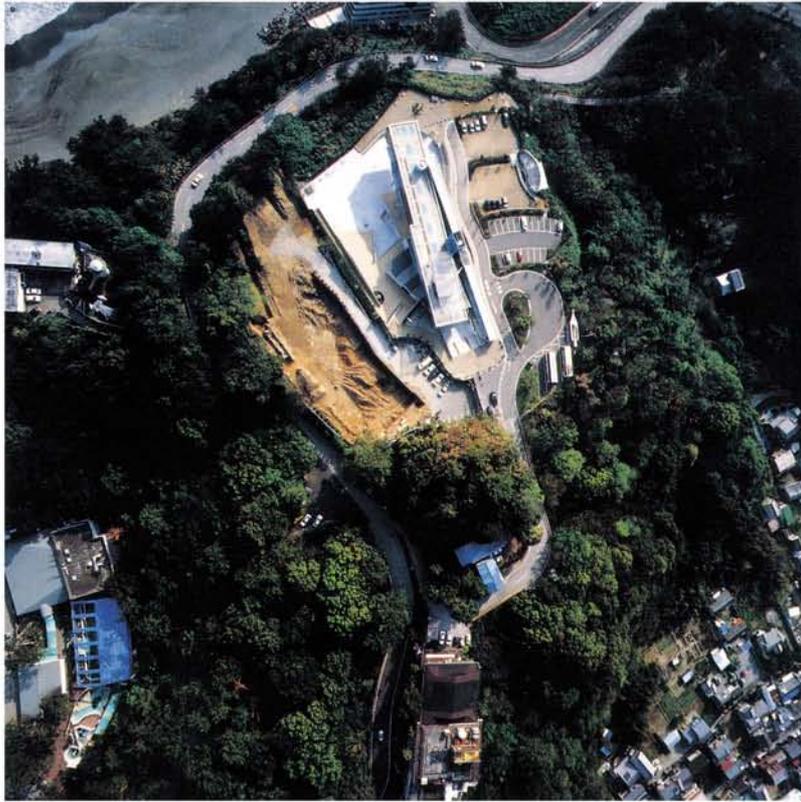
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

浦 戸 城 跡



1995. 2

卷頭 2



天守台・詰ノ段周辺



調査対象地（国民宿舎「桂浜荘」敷地内）



詰ノ段石垣



東出丸西側部分（D区内壁）

卷頭 4



鯨片 (Fig. 30, 35, 36)



軒丸瓦 (Fig. 20, 2, 3)



軒丸瓦, 軒平瓦 (Fig. 20, 1, 4)

ごあいさつ

昭和39年5月営業開始した国民宿舎「桂浜荘」は、県内はもとより全国からのたくさんの方々に親しまれ利用されてまいりましたが、建物の老朽化と、多様化していく利用者のニーズに対応するため、桂浜山頂の美しい景観や自然に配慮した国民宿舎をめざして、関係者のご協力をいただき改築工事をすすめてきました。

この地は、浦戸城址にあたるため、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターによる調査をお願いしながら、慎重に工事をすすめてまいりました。

その工事に伴い、旧国民宿舎築山部分の内側から石垣が発見されたのをはじめ、工事の進捗により、順次、石垣が発見され、それらの発掘調査等の経過につきましては、本報告書に詳しく記載させていただいております。

石垣の保存方法につきましては、高知市文化財保護審議会をはじめ、関係者の皆様方と協議、検討を行い、工事計画の一部変更をし、ほとんどの石垣を保存することができました。

「桂浜荘」入口手前に、当初発見された石垣を移設復元し、比較的保存状態の良い、西南側の石垣は、そのままの状態で見地展示し、400年前の浦戸城をしのんでいただけるようにし、また、残された部分については、調査のうえ、土嚢で保護し、擁壁で補強を行い、埋め戻して保存することにいたしました。

そして、平成6年3月に、浦戸城天守跡と石垣を高知市史跡に指定をいたしました。

この調査報告書が、高知の歴史を語るうえで、貴重な資料として活用いただければ、まことに幸いです。

今回の調査、発掘等にあたりましては、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、高知市文化財保護審議会並びに地元の方々をはじめ、関係者の皆様方のご支援、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

平成7年2月

高知市長 松尾 徹 人

序

浦戸城は長宗我部元親の居城として有名であります。今回、平成5年度の調査に於いては比較的良好な形で石垣の残存が確認されました。戦国期土佐の統一、四国統一と文献等にその足跡を知ることができますが、当時を偲ぶ場所や建物は本拠地であった高知県中央部に於きましても岡豊城址等数える程しか存在しません。転換期に於いて我々は先人の足跡を辿りその指標とすることがまま在りますが、生活の場のより近い所に先人の痕跡が残されていることが心の豊かさに繋がると信じます。

今回石垣を保存することが出来た事は、我々文化財に携わる者にとって喜びであります。地域住民の方々にとっても価値ある財産と考えます。

調査に際して工事関係者等にご協力頂きましたこと、保存に関して諸氏・諸機関の方々から多くの教示を賜りましたこと厚くお礼申し上げます。又、不十分な所も存しますが本書と保存された石垣の有意義な活用を次世代に委ねる次第です。

平成7年2月

(財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 原 雅彦

例 言

1. 本書は高知市浦戸字城山に位置する『浦戸城跡』の発掘調査報告書である。
2. 本書は浦戸城跡を対象に行われた三度の調査を総括するものであり、調査期間・整理期間及び対象面積は次の通りである。

	①	②	③	④
年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度
調査期間	1991/10/11～ 10/20	1993/8/12～ 8/20	1993/8/26～ 10/27	1994/4/1～ 1995/2/25
調査面積	240 m ²	48 m ²	611 m ²	—
内容	西側尾根部確認調査	立会	本調査	整理・報告書作成

3. 本発掘調査は①、②に於いて高知市教育委員会が主体と成って実施され、また③に於いては高知市教育委員会と（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターが主体となった実施された。

又、本報告書作成及びそれに伴う整理作業（④）は、高知市より（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターが受託し行った。

調査体制は次の通りである。

高知市教育委員会

社会教育課 課長 森尾 靖子

文化振興係長 西田 幸人

主事 筒井 佐知（平成6年度 転属）

埋蔵文化財センター

所長 原 雅彦

総務課 課長 井上 幸雄

主幹 三浦 康寛

調査課 課長 明神 睦起

調査第二係 係長 森田 尚宏

調査第三係調査員 古成 承三

調査第一係 〃 池澤 俊幸

4. 本書の執筆・編集は古成が行った。なお、第Ⅲ章 調査の概要の中の平成三年度確認調査の執筆は森田が行った。

5. 城跡の全体測量は航空測量を行った。なお、航空測量は委託により（株）アイシーが実施した。各調査区については、中心線を基準とした任意のグリッドを展開した。

6. 遺物の挿図，写真図版は同一番号である。

7. 調査にあたっては，下記の諸氏・諸機関から多くの助言を頂いた。

文化庁記念物課・高知市文化財保護審議会・岡本健児・前田和男・木戸雅寿・松田直則・森田尚宏・埋蔵文化財センター諸氏

なお，今回の調査で検出された石垣，及び浦戸城跡の天守台については平成6年3月をもって高知市史跡に指定された。

石垣の保存にあたっては，下記の諸機関・諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
(敬称略)

浦戸城址保存会・高知市文化財保護審議会・上田建築事務所・上田克世（上田建築事務所）・筒井佐知（高知市教育委員会社会教育課文化財担当）

8. 出土遺物は（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターにて保管している。尚，注記は①に於けるものに就いては91-18UCを使用し，②及び③に於けるものに就いては93-17UCを使用した。

本文目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過	1
1. 調査の契機	1
2. 調査の経過	2
3. 調査日誌抄	4
第Ⅱ章 城跡の位置と歴史的環境	6
1. 城跡の位置	6
2. 歴史的環境（浦戸城にかかわる歴史的背景）	6
第Ⅲ章 調査の概要	10
1. 城跡の概要	10
平成三年度確認調査（城跡西側尾根部分）	12
2. 調査の方法	14
第Ⅳ章 検出遺構	17
詰A区	17
B区	24
C区	30
D区	35
TR 1～6	36
第Ⅴ章 出土遺物	41
1. 軒丸瓦	41
2. 軒平瓦	42
3. 平瓦	42
4. 丸瓦	42
第Ⅵ章 まとめ	45
1. 遺構（石垣）と遺物（瓦）	45
2. 浦戸城の変遷	48

挿 図 目 次

Fig. 1 浦戸城跡位置図 …………… 1	Fig. 16 C-1石垣平面図・側面図・断面図 …………… 33～34
Fig. 2 浦戸城跡周辺地形図 …………… 3	Fig. 17 D区(D-1)平面図・側面図 …………… 37～38
Fig. 3 浦戸城及び周辺の城跡 …………… 7	Fig. 18 D区(D-2)石垣側面図 …… 39～40
Fig. 4 浦戸城古城跡図 …………… 11	Fig. 19 浦戸城跡縄張り図 …………… 47
Fig. 5 浦戸城跡試掘トレンチ位置図 …… 13	Fig. 20 軒丸瓦・軒平瓦・平瓦 …………… 52
Fig. 6 調査区全体図 …………… 15～16	Fig. 21 丸瓦(コビキA) …………… 53
Fig. 7 詰A区築山平面図 …………… 17	Fig. 22 “ …………… 54
Fig. 8 A-1石垣平面図 …………… 18	Fig. 23 “ …………… 55
Fig. 9 A-2石垣平面図 …………… 19	Fig. 24 丸瓦(コビキB-1) …………… 56
Fig. 10 A-3石垣平面図 …………… 20	Fig. 25 “ …………… 57
Fig. 11 詰A区南壁側面F …………… 21	Fig. 26 丸瓦(コビキB-2) …………… 58
Fig. 12 詰A区(築山)断面図 …………… 23	Fig. 27 “ …………… 59
Fig. 13 B-1区石垣平面図・側面図 …… …………… 25～26	Fig. 28 “ …………… 60
Fig. 14 B-2区石垣平面図・側面図 …… …………… 27～28	Fig. 29 平成三年度確認調査出土丸瓦 (完形・コビキA) …………… 61
Fig. 15 C区石垣平面図・側面図 …… 31～32	Fig. 30 “ 鯨 …………… 62

表 目 次

Tab. 1 軒丸瓦計測表 ……………	63
Tab. 2 軒平瓦計測表 ……………	63
Tab. 3 丸瓦・平瓦計測表 ……………	63～64

写真図版目次

- P L. 1 浦戸城跡航空写真全景（東より）
- P L. 2 ♪ 天守台・詰ノ段全景（真上）
 ♪ 調査対象地全景（南より）
- P L. 3 詰A区石垣
 ♪ A-1石垣（西より）
- P L. 4 ♪ A-2石垣（北より）
 ♪ A-3石垣（東より）
- P L. 5 ♪ 断面状況（南より）
 ♪ A-1石垣裏込め状況
- P L. 6 B区石垣全景（北東より）
 ♪ B-1-a石垣（北より）
- P L. 7 ♪ B-1-b石垣（南東より）
 ♪ ♪ 裏込め状況（北より）
- P L. 8 ♪ B-2-a石垣（北より）
 ♪ B-2-a, B-2-b全景（南より）
- P L. 9 ♪ B-2-a犬走り状張り出し部（南端隅角部）
 ♪ B-2-b隅角部
- P L. 10 C区石垣全景（北より）
 ♪ （南より）
- P L. 11 ♪ C-1石垣（東より）
 ♪ 石垣（東より）
- P L. 12 ♪ C-1裏込め状況
 ♪ 断面状況
- P L. 13 D区D-1（内壁）（東より）
 ♪ D-2（外壁）（北より）
- P L. 14 丸瓦（コビキA）
- P L. 15 ♪ （凹面）
- P L. 16 ♪ （コビキB）
- P L. 17 ♪ （凹面）
- P L. 18 丸瓦完形（コビキA）
- P L. 19 ♪

第 I 章 調査の契機と経過

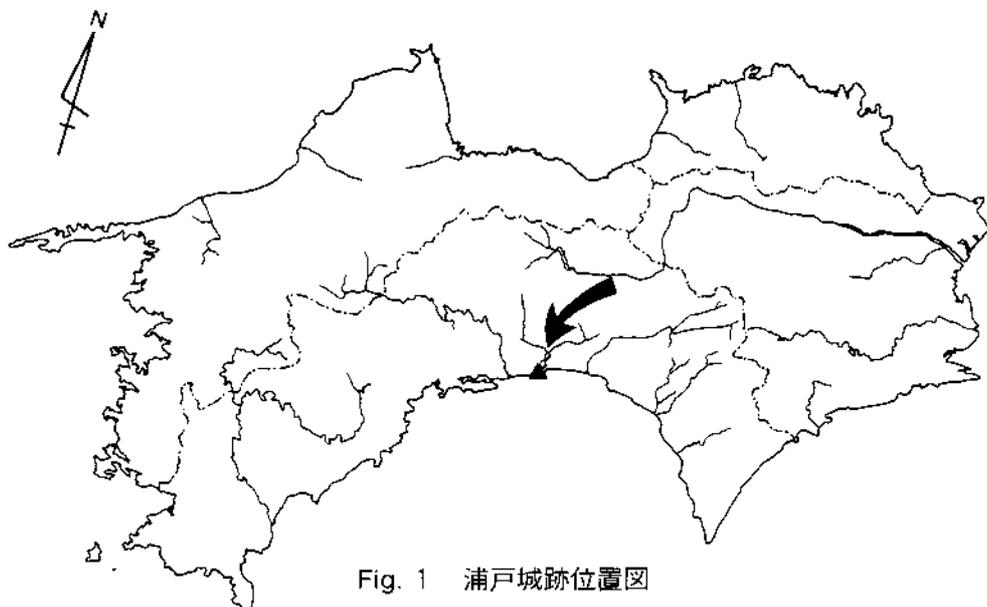
1. 調査の契機

浦戸城跡の所在する高知市は、高知県の中央部に位置し、東は南国市、北は土佐郡土佐山村・鏡村、西は吾川郡伊野町・春野町に接し、南は上佐湾に面する。北部には四国山地の前山である標高400～600mの山地が連なり、東部は高知平野の水田地帯が広がる。中央低地には鏡川が北部山地の西部から湾曲しながら東流し、市の中央部を流れ浦戸湾に注ぐ。

慶長年間に山内氏が入国して高知城を築いて以来、土佐藩の城下町として栄え、近代に入っても昭和29年までは県下唯一の市であったこともあり、古くから県の政治・経済・文化など県都としての中心的役割を果たしてきた。また、人口面でも県全体の約38%が高知市へ集中しており、人口は約32万人となっている。

こうした都市化により、各種の開発が押し進められている高知市は、現在、高知新港の整備、高知空港の拡張、本州四国連絡橋、今後の四国自動車道開通などの様々な変化に対して、県都としての役割を一層求められている。又、観光資源に恵まれている高知市では、年々増加をしている観光客数に対応するため宿泊施設等の整備を進めている。当城跡が立地している浦戸周辺も付近に「月の名所桂浜」があり、戦後、城跡の所在する山上を中心に各種の開発が進められてきた。当時の状況としては、開発に伴う事前の発掘調査は実施されていなかった。さらに、昭和47年には浦戸大橋が架橋したことにより、一層観光地としての開発が進んでいる。現在は、山上に坂本龍馬記念館、国民宿舎「桂浜荘」が立ち並び旧態を留めていない。

今回、調査の契機となった山上にある国民宿舎「桂浜荘」も老朽化に伴い、改築工事が行われることになった。このことから平成5年7月9日付けで、高知市から、国民宿舎「桂浜荘」改築工事に伴う立会調査の調査員の派遣依頼があり、同年8月12日に旧国民宿舎の築山部分を立会調査していたところ、コンクリートで固められていた築山の内側から石垣を検出した。急遽、高知市文化財保護審議会をはじめ、高知市教育委員会、ならびに関係各機関で石垣の現状保存のための協議を行



ったが、計画変更による保存は不可能であり、止むを得ず、国民宿舍敷地内に移設復元をすることとなった。築山の解体にあたっては、立会調査を行った。さらに、同年8月26日、計画敷地内の東側斜面部において掘削工事中に石垣と思われる遺構を発見、高知市教育委員会からの連絡を受け、現場に駆け付けたところ石垣の一部と思われる石材と裏込め栗石が露出していた。旧国民宿舍跡地であるため攪乱が著しく、城跡に関係する遺構が残っていないものと思われていた部分である。このため、高知市より確認調査の依頼を受け、確認調査を行っていたところ、計画敷地内の東側斜面部一帯及び南西部に石垣が存在することが判明した。このことから、文化財保護部局である高知市教育委員会、ならびに高知県教育委員会と、事業主体の高知市観光課、建築課及び、関係各機関との間での計画変更による石垣の現状保存のための協議が行われた。しかしながら、城跡の遺構である石垣が国民宿舍建築敷地内の大半を占めるため、この時点では計画変更は困難とみられ、止むを得ず記録保存を行うこととなった。以上の協議の結果、発掘調査は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり、高知市から平成5年9月24日付けで委託をうけて、調査を実施した。

2. 調査の経過

発掘調査は、平成5年8月から同年10月まで現地調査を行った後、引き続き平成6年度に整理作業を(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが受託し、平成7年2月まで整理作業及び報告書刊行の予定で開始された。発掘調査における(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの調査体制は次のとおりであった。

総括一埋蔵文化財センター所長 原 雅彦

調査事務総括一同総務課長一井上幸雄 調査事務一同主幹一三浦康寛

調査実務総括一同調査課長一明神陸起

調査担当一同調査2係長一森田尚宏 同調査員一吉成承三 調査第1係調査員一池澤俊幸

整理作業員 岡村真由紀

なお、整理作業には山中美代子・大原喜子・白木由里・門田美和子・大黒康子等の協力を得た。

発掘調査は、平成5年8月26日から確認調査を開始した。以後、酷暑の間を通じて調査を続けたが、遺構である石垣の規模が拡がりそうなるため、同年9月24日から発掘調査に切り替えた。9月10日に記者発表を、9月12日に現地説明会をそれぞれ行い、浦戸城跡の石垣が広く市民に伝わってからは、より一層保存を望む声が高まり、現状保存するため関係各機関の間で再三にわたる協議を行ったが、全ての石垣を現状保存することは困難であるということから、止むを得ず、取り壊される石垣については記録保存で対応することとなった。調査期間中は、秋雨、台風等の影響も受け調査工程に影響が出たことと石垣が広範囲にわたるため、遺構を含む全体測量は航空測量(株式会社アイシーに委託)で行った。同年10月13日遺構平面図及び、側面図の写真を航空測量によって無事に撮り終え、翌日、断面の調査を行うため石垣を部分的に取り壊す作業を行う予定であったが、急遽、建物の設計変更で大部分の石垣が保存できるようになった。このため、調査工程を変更し、国民宿舍建築に伴い、石垣が工事の影響を受けないように、土嚢を石垣の周りに積み、土を被せ埋め戻しを行った。

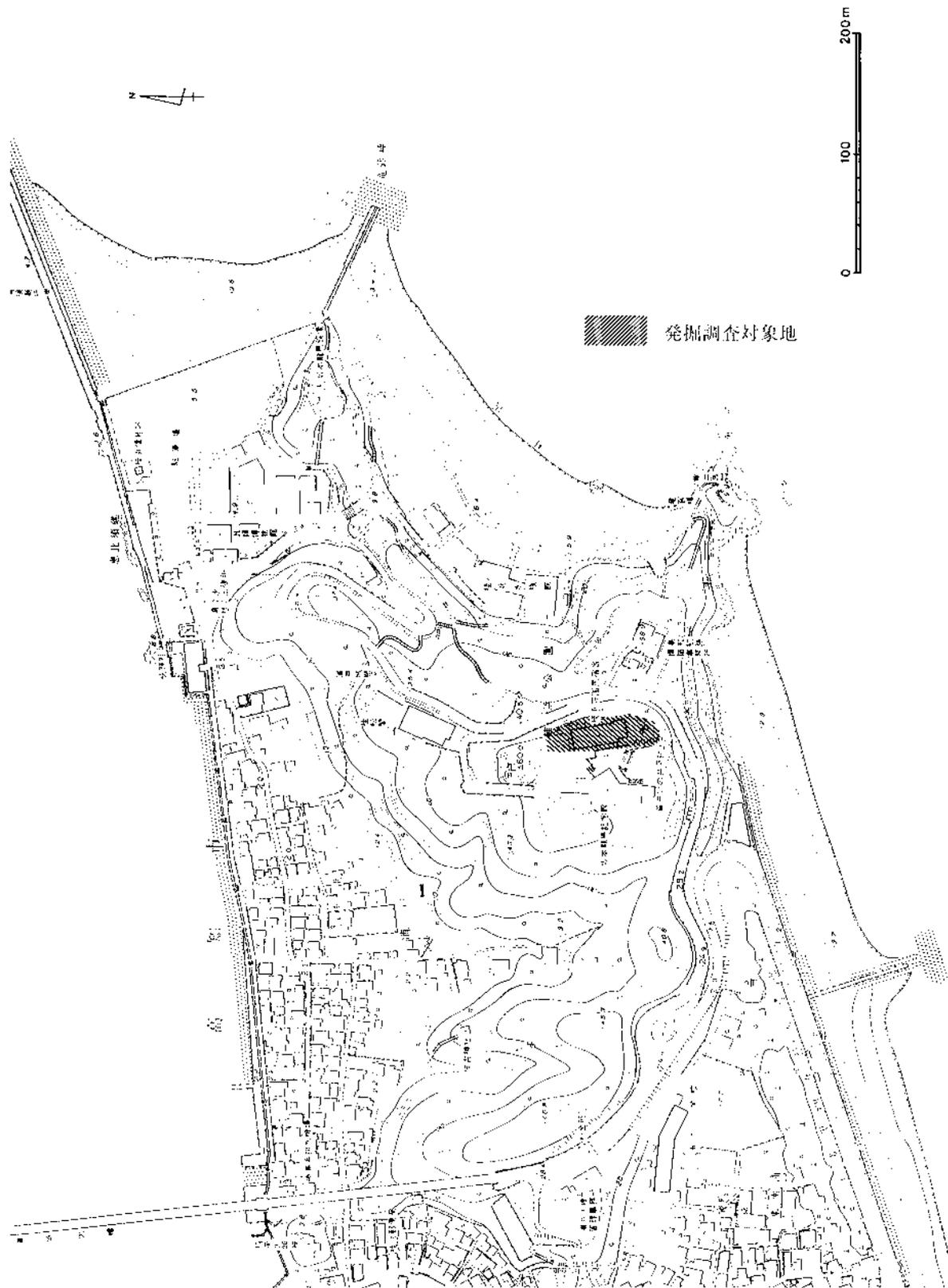


Fig. 2 浦戸城跡周辺地形図

こうして、市民の石垣の保存を望む熱意や、文化財保護部局と事業主体ならびに工事関係者の努力、そして「桂浜荘」設計者の協力により、石垣のほとんどが現状で保存されることとなり、平成5年10月27日埋め戻し作業を完了し、発掘調査を無事終了することができた。

3. 調査日誌抄

8月12日（木）

築山部分の立会調査を行う。築山側面において石垣を検出する。

8月13日（金）

築山部分石垣の側面図、及び平面図を作成する。

8月19日（木）

文化庁記念物課西田調査官が現地を視察にくる。

8月20日（金）

築山部分石垣を、移設復元のため取り外す。高知市文化財保護委員立会いのもと築山中央部を断ち割り、断面を調査する。



8月26日（木）

本日より、調査対象地東斜面の立会調査を行う。南北に伸びる石垣（B区）を検出する。

8月27日（金）

昨日に引き続き、B区石垣の精査を行う。B区北端隅角部を検出、石垣は西方に屈折し、伸びている。また、対象地中央部にトレンチを設定し調査を行う。旧国民宿舎跡地の攪乱が著しい。

8月30日（月）

調査のための、基準点を設置する。

9月1日（水）

本日より、B区石垣の側面図作成に取りかかる。また、調査対象地南東斜面際を踏査していたところ、城跡の石垣の一部と思われる石材を発見、部分的に重機により掘削してみると、B区から続く石垣は、さらに南に伸びるものと予想される。

9月6日（月）

午前中、現地にて高知市教委、県教委、埋蔵文化財センターと、高知市観光課、建築課と石垣を計画変更による現状保存について協議を行う。その結果、保存するために計画変更を行うことは不可能であるため、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

9月7日（火）

調査対象地中央部にトレンチ（TR1～3）を設定し、調査を行う。工事で既に削平を受けており攪乱されている。

9月10日（金）

記者発表を行う。

9月12日（日）

現地説明会を行う。市民ら約150名が参加。



9月13日（月）

C区側面図作成にかかる。

9月17日（金）

B区張り出し部分の測量，平面図1/20を作成する。

9月21日（火）

D区石垣外壁及び内壁の側面図を作成する。

9月25日（土）

文化財保護審議会の一行，現地視察。
中央公民館にて，浦戸城跡の石垣について，
審議会が行われる。

9月28日（火）

午後，滋賀県安土城郭調査研究所の木戸雅寿氏が現地を視察にくる。石垣についてご教示していただいた。

10月8日（金）

高知市教委，建築課，観光課と今後の調査工程について協議する。検出された石垣が広範囲に及び，測量に調査期間を費やすため遺構についての全測量を株式会社アイシーに委託，航空測量で行うことになった。また，記録保存のための発掘調査に係る作業については，現場工事業者の協力を得た。

10月12日（火）

本日より，石垣の清掃及び，部分的に検出作業を行う。

D区北側部分にトレンチを設定し，調査をする。その結果，旧国民宿舎の浄化槽による攪乱を受けており，D区石垣は北には続かない。また，調査対象地南斜面部も雑草を刈り上げた後，地表面調査を行った。

10月13日（水）

昨日に引き続き，航空測量のための清掃をこなう。

午後より，ラジコンヘリコプターによる空中撮影を行う。



10月14日（火）

昨日，空中撮影を撮り終え，本日より，側面図作成のための写真測量を行う。一部，断面の調査を行う予定であったが，急遽，建物を設計変更し，一部の石垣を除き，そのほとんどが現状保存されることとなった。

このため，調査工程を変更し，石垣が建築工事の影響を受けないように保存のための埋め戻し作業に切り替えるための協議が行われた。

10月18日（月）

建築工事の影響を受ける部分（C-1）の石垣を取り外す作業を行う。石垣の裏側の調査の後，地山を断ち割り，断面の写真測量を行う。

10月19日（火）

本日より，石垣の埋め戻し作業を行なう。石垣の周りには土嚢を積み，上からシートを被せた。C区においては，斜面部に矢板を打ち，間に土嚢を入れ，上から土を被せた。

埋め戻し作業は，一週間の予定で行なわれた。

10月27日（水）

本日をもって，全調査過程を終了する。



第Ⅱ章 城跡の位置と歴史的環境

1. 城跡の位置

浦戸城跡は、高知市の南端部にある浦戸字城山に所在し、浦戸湾口に西方から東へ突出した半島状の丘陵上に立地する。この丘陵は、独立丘陵であり、周辺には同様の標高40～50m前後を測る島状の丘陵がいくつか見られる。これらの丘陵は地質的にみれば、中央構造線の南、四万十帯北帯に属し、地層は、主に砂岩、泥岩互層のタービダイト層である。

地形的には、浦戸湾開口部の西側に位置し、東の種崎と湾開口部を包み込む様に東へ突出し、海峡を形造っている。城跡周辺の平地部は標高2m前後と低く、当城跡のある丘陵から西に伸びる浜堤が形成されるまでは、海、もしくは湿地帯であったと考えられ、当時の景観としては、城跡周辺は、自然の要害をなしていたものとおもわれる。浦戸城跡頂部からは、東方、西方それぞれに伸びる海岸線が一望でき、天候が良好な時には、高知県東端部にある室戸岬まで眺望が開ける。さらに、北方は浦戸湾、高知市街地まで眺望が開けており、城跡の立地としては良好である。城跡の東側は、眼下に「月の名所」で知られる桂浜があり、南には太平洋が広がっている。北側には、浦戸湾に開けた港があり、当城跡のある標高50m前後の丘陵によって強風が防がれ天然の良港になっている。城跡の斜面部はかなり、急峻であり、特に南斜面は急傾斜している。斜面部には自然林が生い茂り、北面にはいくつかの谷間がある。中でも、丘陵中央部の谷は深く切れ込んでおり、V字状形を呈する。この谷間の山裾部から浦戸湾に至るまで集落が開けている。西側から伸びる主な尾根は、現在、坂本龍馬記念館が建っている部分で分岐し、それぞれ北東、及び南東に続いている。西側尾根部は、浦戸大橋によって一部切断されているが、この切断されている部分から東の尾根状には連続して曲輪が存在しており、北東及び南東に続く尾根状にもいくつかの平担面がみられる。

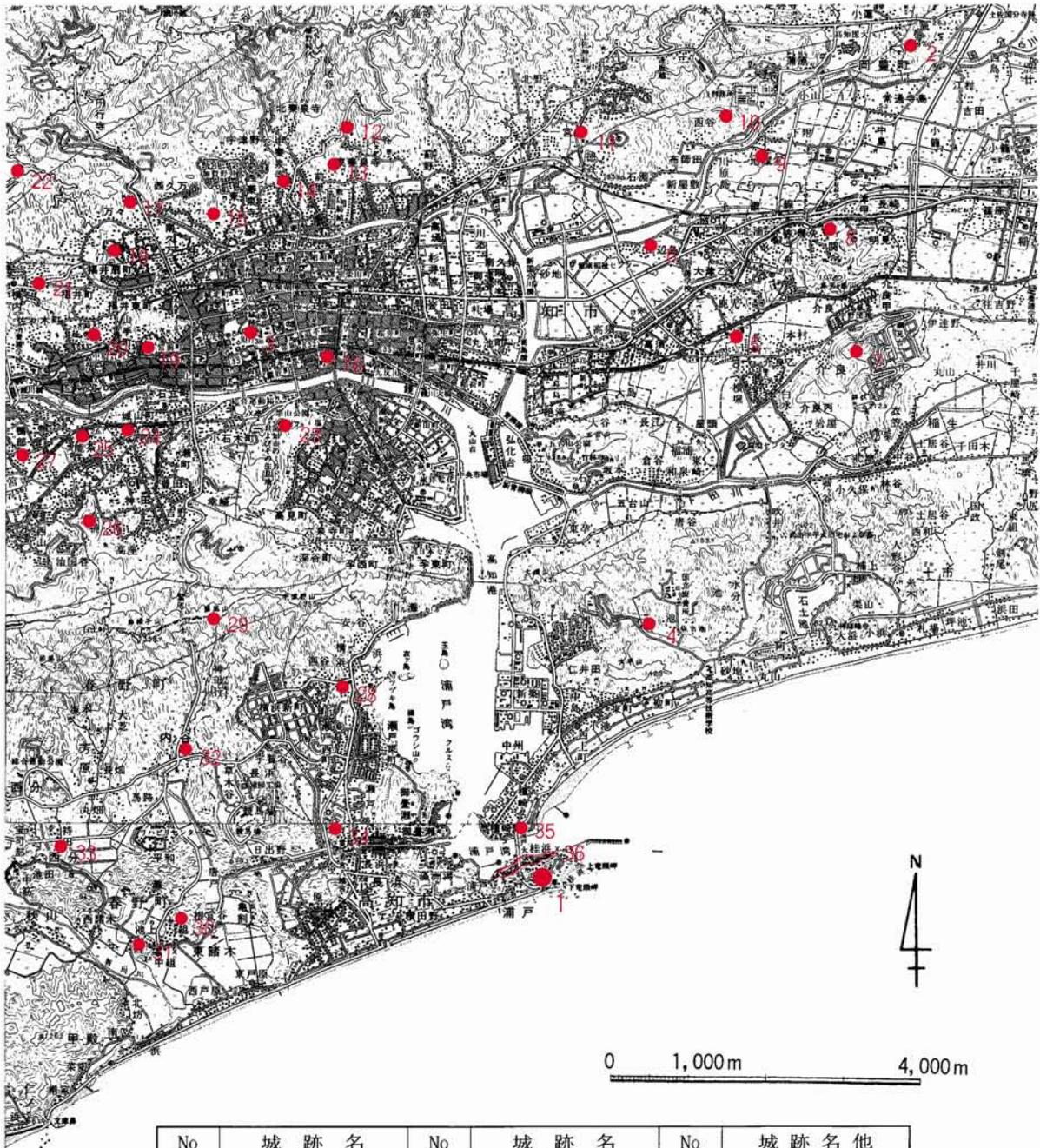
当城跡の立地している丘陵の北側山裾部には、浦戸城下町遺跡があり、浦戸湾を挟んで対岸には、種崎城跡が立地している。

2. 歴史的環境（浦戸城にかかわる歴史的背景）

浦戸城跡の存在を直接物語る史料としては、「土佐国竊簡集拾遺」第二に、建武三年（1336年）浦戸で南北朝の軍勢が合戦を繰り広げているという記載があるが、この文書は、南北朝時代に活躍した北朝方の佐伯氏に関する文書で、「佐伯文書」と呼ばれ、文中に「浦戸城」という記載はないが、「於浦戸」の地名がみられる最古の史料である。この時期、浦戸に土豪の「城」が存在していたかも知れないが、決め手となる史料はない。

ここでは、浦戸城跡にかかわる土佐の戦国時代を中心に歴史的背景を以下に記述していく。

戦国時代、室町時代の14世紀後半頃、土佐では守護領国体制が確立されてくる。土佐の守護は細川氏本宗家であったが、康暦二年（1380年）頃、守護代細川頼益は南国市田村に居館を構え、守護領国化を推進し、長宗我部氏を吸江庵（高知市五台山）の寺奉行として任じるなど、在地土豪を次々と勢力下に収めていった。しかし、四代細川勝益の時に応仁の乱（1467年）が勃発すると、勝益は京都の動乱に巻き込まれ、官領である細川政元の死亡などにより細川氏は、土佐より引揚げていっ



No	城跡名	No	城跡名	No	城跡名他
1	浦戸城跡	13	前里城跡	25	神田旧城跡
2	岡豊城跡	14	秦泉寺別城跡	26	神田南城跡
3	大高坂城跡	15	安楽寺山城跡	27	鴨部城跡
4	池城跡	16	国沢城跡	28	横浜城跡
5	鎌島城跡	17	万々城跡	29	鷺尾城跡
6	田部島城跡	18	喜武保宇城跡	30	東緒木城跡
7	介良城跡	19	井口城跡	31	雀ヶ森城跡
8	大津城跡	20	福井中城跡	32	内ノ谷城跡
9	布師田八頭城跡	21	福井別城跡	33	芳原城跡
10	布師田金山城跡	22	鴻ノ森城跡	34	長浜城跡
11	一宮城跡	23	潮江城跡	35	種崎城跡
12	秦泉寺城跡	24	石立城跡	36	浦戸城下町遺跡

Fig. 3 浦戸城及び周辺の城跡

た。これ以後、細川支配体制は崩れ、細川氏の保護を受けていた長宗我部氏は、苦況に立ち、地頭、国人層の自立が始まる。上佐における戦国時代の幕開けである。この時代、上佐国内には、安芸・香宗我部・山田・本山・長宗我部・吉良・大平・津野・一条などの諸氏が割拠し、現高知市域も乱戦興亡の場となった。

長岡郡本山（高知市から北へ約30km、現本山町）に本拠をもつ本山氏が高知平野に進出する。本山氏は朝倉城を拠点として勢力をのぼし、天文九年（1544年）には吾川郡弘岡（現春野町）の吉良氏を滅ぼして土佐、吾川両郡をあわせて土佐中央部を支配下におさめ、浦戸湾口に浦戸城を築いて重臣である本山玄蕃を配したのが城跡の基礎となっている。また、浦戸城の西北（約3km）にも長浜城を築いた。この頃について「元親記」には「本山梅慶領分は、東は一宮を堺、西は二淀川（仁淀川）、南は浦戸を限り二郡の主なり。朝倉の城を居城に持ち、息式部少輔は弘岡、浦戸両城を懸けて持つ」と記載されている。

一方、長宗我部氏は、応仁、文明の乱以降、細川氏の支配力が後退するとともに長宗我部氏の勢力も衰退し、十九代兼序の代には、周辺の本山・山田・吉良・大平氏の有力国人の攻撃を受け、拠城である岡豊城は落城する。しかし、その子国親は、幡多の一条氏のもとに逃れ、その後一条氏の救済もあり、永正13年（1516年）前後には岡豊城は再興される。それ以降、長宗我部の再興にのり出し、天文16年（1547年）頃、南の大津城を攻略し、続いて介良花熊城、下田城を落とし、十市細川氏、池氏らを帰服させ、天文18年（1549年）には、長岡郡南部から香美郡の一部を制圧した。その支城である種崎城が、浦戸湾を挟み浦戸城の対岸にあった。この種崎城への長宗我部氏の兵糧船を本山氏の兵が襲撃したのを契機に長宗我部国親は本山氏の支城である長浜城を攻め、本山氏の軍勢と長浜戸の本に戦うことになる。土佐、吾川両郡の本山氏、長岡、香美両郡の長宗我部氏が、浦戸湾に向かい真っ向から対戦することになった。その結果、戦いに破れた本山茂辰は浦戸城へ逃げ込むが、国親に敗られ長宗我部親貞が城監となった。その後、永禄3年（1560年）国親が急死し、元親が跡を継いだ。長宗我部元親は勢力を拡げ、天正3年には、上佐国統一を完成させ、さらに十年後の天正13年（1585年）には、四国全土を統一し四国の覇者となるが、その期間は短く、豊臣秀吉の征討軍と戦って敗れ、同年7月、元親は秀吉に降伏する。三国を没収され、土佐一国の領主になった元親は、秀吉のために領国経営に努力した。その後、本拠とする岡豊城から、近世城郭と城下町形成のために大高坂（現高知城）に移ったが、鏡川の水害など治水工事等に失敗し、天正19年（1591年）頃、再び浦戸城に移転した。以後、長宗我部氏滅亡までの約10年間、秀吉に従って物資を海路で輸送したり、朝鮮出兵や小田原征伐の時にも浦戸城から水軍を率いて遠征するなど、その本城としての役割を果たした。

慶長5年（1600年）、関ヶ原の戦いで西軍に味方をした元親の子である盛親は、国を没収され、土佐は、遠州掛川の山内一豊に与えられた。慶長6年（1601年）1月に浦戸に入城した。しかし、人回にあたり、長宗我部氏の遺臣を始め一領具足らが浦戸城に籠城し、徳川家康の命で浦戸城受け取りに向いた、井伊直政の家臣らと浦戸一揆を行なった。一豊はこれらの抵抗を排して、国内の要地に一門・重臣を配して支配体制をとった。

一豊は、浦戸の地が領国経営を行なう首都としては狭小であることから、城下町建設のために大

高坂の地を選び、慶長6年9月から高知城の築城に着手し、同8年（1603年）本丸の完成をまって移転した。ここに、浦戸城は廢城となった。

上記に登場してくる城郭の中で発掘調査が実施されたのは、吉良城（春野町）、岡豊城（南国市）、そして大高坂城（高知市）である。

吉良城跡は、吾川郡の国人である吉良氏の城であり、北嶺、南嶺を主郭に持ち畝型堅堀群や堀切・堅堀(註1)で構成される山城である。北嶺部分の調査が昭和59年度に行なわれ、掘立柱建物跡・柵列状ピット・集石群などが検出されている。さらに、昭和60～62年度調査は、土井の谷・大谷地区の平地部分(註2)の調査であり、土井の谷地区では、石垣遺構・柱穴群が確認されていることから、出土遺物を含めて考えると、周辺地域に長宗我部地検町に記載されている「御土居」が存在している可能性がある。

また、同じ春野町内に所在する芳原城跡では、平成2～4年度に行なわれた発掘調査で、二間×七間の大規模な掘立柱建物跡や、虎口・柵列跡・溝跡・土坑等が検出され、中でも虎口は「枳形」(註3)の構造を持つもので、全国的にも注目されている。出土遺物は15～16世紀代の土師器をはじめ、輸入陶磁器では白磁、青磁、柴付等が出土しており、その中で注目されるものとして赤絵の碗が一点出土している。また、昭和58年度調査の堀状地形部分の発掘調査で、明応2（1493）年銘の護符が出土している。(註4)

岡豊城跡は、昭和60年度から平成2年度まで6ヵ年にわたり調査が実施され、詰、三ノ段、四ノ段を中心(註5)に礎石建物跡や石垣等が検出されている。詰の礎石建物跡は石敷遺構が伴い、三ノ段の礎石建物跡は半間の束柱が検出されていることから重層建物が存在していた可能性がある。出土遺物は、土師質土器を中心に、国産陶器の備前焼・輸入陶磁器・瓦質土器・瓦類等である。その他注目されるものとして、天正3年刻銘の丸瓦片や懸仏として利用されたと考えられる金銅仏がある。

大高坂城は、平成5年度、6年度にかけて城の「御台所」部分の調査を実施している。報告書が未刊なので詳細はわからないが、発掘調査においては、出土遺物として近世陶磁器・瓦類(註6)が大量に出土しており、今後浦戸城で出土した瓦と比較検討する資料といえよう。

以上、主に発掘調査が実施された代表的な城郭を記述したが、高知市域には多数、城跡が存在するが、そのほとんどが後世の改変により消滅しており全容はわからない。しかしながら、大高坂城や今回調査を行なった浦戸城を含め、周辺地域の城郭を調査することによって得られた資料の蓄積により、徐々にではあるが、解明しつつある。

第Ⅲ章 調査の概要

1. 城跡の概要

浦戸城跡は、標高50m前後を測る丘陵上に立地しており、東西に伸びる尾根上に主な縄張りを形成している。

『皆山集』所収の吾川郡浦戸古城跡図 (Fig. 4) を見ると、丘陵東端の山頂部に長方形を呈した「本城」を構えている。「本城」は「一」とも書かれているが、周囲の主な曲輪に表記されている「二」・「二ノ下」・「三」・「三ノ下」等から推察すると「一ノ段」つまり「詰ノ段」を意味しているものと思われる。「詰ノ段」は、城山東端の最頂部にあり、標高52.7mを測る。東西方向に長軸を取る長方形の曲輪であり、南に向かって傾斜している。現在、坂本龍馬記念館、国民宿舎「桂浜荘」が建っており、縄張り上の広さは不明であるが、現状では平坦面の長さは東西約110m、南北は約63mを測る。この平坦部北東隅には「天守台」が残り、最頂部での標高は59.7mを測る。天守台は、東西11m、南北15mを測り、詰ノ段との比高差が7mと大きく、不正方台形を呈しており、現在は大山祇神社が鎮座する。斜面部には石垣の石と思われる石材が露出している所がある。天守台北側には、昭和33年に展望台がつくられ、斜面の一部が削り取られている。また、天守台から、やや下がりにながら南東に伸びる尾根は、国民宿舎敷地内で切断されており、長さ(南北)9.8m、幅(東西)8.8mで尾根の延長部の一部が残っており、現況では、周りをコンクリートで固め国民宿舎内の築山になっている。古図をみると、五間四方の天守台から南に詰ノ段の東限を区画するように土塁状の線が描かれているが、築山は、この土塁の一部であると思われる。また、詰ノ段北側及び、西側には土塁状の高まりの一部が『状に残されており、北西隅から天守台の方向へ高さ1.8~2.0mで長さ13m伸び、さらに、南へは高さ2.4mで長さ12.5m伸びている。双方とも、延長方向端部が切断されており、現在、駐車場になっている。

詰ノ段の平坦面南端から地形が南に向かって傾斜しており、南端部で標高46m前後を測る。坂本龍馬記念館を挟む様なかたちで、南に向かってややじ字状に地形が突出している。ひとつは、国民宿舎「桂浜荘」の敷地にあたる南東突出部であり、幅25m、長さ82m(敷地内にある築山からの距離)を測り、南方に傾斜している。古絵図をみれば、三間×三間、三間×五間の土塁状の線で区画され、詰ノ段から続く出丸のように描かれている。現況では、平坦面は国民宿舎の建物によって削平を受けているが、南部において石垣の石と思われる石材が露出している所がある。南斜面部は、現在の桂浜に続く県道により削り取られている。東斜面部は、自然林が生い茂り、一部斜面が削られているところもあるが、石垣に使われていたと思われる石材が点在している。

古図に描かれている「詰ノ段」南部には、三段で構成される「石垣」状に書かれた部分があり、それぞれの段には「水」と表記されており、井戸もしくは水利施設が存在していた場所である。その場所の一部に「首洗いの井戸」があったとされている部分があるが、現在、坂本龍馬記念館が建っており、原形は不明である。この部分の西側に詰ノ段から続くもう一方の出丸がみられるが、現在は駐車場になっておりその性格は不明である。

また、古図によれば上記の東側出丸から東方に伸びる尾根上に二間×二七間の「二」と表記され

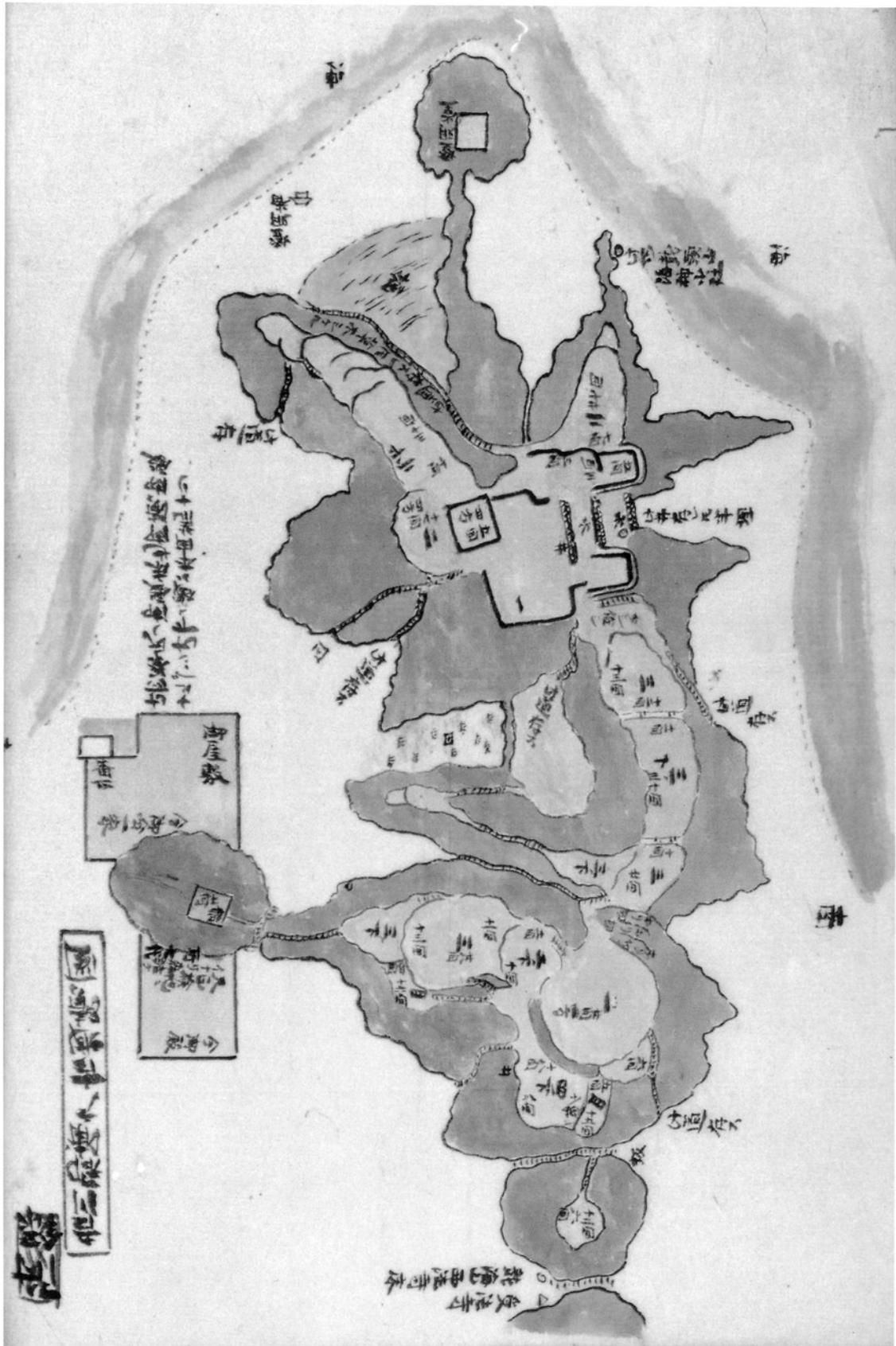


Fig. 4 江戸城跡図
 (吾川郡江戸古城跡図『皆山集』所収 16×27cm 彩色 高知県立図書館蔵)

ている「南二ノ段」があるが、現在の灯台が設置されている場所であり、曲輪は削平されてその原形を留めていない。この南二ノ段から南東にある竜王岬まで傾斜しながら尾根が伸びる。「二」と記載されている部分は、天守台北側下にもみられるが、先述したように展望台がつけられたことにより、大きく削平されており、それに続く「二ノ下」も現在、宿泊施設が建っており原形は留めていない。

城跡の西域部にあたる西側出丸から西北方向に伸びる尾根上には、連続した平坦面が見られ、古図によれば、「二」・「二ノ下」・「三」・「三ノ下」・「四」・「四ノ下」と表記された曲輪が続いている。西側尾根部については、平成三年度に公有化に伴い公園に整備する計画があり確認調査が実施されている。内容の詳細は以下に記述する。

平成三年度確認調査（城跡西側尾根部分）

浦戸城跡については、観光地である桂浜に隣接していることから、戦後、各種の開発が行われてきたところであるが、当時の状況としては、開発に伴う事前の発掘調査は実施されていなかった。さらに、坂本龍馬記念館の建設においても、桂浜ヘルスセンターの跡地であったことから立会調査として確認が行なわれたが、城跡としての遺構は発見されなかった。その後、浦戸城跡の西域部の公有化に伴い公園としての整備が行なわれることとなり、事前の確認調査が実施されることとなった。

城跡の西域部は、本城から西に伸びる尾根上に、古絵図によれば「二」・「二ノ下」・「三」・「三ノ下」・「四」・「四ノ下」と記載される曲輪が連続的に続いており、西郭部の中心となる「二」の曲輪と本城とをつなぐ「三」の曲輪との間には三条の堀切が見られた。この堀切は、「三」の曲輪側のものが上部幅4.4m、底部幅1m、深さ1.9mを測り、中央に幅0.8mの土橋がある。また、堀切の北側には谷にかけて短い堅堀となる。中央堀切は上部最大幅6m、底部幅1.4m、深さ（最大）1.8mを測り、堀切の北側には短い堅堀がみられる。中央部には幅80cmの土橋がある。「二」の曲輪側の堀切は、上部幅5m、底部幅1.6m、深さ1.6mで、他の堀切に見られる土橋はない。また、「三」の曲輪の南辺部には割石をやや盛った土塁状の地形も見られたが、観光道路建設時に部分的に削られていた。「三」の曲輪から本城に伸びる尾根筋はこの観光道路と北側は崩落により幅が約1mほどしかない。

調査は、現地が雑木林に覆われており、現況確認が正確に把握出来ないため、伐採から実施された。調査の方針としては、各曲輪を中心に、公園整備計画に合わせて遺構の確認を行い、極力現況の改変は避けることとした。調査方法としては、幅2mのトレンチを曲輪の状況に応じて任意に設定し、確認を行なった。トレンチは、西端の「四」及び「四ノ下」にAとB、「三」と「三ノ下」にC～Hと合計8カ所を設定し、調査面積は240㎡であった。以下に各トレンチの調査状況を述べる。

Aトレンチは西端の竹林に設定された十字形のトレンチであり、表上下は地山であり遺構は検出されず、近現代の陶磁器片が出土したのみである。BトレンチはAトレンチ東の小段であり、Aトレンチと同じく表上下は地山であった。遺構としては、トレンチの西端部に浅い掘り込みを伴う集石が1基確認され、拡張したが伴う遺物はなく、時期は不明である。遺物はやはり西端部付近で出土しており、染付、白磁、備前、土師質土器、瓦片、鉄釘が若干見られた。C～Eのトレンチは、

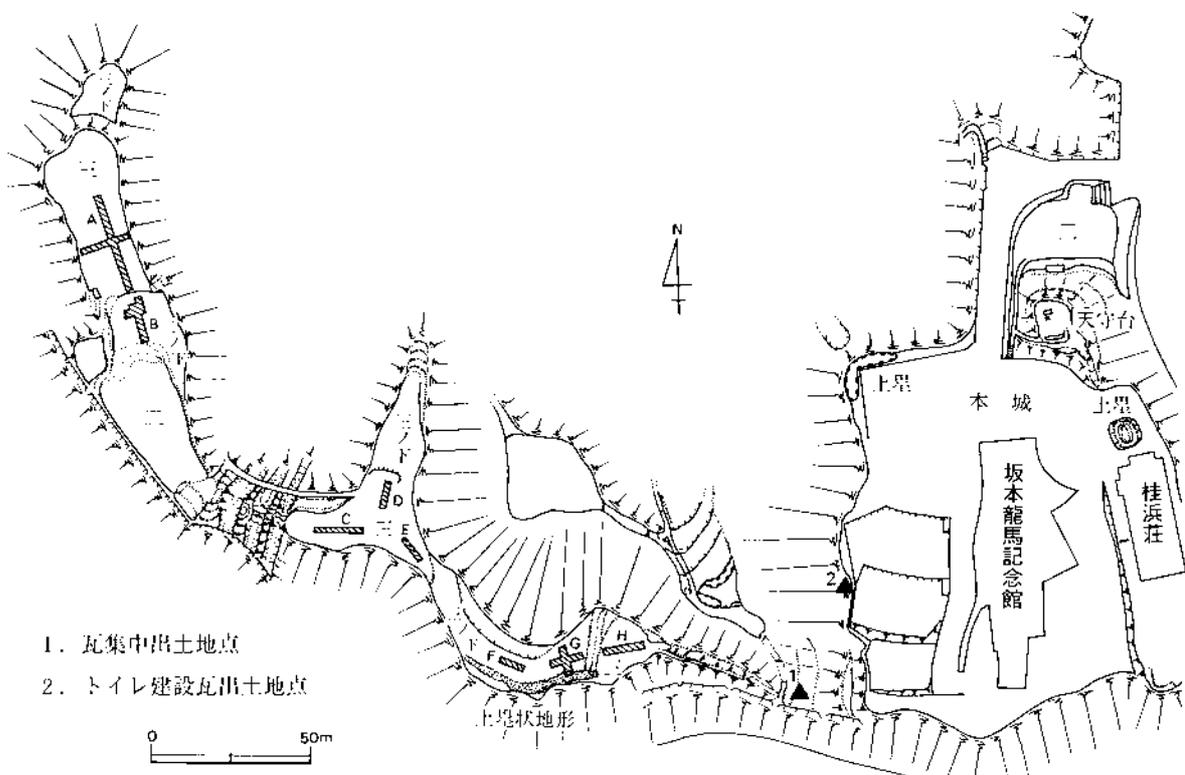


Fig. 5 浦戸城跡試掘トレンチ位置図

堀切の東、「三」及び「三ノ下」に設定したトレンチであるが、やはり表上下は地山であり、遺構、遺物は検出されなかった。F・Gは「三」の東に続く「三ノ下」のトレンチであり、Gトレンチは十字形でその南端部は土塁状の地形にかかっている。両トレンチともに表土下は地山であり、遺物は、Fトレンチから若干の瓦片と鉄釘が出土しているのみである。遺構は、Fトレンチにおいて1.4×1.1m、深さ0.4mの方形土坑1基が検出され、壁面は焼けていた。埋土中には炭化物、焼土、焼礫が混入しており、瓦片も2点出土しているが、埋土の状況等からみれば近現代の遺構であろう。Gトレンチの中央部では浅い皿状の落ち込みが検出されたが、内部には岩盤礫が多量にみられ、遺物は出土しなかった。また、南辺部の土塁状地形も上部の集石下は地山であり、土塁としての盛土は確認出来ず、後世に周辺部の礫を集めたものと考えられる。Hトレンチは、本城西の「三」の曲輪に設定したトレンチであるが、他のトレンチ同様に表土下は地山であり、遺構、遺物は発見されなかった。

以上のように、各トレンチともに表土下は地山であり、遺物包含層もなく、遺構もBトレンチの集石1基のみであり、当城跡西域部の各曲輪は後世に削平を受けたものと考えられる。また、トレンチ以外の出土ではあるが、瓦がまとまって出土している。瓦の出土地点は本城から、「三」の曲輪へ降りる西斜面部であり、本城端部から約21mほど下がったやや緩斜面である。この地点のみに約2mの範囲に黒色土がみられ、瓦はこの黒色土中からまとまって出土しており、おそらくは本城

からの流れ込みではないかと思われる。瓦は合計65点出土しており、軒丸瓦3点（1点は三巴文の瓦当）、丸瓦36点（2点はほぼ完形）、平瓦25点であり、他に注目されるものとして、半裁竹管状工具の刺突により魚鱗を表した鱗とみられる破片が1点確認されている。さらに、後日、瓦の出土地点から北に約30mの地点で坂本龍馬記念館の駐車場のトイレ建設中に鱗の目玉の部分と考えられる破片も1点採集されている。これらの瓦の詳細については、遺物の項で述べるとして、本城自体はほとんど破壊されているが、本城周辺の斜面部には、部分的に瓦類を含んだ土層（黒色土）が残されているものと考えられる。

（森田 尚宏）

2. 調査の方法

今回、国民宿舎「桂浜荘」の改築工事区域内において発見された石垣部分を中心に調査区を設定した。調査区設定のため便宜上、古絵図に記載されている「詰ノ段」東側にあたる部分であり、立会調査中に石垣が検出された築山部分を詰A区とし、改築工事中に石垣が発見された東側出丸にあたる部分をB区・C区・D区の小区に分けて仮称することとし調査を実施した。

調査対象範囲は、国民宿舎敷地内全域であるが、対象地中央部は旧国民宿舎の建物が既存しており、その建物の解体工事及び、掘削工事の影響を受け大きく削平されていた。そのため、発掘調査は主に対象地東側斜面部一帯、及び南西部の一部について行った。また、中央部分については、トレンチ（TR1～6）を設定し部分的に調査を行った。対象地南東部、C区の延長部にあたる東側斜面部は排土の処理関係と斜面部の伐採許可の問題で、今回は調査は不可能であった。また、南斜面についても斜面下部に観光道路があり斜面が急傾斜しているため、斜面部一帯に落石防止用のネットが張られており発掘調査は不可能であったため、斜面の雑草を刈り地表面の精査に止まった。

調査方法は、各調査区に任意の基準点を設置し、建築設計用に使われている基準線からトラバース測量を行ない基準点を算出し、磁北を北とする測量座標系へ座標変換を行なった。遺構測量のための基準線は、公共座標第IV系の北から西へ $6^{\circ}-20'-00''$ 振っている。

石垣検出については重機を使用し表土を除去した後、人力により石垣の石面、及び上部の精査を行なった。検出された石垣については、平面図を航空写真測量で実施し、側面図、及び一部石垣を取り外すことになったC-1区の石垣断面図を地上写真測量で行ない、縮尺1/20、1/40の平面図、側面図及び石垣全体図1/100を作成した。なお、詰A区については、石垣側面図、断面図及び、築山平面図をそれぞれ縮尺1/20、1/40で必要に応じて現地で作成した。

今回の調査で検出された石垣は、そのほとんどが現状保存されることとなり、詰A区を除く、B、C、D区の石垣については、調査終了後、国民宿舎の建築工事の影響を受けないように土嚢を積み、土を被せ埋め戻しを行ない現況に復した。

発掘調査は、詰A区の立会調査から始まり、引き続きB-2-bの工事中に偶然発見された石垣部分から、東側斜面部を中心に調査を行なった。その結果、東側出丸を区画する石垣が東側斜面部一帯（B、C区）、及び対象地南西部（D区）に石垣が既存していることが判明した。

調査の概要については、次章、検出遺構の中で各調査区ごとにその概要について記述する。

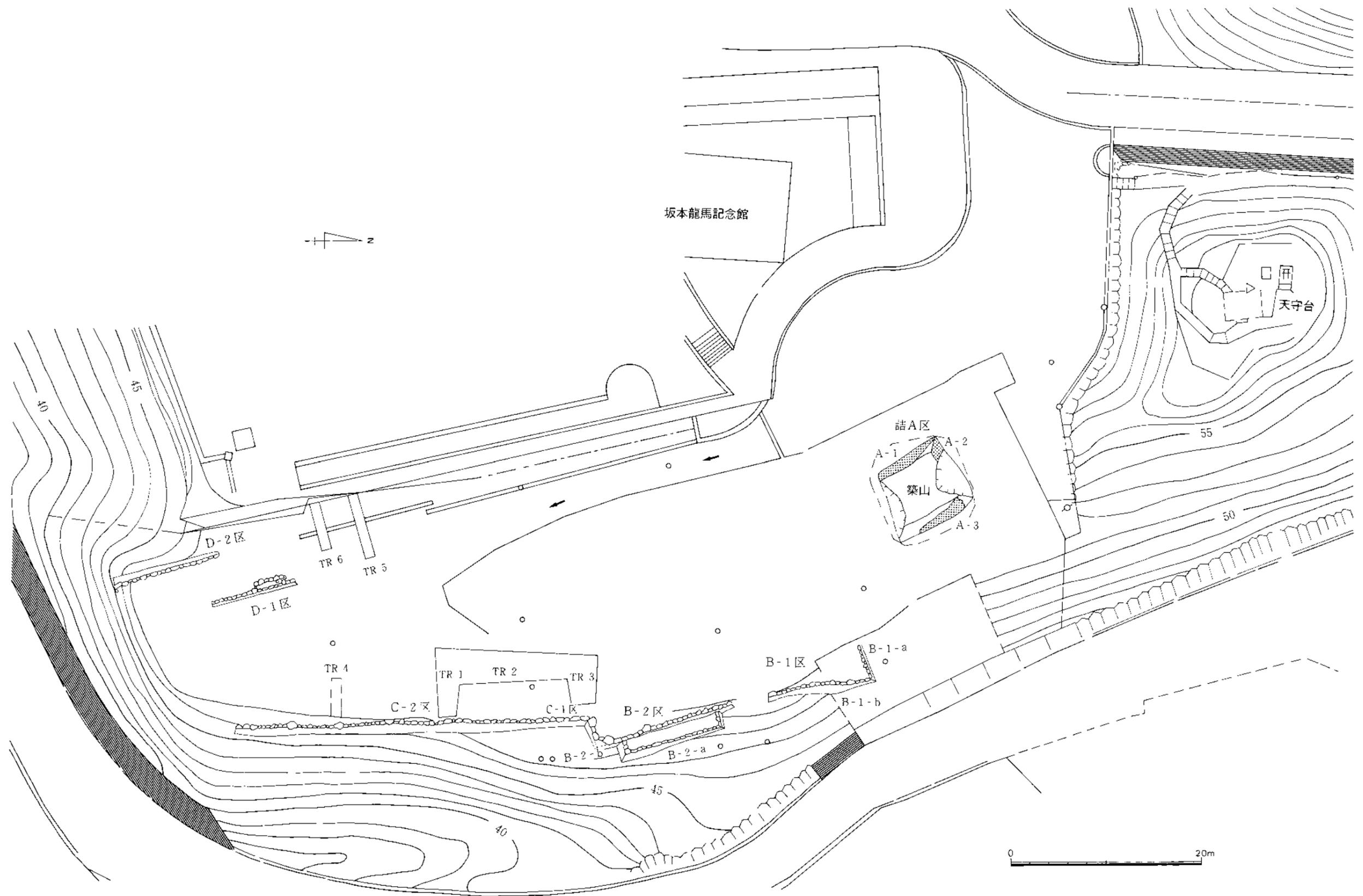


Fig. 6 調査区全体図

第Ⅳ章 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、「詰ノ段」の東限、及び東側出丸を区画する石垣群である。ここでは、各調査区ごとに概要と検出された石垣について以下に記述していく。

A区（詰ノ段東側部分）

「詰ノ段」の東側部分にあたる調査区である。標高51.737mを測る。当初、立会調査を行う前は、現況で旧国民宿舎の築山として存在していた。築山は、天守台の方向から南に延びる土塁状の延長部にあり、南北9m、東西7m、高さ3mを測る。下部はコンクリートで固められており、上部には樹木が植えられていた。下部のコンクリートを除去すると、裏側から瓦礫混じりの土の中から石垣の石が露頭し、その部分から築山の側面の精査を行った。その結果、築山の西壁、北壁、東壁において石垣を検出した。いずれの石垣も上部は攪乱が著しく、上方は崩壊している。

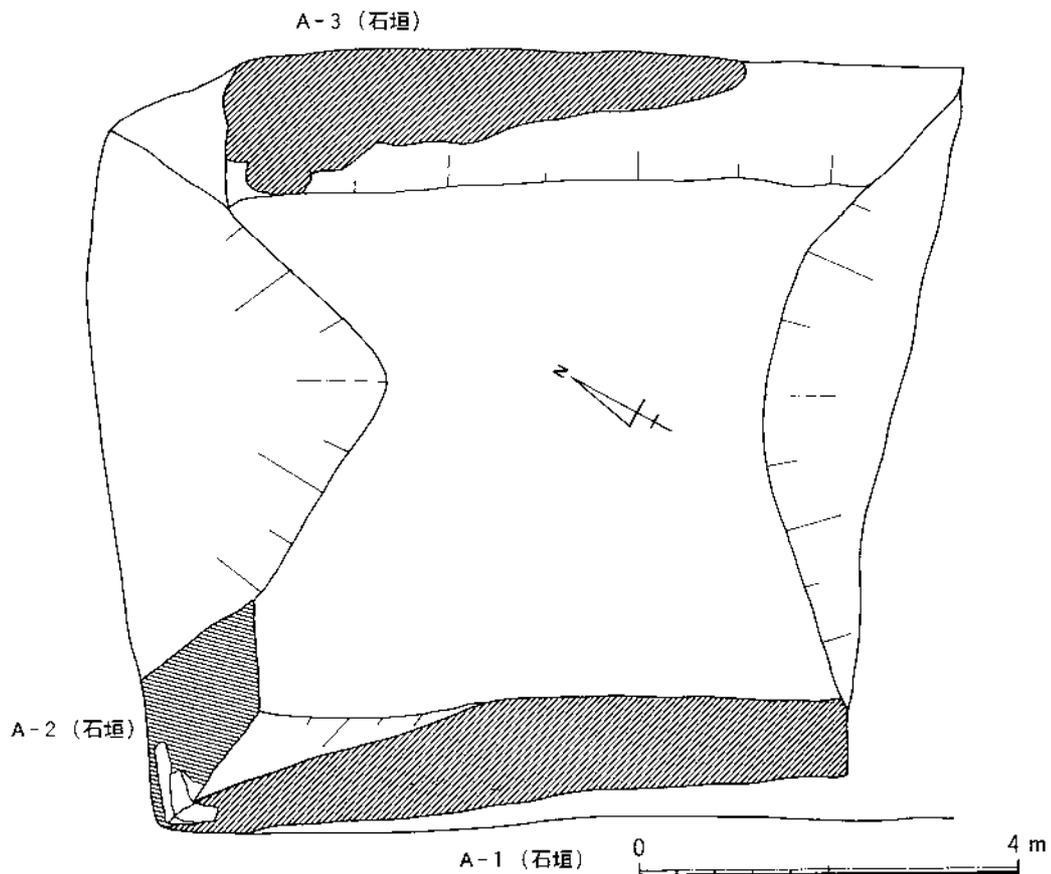


Fig. 7 詰A区築山平面図

A-1 石垣（西壁）

全長8.32m、高さ1.08～1.78mを測る。北端の北壁石垣との隅角部は「算木積み」状に構築している。これは、根石上の第1石を根石よりも前に突き出し、安定させた後、石材の小口と長側面を交互に配置している状態である。この隅角部より石垣は東方に折れる。構築方法は野面積みであり、

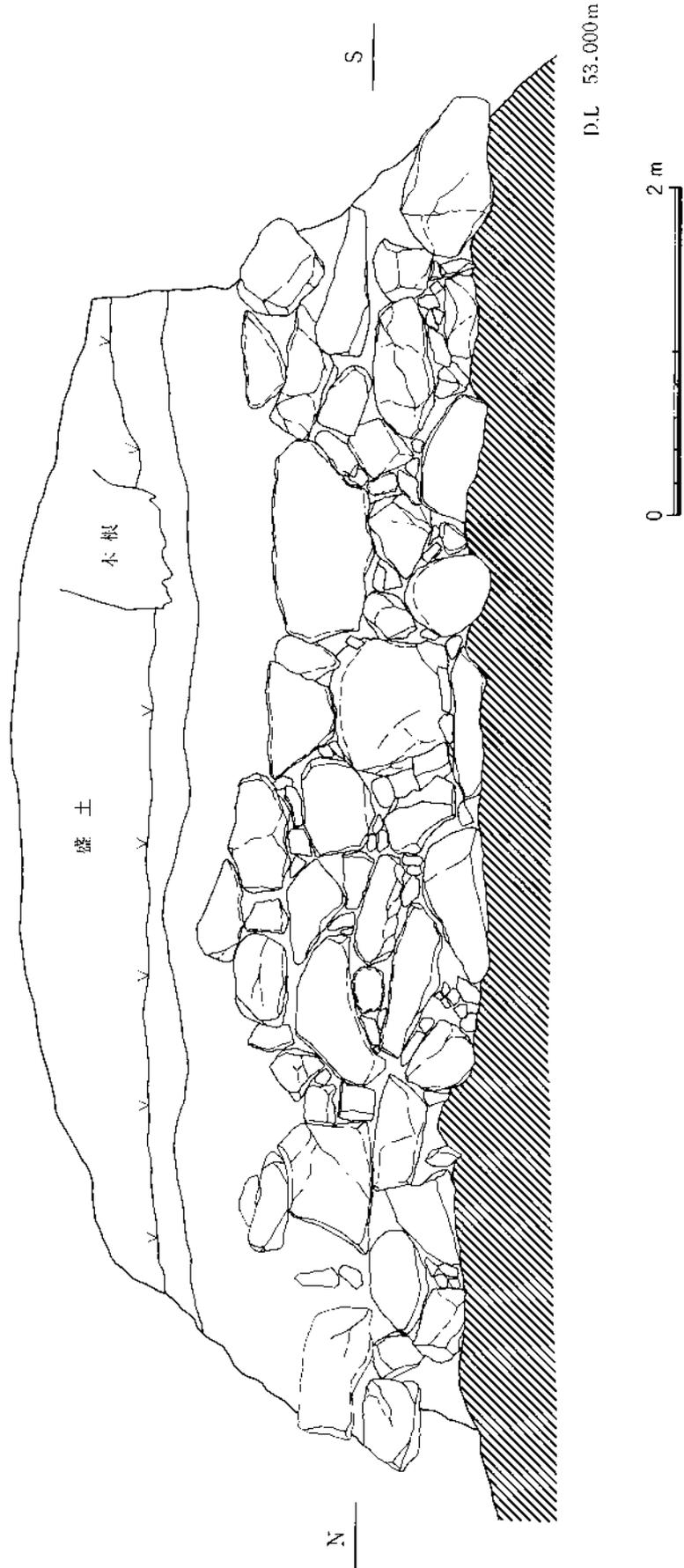


Fig. 8 A-1 石垣側面図

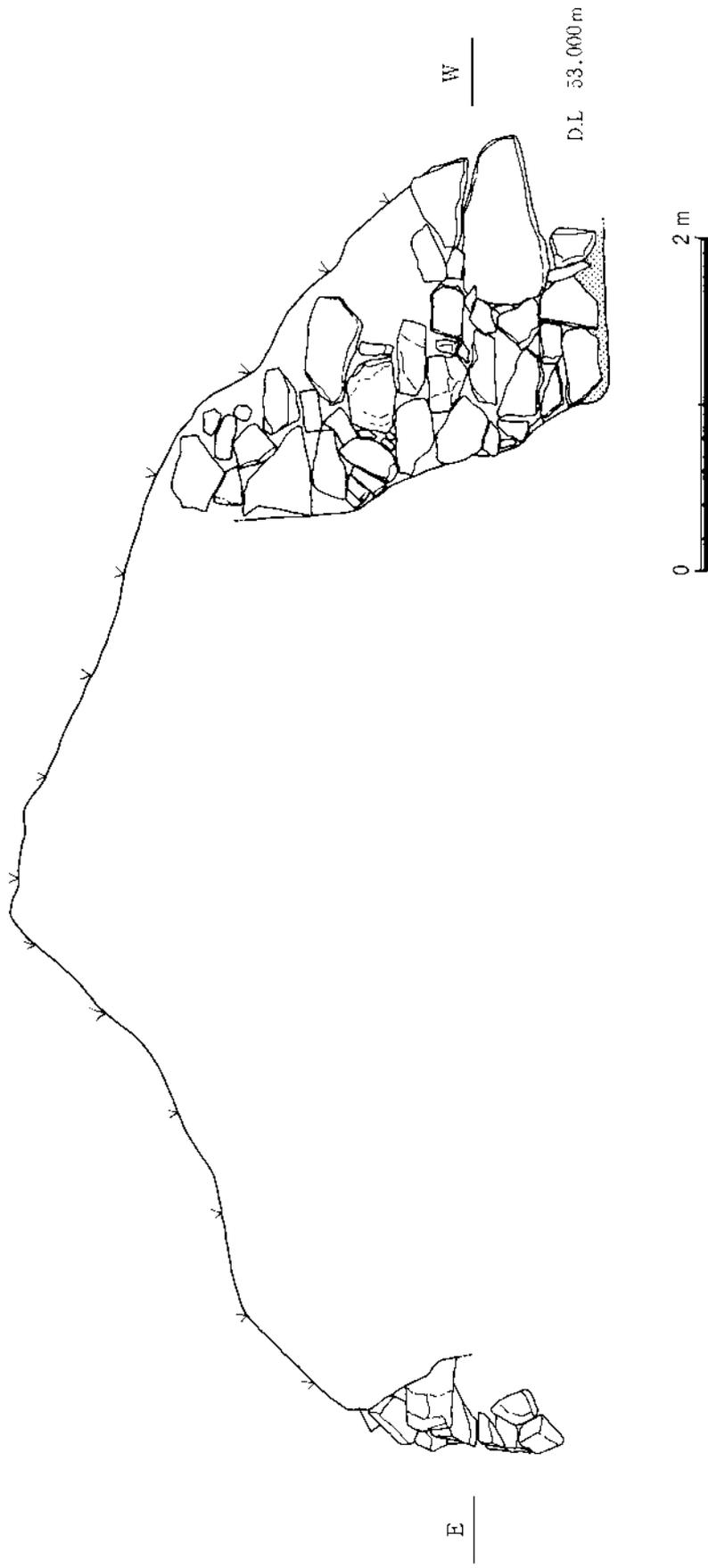


Fig. 9 A-2 石垣側面図

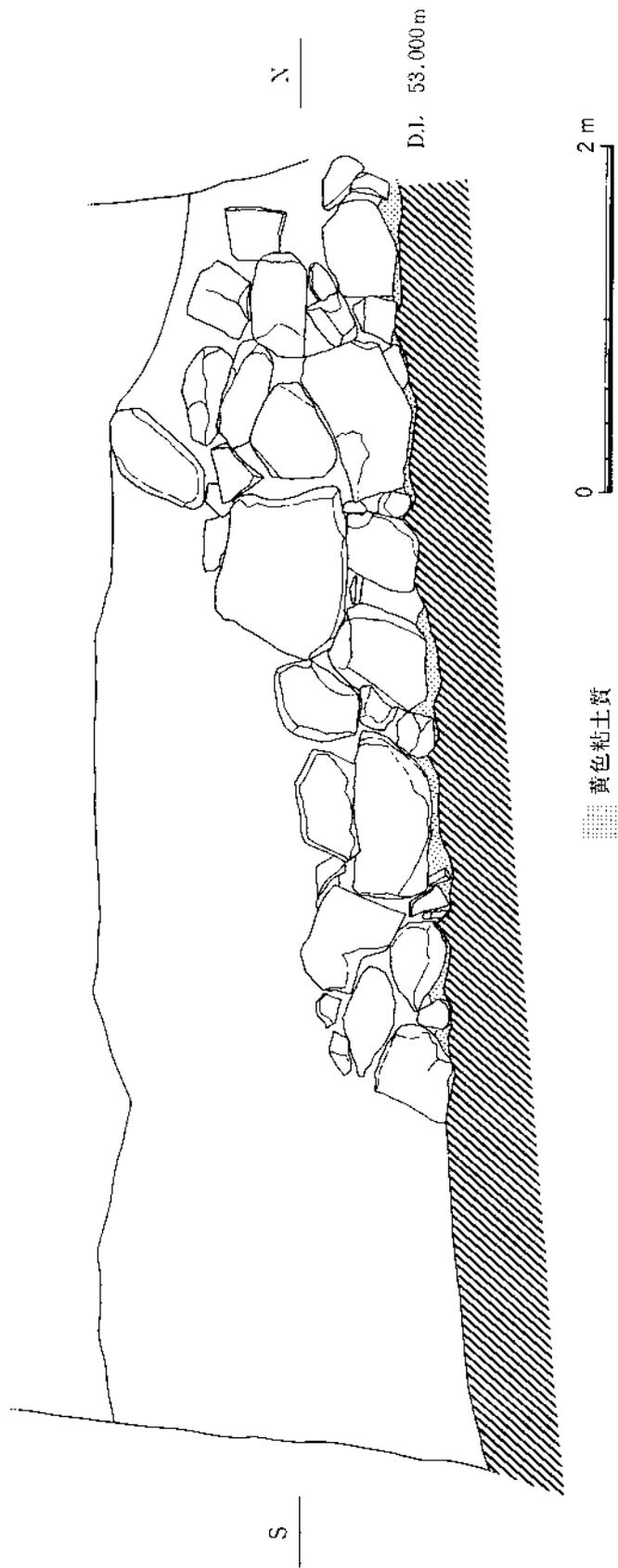


Fig. 10 A-3 石垣側面図



Fig. 11 詰A区南壁側面図

石材間に小詰め石を用い、やや勾配を持たせて積み上げている。

石垣に用いられてる石材は、一辺の長さが0.40~1.20m内外の大小様々な自然石であり、石質は全て砂岩質である。小詰め石も同様の砂岩質の石が用いられ、石材間に隙間なく詰めている。

北から南へ3.80mの所で築山の断面を見ると (Fig. 12), 石垣を構築する際に地山を削りだしており、根石下端部は、ほぼフラットに成形している。石尻から背面地山までの幅は1.0mを測り、10~20cm前後の栗石を詰めている。栗石として使われている石は、石材と同様の砂岩質であり、石材を加工する際にできる剥片と思われる。また、裏込めには瓦片も混入しており、特に北端隅角部において集中して出土した。裏込めの幅は、南壁セクション (Fig. 11) で見られる様に、南端部では根石部分で薄くなる。このことは、旧地形が、北から南に向かって傾斜しているものと考えられる。

A-2 石垣 (北壁)

全長1.90m、高さ2.56mを測る。A-1 石垣 (西壁) 北端隅角部から東方に折れる石垣である。隅角部は、根石上の第3石が欠けているが、第1石、及び第2石を「算木積み」状に構築している。使われている石材は、40~60cm前後のものが多く、隅角部を除いて、他の石垣に比べて小さい。全て砂岩質の石であり、小詰め石も同質の石材を使用している。

根石部分は、比較的小さめ (40cm前後) の石材を使用し、床面には地山の土に比べてやや軟質の黄色土を敷いている。この黄色土は、A-1 石垣には認められない。

北壁セクション (Fig. 9) を見ると、西端隅角部より東へ2.28mの所で石垣は切れているが、断面では裏込めが認められない事から、A-1 石垣から続く石垣は、ここで終焉するか、もしくは、北方にある天守台に伸びるものと考えられる。

A-3 石垣 (東壁)

全長5.56m、高さ0.84~1.70mを測る。南北両端部とも欠損している。上部も攪乱しており、根石上第2石までしか残存していない。

石材は、他の石垣と同様の砂岩質の石を用いており、野面積みである。A-1、A-2 石垣に比べ、一辺が1m前後の比較的大きい石材を用いている。また、小詰め石も、他の石垣に比べ小量である。根石は、他の石垣に比べ均整のとれた配列をしており、床面には、A-2 石垣で見られるような黄色土が部分的に認められる。地山のレベルは、北端部と南端部では34cmの差があり、南に向かって、傾斜している。

裏込めの状況は、北端部より3mの所で築山の断面を見てみると (Fig. 12), 石尻から削りだした地山までの厚さは70cm前後をはかり、栗石を入れている。栗石の大きさは、A-1 石垣に比べ20~30cm前後のやや大きめの石を用いており、石質は、石垣の石材と同様、砂岩質の石である。石の控えは50cm前後であり、根石と根石上第1石の臙面 (石面の裏側) には、臙介石 (臙面を受けるための石) を詰めている。また、築山の断面をみると、厚さ15~20cm前後で黒褐色を呈する腐食土層が認められるが、現地地形同様、東斜面に向かって傾斜しており、裏込め部分で切れていることから、

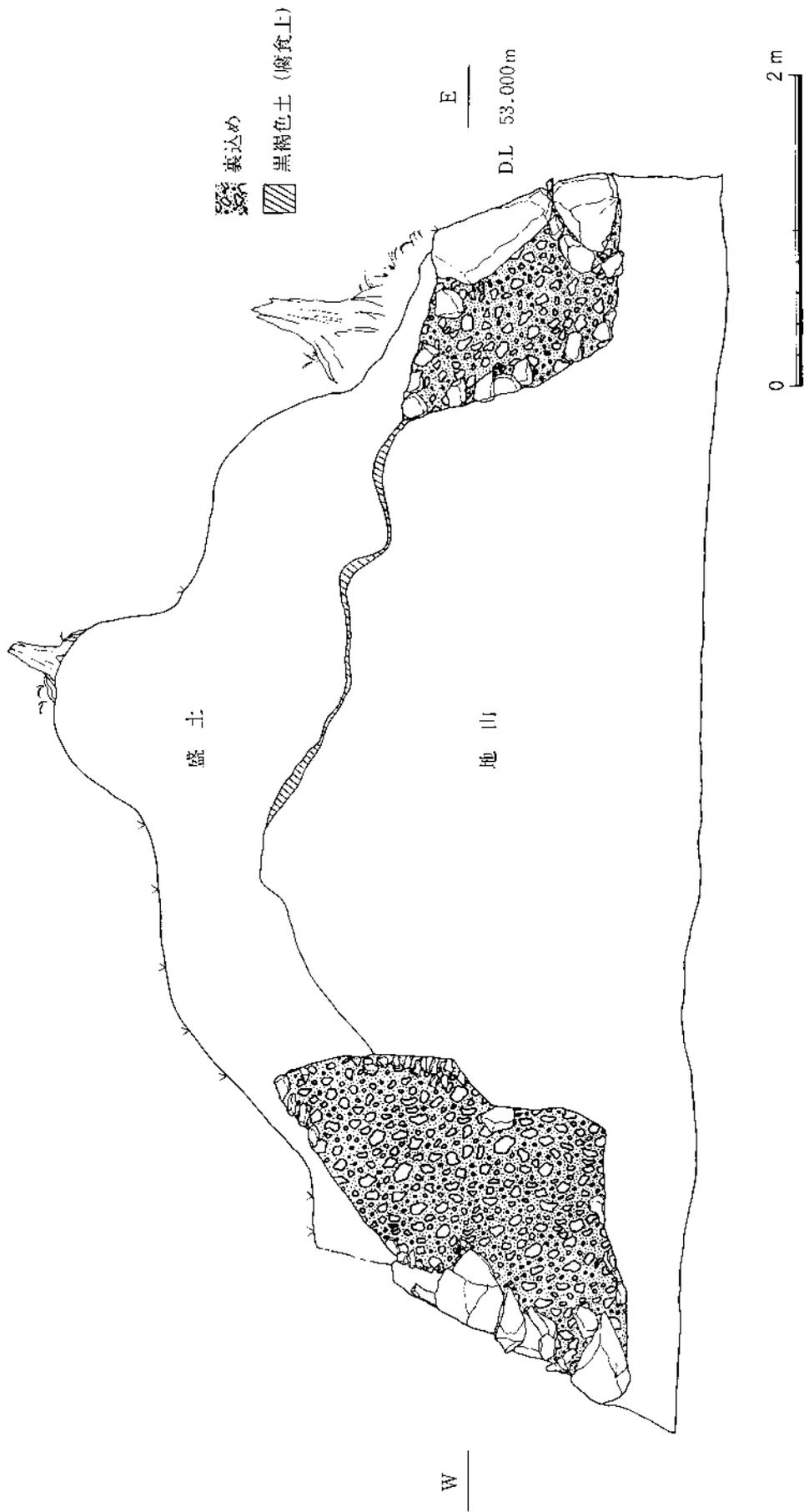


Fig. 12 詰A区(築山)断面図

石垣は旧地形斜面部の地山を削って構築されたものと考えられる。

B区（東側出丸部分）

東側出丸の東斜面部にあたる調査区である。標高46.000m前後を測る。旧国民宿舎改築工事中に石垣が偶然発見された調査区である。建物の基礎工事部分（B-2-b）で、石垣の石材と思われる石を発見、その部分から調査対象地の東側斜面部を中心に精査を行った。その結果、検出された石垣は、東側斜面部に存在し、上方は攪乱を受け欠損しているが、基部が南北に続いている。検出された石垣の背面は工事の影響を受け削平されていた。

北端隅角部では、ほぼ直角に西方に屈折し（B-1-a）、4.60m延びた所で切れている。また、北端隅角部から南に続く石垣は（B-1-b）、南へ10.82mの所で一端切れているが、この地点より南では、全長10.94m、幅1.5mの「犬走り」状の張り出し部を伴った石垣（B-2-a）が続いている。B-2-a南端部より、西方に屏風折れのように2回屈曲しているが、屈曲部の角石が一部欠損している。

ここでは、B区において検出された石垣をそれぞれの仮称ごとに以下に記述していく。

B-1-a（Fig. 13）

全長4.64m、最大高1.95mを測る。B区北端隅角部から西方に延びる石垣である。真北より、西方へ $115^{\circ}-55'-40''$ 振っている。

地山は、石垣の東隅角部と、西端部の比高差が2.15mあり、傾斜角 25° で東方に下がっている。石垣は、野面積みで構築されており、様相は詰A区A-1石垣に類似する。根石部分は50～70cm大の比較的小さめの石材を用いており、根石上第2、3石で安定を持たせている。石材間には小詰め石を多く用い、隙間なく詰めている。

隅角部根石上の一番角石からうえは欠損しているが、一辺が75cm～1m前後の安定性のある割り石を用いており、根石と一番角石の間には、小詰め石を用いて安定させている。

使われている石材は全て砂岩質であり、石材の大きさ及び構築の様相等からみればA区「詰ノ段」との関連が窺える。

B-1-b（Fig. 13）

全長11.5m、最大高2.3mを測る。B区北端隅角部から南方に延びる石垣である。真北より、西方に $8^{\circ}-16'-10''$ 振っている。

B-1-aから続く石垣は北端隅角部で南方へ屈折し、11.5m延びた所で一端切れている。地山は北端隅角部から南に向かって 11° の傾斜で上がっている。北端隅角部とB-1-b南端部との比高差は、2.35mあり、南端部地山で標高47.200を測り、出丸部分東壁においていちばん高くなる所である。

石垣の勾配は、現存している部分でB-1-aと同じく 20° 前後傾いている。

根石に使われている石材は、石面の長軸が横になるように配置しており、一辺が1m前後を測る

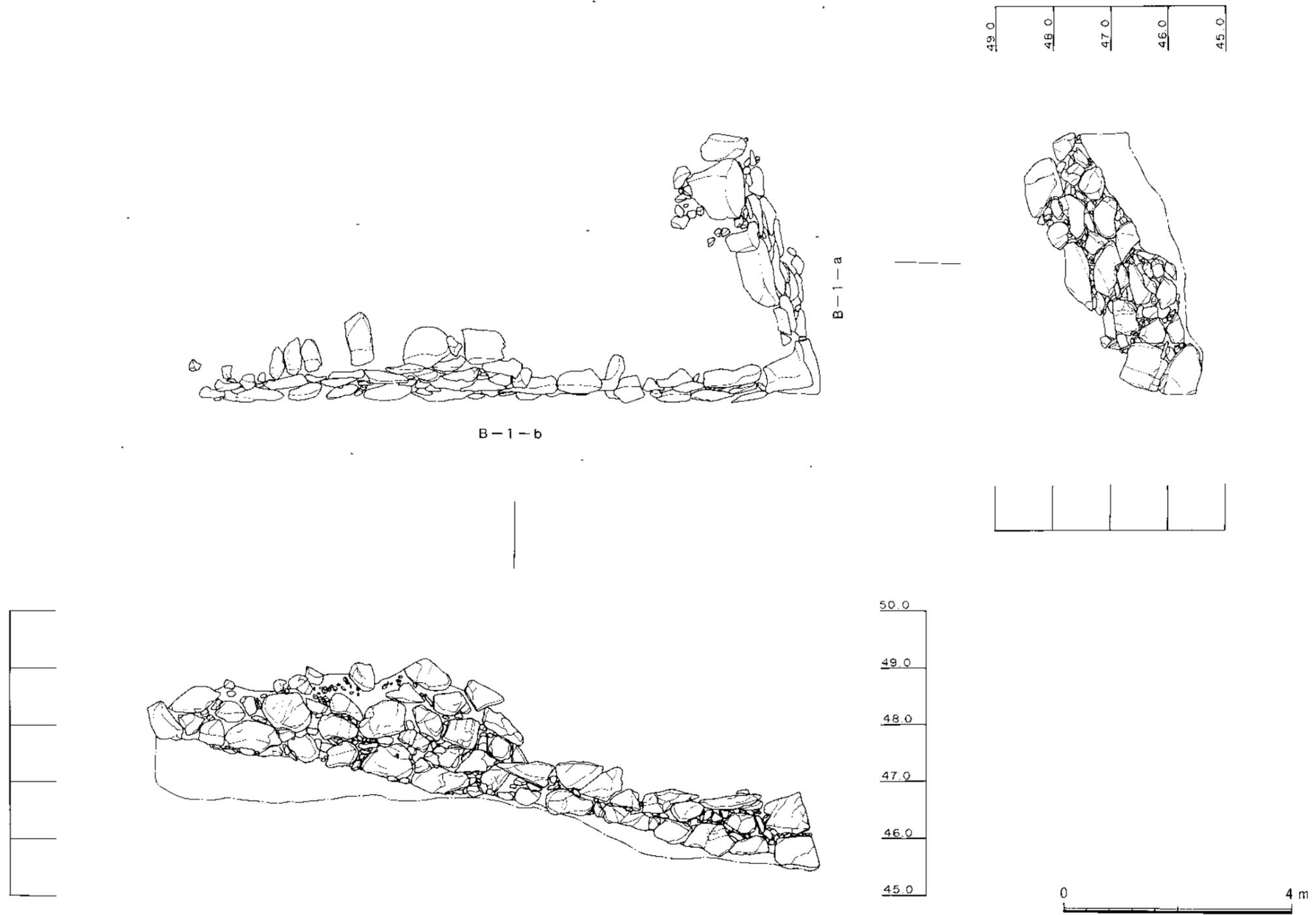


Fig. 13 B-1区石垣 平面图, 侧面图

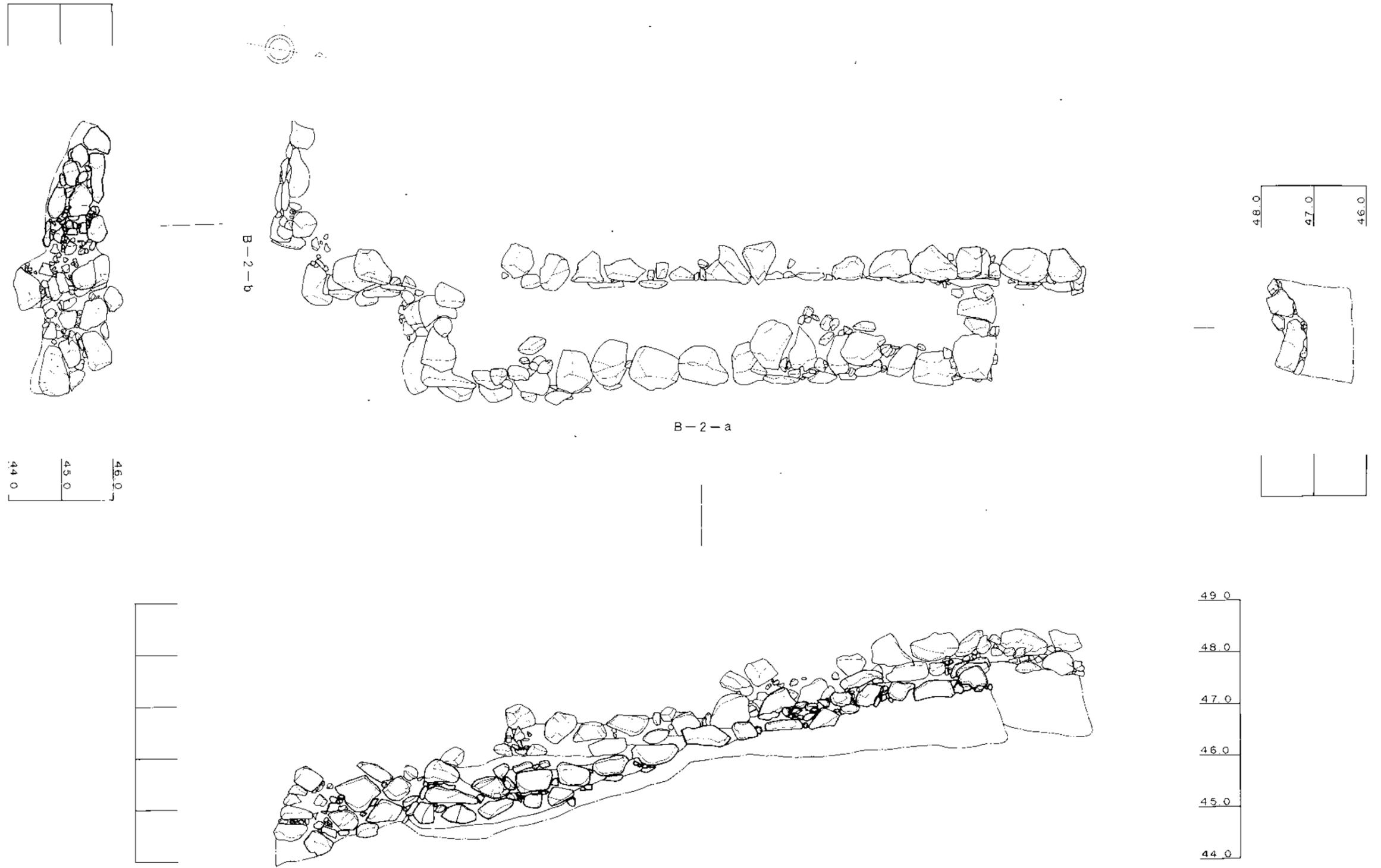


Fig. 14 B-2区 石垣 平面図, 側面図

0 4 m

石材を使用している。全体的にみて、大小の平石がバランスよく配石されており、根石部分以外の石材もその長軸が横になるように積み、間には小詰め石を隙間なく詰めて安定性のある野面積みになっている。

使われている石材は全て砂岩質である。

B-2-a (「犬走り」状張り出し部) (Fig. 14)

全長15.6m、最大高1.35mを測る。B-1-bから南に延びる「犬走り」状の張り出しを持つ石垣である。真北より、西方に $16^{\circ}-27^{\circ}-50^{\circ}$ 振っている。

北端部より1.5mの所から南に向かって「犬走り」状の張り出し部が続く。張り出し部分は、全長10.94m、基底部幅1.1~1.5mを測る。地山は、傾斜角 13° で南に下がっており、南端部で標高44.300mを測る。又、張り出し北端隅角部から南に8.15mの所から、南端隅角部まで地山と根石部の間に黒褐色を呈した腐食土が認められる。石垣の残存状況は悪く、根石及び根石上第1石までしか残っていない。張り出し部分南端隅角部は、「算木積み」状に構築している。使われている石材はほとんどが砂岩質であるが、チャート質の石材が1石みられる。張り出し基底部上面は、裏込めに使われる栗石が露出している部分があるが、全体的に、固く締まった黄褐色土が敷かれており上面を整地しているものと思われる。根石に使われている石材は、石面の長軸が横になるように据えておりその様相はB-1-bに類似する。

張り出し部内側の石垣は、北端部が攪乱の影響で切られているが、基軸方向及び構築方法等から北に存在するB-1-bに続くものと思われる。根石部分は張り出し部同様、石面の長軸が横になるように据えており、根石上は、攪乱を受けており存在しない。使われている石材はほとんどが砂岩質であるが南部分で小詰め石にチャート及び、石灰岩が使われている箇所が認められる。

B-2-b (屈折部) (Fig. 14)

全長3.59m、最大高1.20mを測る。B-2-aから西方にほぼ 90° 屈折する石垣である。国民宿舎の基礎工事のために掘られた部分であり、深掘りをしているトレンチの断面を観察してみると、地山は、東側斜面部に向けて急激に落ち込んでおり、旧地形が谷状地形であったことが窺える。

屈折部の隅角部は、工事の影響で欠損しており、角石の様相は解らないが、残存している角脇石との間隔から推定すると、一辺が1m前後の石材が使われていたと考えられる。角脇石は、根石及び、根石上第1石に、石の控えが60cm前後のチャート質の石材を用いている。

角石裏側には、裏込め栗石が露出しており、ほとんどが砂岩質の石材の剥片であるが中には石灰岩も僅少ではあるが認められる。欠損している隅角部の根石にあたる部分は、地山を削りだして成形しており、根石下端部の地山の標高は44.250mを測る。ここから地山は、傾斜角 22° で西方に向かって上がっており、西端部の根石下端部での標高は45.450mを測る。

石垣の上部は、攪乱を受け明確でないが、根石及び根石上第1、2石に使われている石材は、角脇石を除いてほとんど砂岩質である。他の石垣に比べ、B区南部において砂岩質以外の石材が用いられている。

C区（東側出丸南東部）

東側出丸南東部にあたり、B区より南方に続く石垣が検出された調査区である。標高は南端部の石垣の下端部で43.00m前後を測り、やや南方に傾斜している。高さ1～2mで調査対象地東側斜面部に構築されており、調査区南端まで続いている。B区とC区の変換点で地形は谷部になっており、東側斜面は急峻で自然林が生い茂っている。B区で検出された石垣と比べると、基軸はやや東方に振っている。

一部、記録保存を行うことになった部分（C-1）は、C区の北端部（B区との変換点）にあたる根石を除き第2石めから南に長さ4mの範囲である。取り外しを行うことになった石垣の石材には番号を付し、石材を取り外した後、裏側の状況及び、断面の調査を行った。

ここでは、記録保存を行った箇所を（C-1）、そこから南に延びる石垣を（C-2）と仮称しそれぞれの石垣について記述する。

C区全体の石垣の長さは、34.55mである。

C-1（Fig. 16）

C区北部、建物の基礎工事の影響を受ける範囲約4mの部分である。最大高1.10mを測る。

使用されている石材は、他の調査区の石材にみられるようなような石面を揃えた割り石ではなく、砂岩質の自然石をそのまま使っており、やや粗雑である。

根石は、一辺が80cm～1m前後の比較的大きめの石材を用いており、石面の長軸が横になるように据えている。石垣の上部は残存していないが、根石上の第1石も比較的大きめの野面の平石を横になるように積み上げている。

石材間に詰められている小詰め石は、他の調査区の石垣に比べ疎らである。又、その大きさも均一でなく、やや入念さにかける。

地山は、傾斜角7°で南に向かって緩く傾斜している。地山と根石の間には、黒褐色を呈した腐食土層が認められる。石垣を取り外した裏面は、北端部より2.25mの所から南端にかけて地山が極端に落ち込み、裏込め栗石が顕著である。根石1石しか残存していない北部は、上部の攪乱により栗石は疎らである。

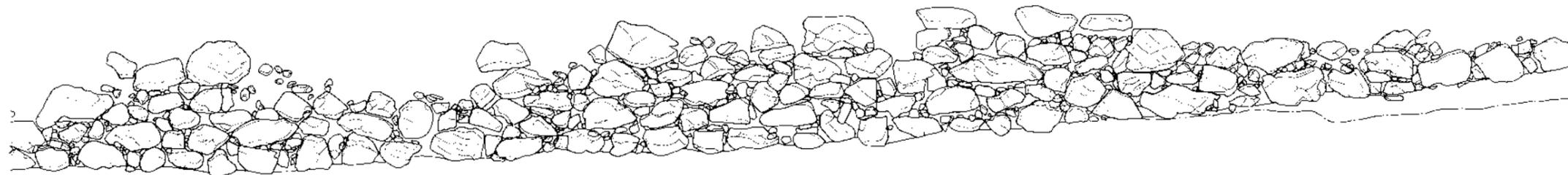
北端より5mの所で断面を見ると、根石に使われている石材は、控（石材の長側面）が80cmの砂岩質の石である。根石下端には、介石（臙介）を敷いており、根石上第1石との石尻の間にも石を安定させるための臙介を詰めている。根石は控の長い石材を用い石尻側を上げている。根石上第1石には控40cmの短めの石材を用い、その上の第2石目の石尻を下げ第1石目を根石と挟み込むようにして安定をもたせている。裏込めは、第2石目の石尻から裏側の地山までの幅が1.32mを測り、その間に石材の剝片と思われる栗石を隙間なく詰めている。裏込めの中からは、栗石に混じって丸瓦・平瓦の破片が出土している。地山をカットして石垣を構築しており、根石下面には黄褐色を呈した粘性土を敷いている。

C-2（Fig. 15）



C-2

C-1



46.0
45.0
44.0
43.0



0 4 m

46.0
45.0
44.0
43.0
42.0

Fig. 15 C区 石垣 平面图, 侧面图

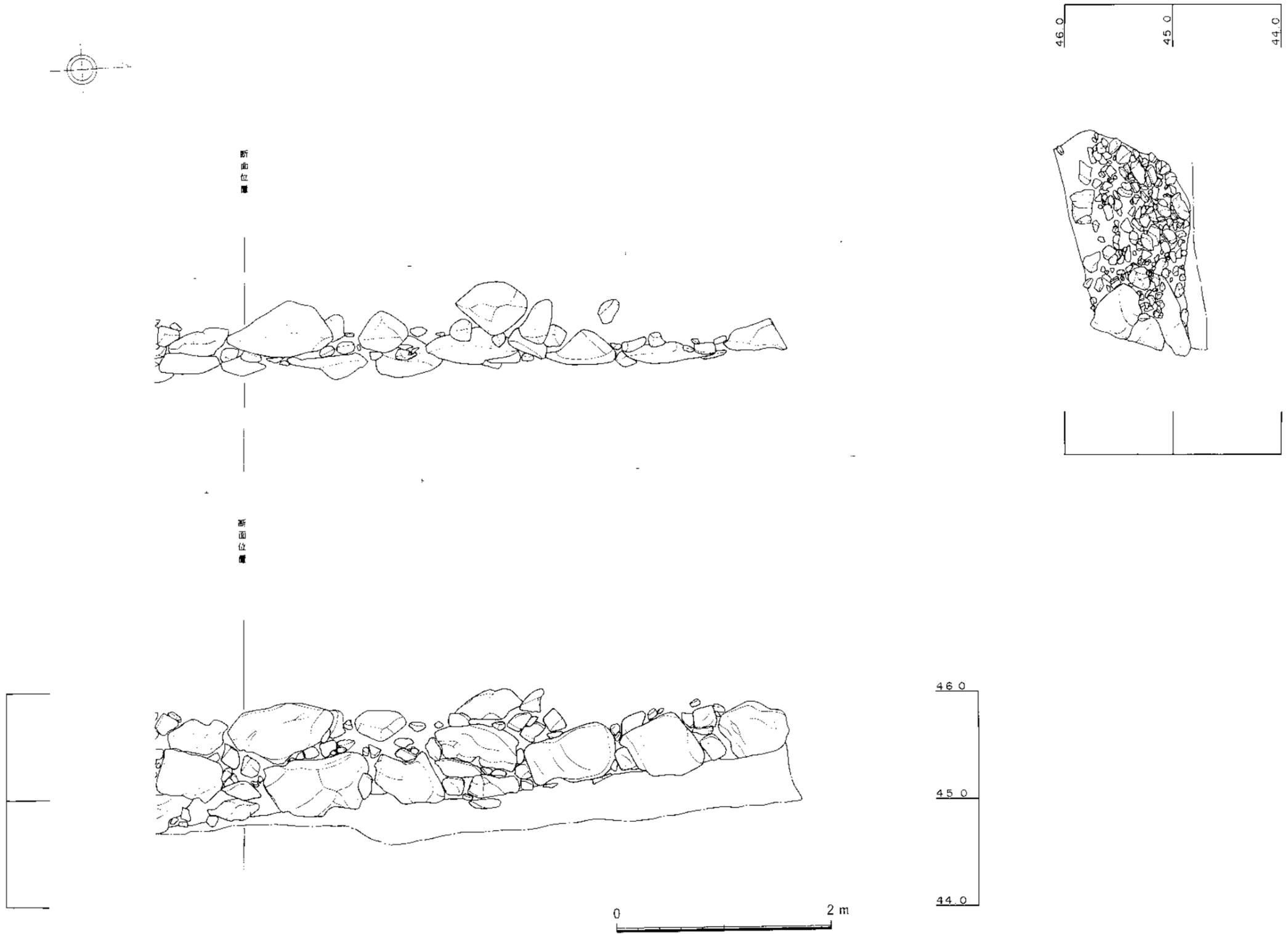


Fig. 16 C-1区石垣平面图, 侧面图, 断面图

C-1から南に続く石垣である。C-1から南に28.99m延びる。最大高2.10mを測る。

地山は緩やかに南に向かって傾斜しており、南端部で標高43.0mを測り、北端部よりも2.5m低くなっている。

石垣の様相は、C-1と同様で自然石を用いた野面積みである。他の調査区と比べて特徴的なことは、石垣の石材間の小詰め石の割合が少なく、また、使われている石材も砂岩質以外の石材が目立つ。石材のほとんどが砂岩質であるが、石灰岩、チャート、玄武岩、礫岩等がC区中央部より南部の石垣に使われている。

北部に比べ、南部分は一辺が1.20~1.50m前後を測る比較的大きい石材を使い、小詰め石も疎らで、やや人念さに欠ける。

南端部から南にかけては、斜面部に派生している自然林の伐採許可の問題で今回は調査出来なかったが、地表面を精査してみると石垣の石と思われる石材がC区石垣の延長部に露出しており、石垣は、さらに南に延びるものと考えられる。

D区

調査対象地南西部にあたる調査区である。内壁と外壁で構成される石塁状の石垣を検出した。調査前は、旧国民宿舎の庭園であった場所であり、敷地内の隅に土塁状に残されていた。土塁状に残されていた部分の内側には、石垣の一部が露出しており、その部分から検出を行なった。その結果、南北方向に石垣(D-1)が既存しており、さらに精査を行なったところ石垣は雁木階段を伴うことが判明した。石垣北側は、旧国民宿舎の浄化施設を埋設していた場所であり、地下深く掘削されており石垣は切断されている。また、南部も攪乱の影響が著しく、石垣が崩壊している。

引き続き土塁状地形の外側を精査してみると、斜面部に石垣の石と思われる石材が露出しており、その部分から周辺の表土を除去した結果、石塁の外壁となる石垣(D-2)を検出した。石垣は、調査対象地南端部から内壁と平行して南北に続いているが、北側に延びた所で国民宿舎敷地内と坂本龍馬記念館の境界があるためその部分までの検出に止まった。

検出された石垣の上部は攪乱されており全容はわからないが、現存している内壁と外壁の幅は5~6mを測る。

D-1 (内壁) (Fig. 17)

全長8.66m、最大高1.56mを測る。雁木階段を伴う南北に続く石垣である。標高は石垣の下端部で45.00m前後を測る。

石垣の様相は、他の調査区の石垣に比べ、石垣に使われている石材が一辺50cm前後の比較的小さい石を用いている。また、石材の石質も砂岩以外に石灰岩、チャートが顕著である。横に配列する石材間に小詰め石を隙間なく詰め、その上に石材を配置して安定させている。大小の平石がバランスよく積まれ、人念な仕上げになっている。

雁木階段は、根石上第1石目から石塁上に向かって左右両方向に階段がついており、上方は攪乱

を受け欠損しているが南へ三段、北へ二段残存している。階段幅は0.95～1.20mを測り、踏面上面（階段部床面）には3～4cm大の玉砂利が敷かれている。階段の中央正面の奥壁の石は、一辺が60cm前後を測る台形を呈した泥岩が使われている。階段に使われている石は、控のある石を使い、その長側面を段状に組んでいる。

地山は南に向かって緩く傾斜しており、根石はその地形なりに地山の上に直接置かれている。

石垣の南部は、攪乱の影響が著しく、上部の石は欠損し、一部裏込めまで攪乱が及んでいる。また、北側は旧国民宿舎の地下施設があった場所であり、地山は深く掘削されており、石垣が切断されていた。

石垣上部は、攪乱を受け遺構は検出されなかったが、石垣の地形的立地からみて横矢の狭間塀があった可能性がある。

内壁にあたる石垣の基軸は、真北より9°6′40″西方に振っている。

D-2（外壁）（Fig. 18）

全長12.65m、最大高1.95mを測る。

石垣は、地山の上に直接築かれており、北から南に向かって傾斜角4°で傾斜している。南端部での石垣根石下端部の標高は43.75mを測り、内壁よりも1.25m低い位置になる。このことは、外壁側が急峻な谷部の斜面に構築されているためである。

石垣の様相は、内壁側と同様に使われている石材が比較的小さいものであり、石質も砂岩以外に石灰岩、チャートが使われており、内壁に類似している。石材の大きさも均一であり1辺が50cm前後の石を使用している。横に配列する石材間に小詰め石を詰め、その上に石材を石面の長軸が横になるように積み安定させている。小詰め石は、石垣に使われている石材の剥片を使い、中には石灰岩の小詰めもみられる。

石垣南端部は、調査対象地南斜面部までつづいているが、斜面下にある観光道路建設時に斜面の一部が削平されており、その影響で石垣は切断されているものと思われる。

また、石垣の北部分は、国民宿舎敷地内と坂本龍馬記念館の境界にあたるため今回検出した石垣の北端部までの検出に止まった。北側にTR5～6を設定し、石垣の延長部の確認を行なったが、旧国民宿舎の地下施設の影響を受け深く攪乱されていた。

TR1～6

対象地内において、石垣が続いていくと思われる部分にトレンチを6カ所設定し、調査を行なったが遺構は検出されなかった。TR1～3については解体工事により既に削平されており、風化した砂岩質の地山礫層であった。TR4～6についても旧国民宿舎の地下施設があった場所であり、地山深く攪乱されている。

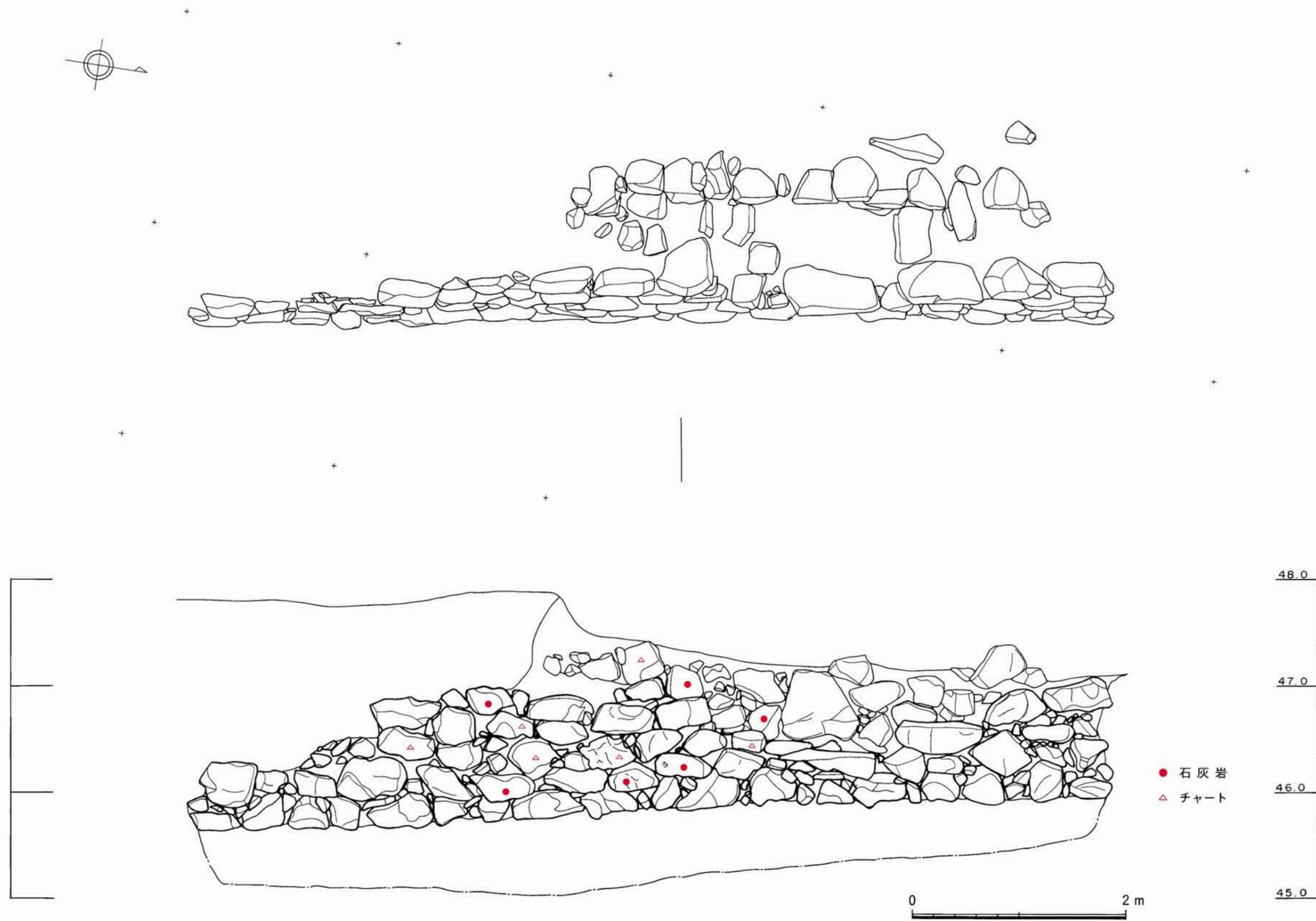


Fig. 17 D区 (D-1) 平面図, 側面図

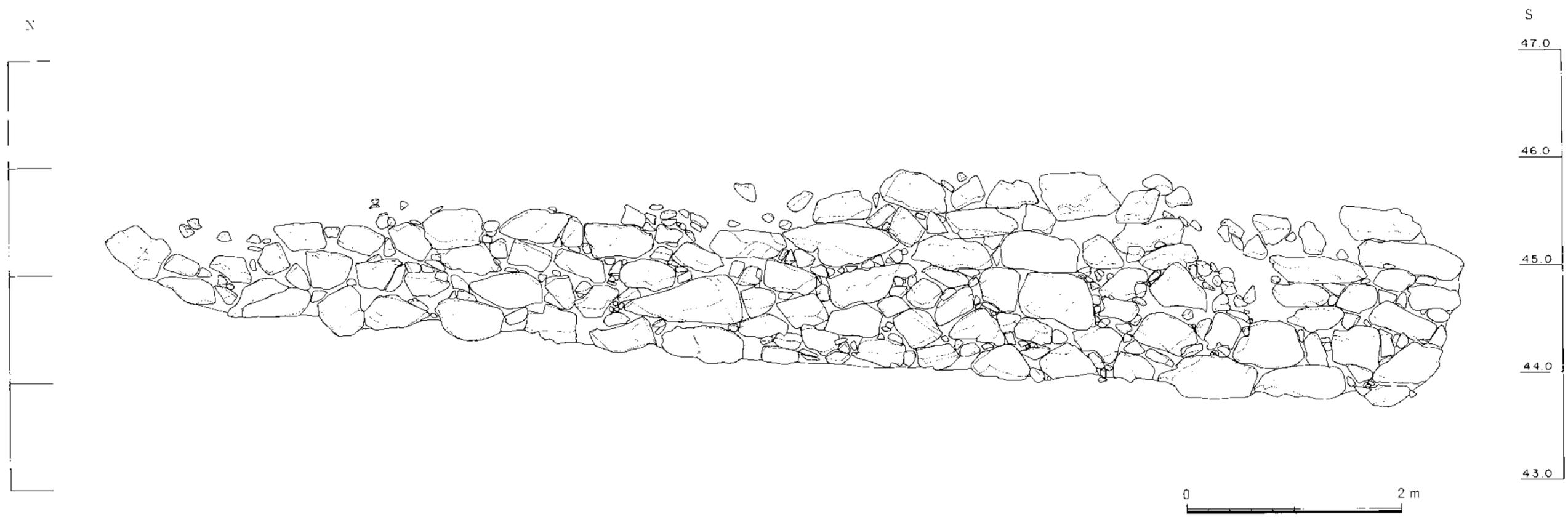


Fig. 18 D区 (D-2) 石垣 側面図

第V章 出土遺物

今回、平成5年度に実施された「詰ノ段」、「東側出丸」部分の調査区において検出した石垣に伴って出土した遺物の概要を紹介することにするが、その内容は瓦類のみである。平成三年度確認調査を行なった城跡の西域部において、包含層から、染付、白磁、備前、土師質土器、瓦片、鉄釘等が若干出土しているが、いずれも細片且つその出土量が僅少であるため、時期的及び器種的な詳細は不明である。また、確認調査時のトレンチ以外の出土であるが、「詰ノ段」から「三」の曲輪へ降りる西斜面部において、軒丸瓦3点、丸瓦36点（3点はほぼ完形）、さらに注目されるものとして、鯨の破片が2点出土している。浦戸城跡の特徴としては、検出された石垣に伴って瓦類が比較的多く出土していることである。県内の中世山城調査でこれらの瓦類の出土とともに石垣が検出された山城は、現在のところ岡豊城跡（南国市）、県西部の中村城跡（中村市）の二城跡である。また、和田城跡（梶原町）でも石垣の検出とともに、瓦片が僅かながらも出土しているがその出土量は他の山城に比べ僅少である。

出土した瓦類の総点数は、平成三年度確認調査及び平成五年度発掘調査を合わせて289点で、その内訳は、軒丸瓦3点、軒平瓦2点、丸瓦90点、平瓦192点、鯨片2点であり、中でも平瓦の占める割合が全体の66.4%と最も多く出土している。次に、丸瓦が全体の31.2%を占め、その内成形技法上の特徴であるコビキA手法が認められるものが23.3%、B手法が40%、不明36.7%である。軒丸瓦、軒平瓦については完形品が出土しておらず文様構成の全容が明確でない。いずれの瓦も完形品は少なく且つ細片であり、成形技法上の特徴及び文様構成が明確なものは少なく、今回、図示出来得たものは36点である。

当城跡において出土した瓦は、大半が石垣の裏込めからの出土であり、特に詰A区、C-1区より多量の瓦が出土している。また、工事の影響により表土層及び上層の攪乱が著しく、石垣を中心に行なった各調査区内での遺物出土は皆無であった。

ここでは、出土した瓦を種類ごとに概要をまとめ、特徴的な瓦について記述していく。なお、調査地点・法量・胎土等の詳細については観察表（Tab. 1～3）を参照されたい。

1. 軒丸瓦

軒丸瓦は3点出土しており、いずれも平成三年度に実施した確認調査で「詰ノ段」から「三」の曲輪へ降りる西斜面部から検出されたものである。瓦当の文様構成から以下に分類した。

I類 瓦当文様は、右巻き三巴文と珠文を組み合わせたもので、巴頭部は丸味を帯びており尾部は他の尾と接しないものである。

I a類（Fig. 20, 1）

平成三年度調査で「詰ノ段」から「三」の曲輪へ降りる西斜面部に堆積している黒色土層から検出されたものである。推定径13.4cm、珠文数14個である。巴の彫りは、シャープで巴頭部は丸味をもつものである。珠文の径は0.4cmで半球状を呈する。周縁の高さは0.6cmで内縁はヘラ削りを施す。

裏面は、全体に指ナデに整形を施す。色調は、凸面は淡黄褐色を呈し、凹面は黒褐色を呈する。

I b類 (Fig. 20, 2)

I a類と同じく西斜面部黒色土層中からの出土である。推定径15.7cm, 推定珠文数28個である。文様の配置は、I a類と一致する。I a類と比較すると珠文の径はやや大きく半球状を呈し、丸味を帯びる。巴部は一部粘土を補填している。胎土は雲母が微量に含まれ色調は淡灰褐色を呈する。

I c類 (Fig. 20, 3)

I a類, I b類と同じく西斜面部黒色土層中からの出土である。推定径13.4cm, 珠文数20個と推定される。巴の膨りはシャープで、巴頭部はI a, b類に比べ小さい。色調は、黒灰色を呈し、胎土は直径2～3mmの小礫を含み他に比べ粗雑である。

2. 軒平瓦

軒平瓦は2点出土しており、「詰A区」、「C区」から検出されたものである。いずれも破片であり摩滅が著しく全容は不明であるが、文様構成の一部である脇文様の唐草文の違いでII類に分類した。

I類 (Fig. 20, 4)

「詰A区」の石垣裏込めからの出土である。推定上弦幅23cm前後, 上下幅は中央部で約2.8cmを測る。文様は破片のため中心飾りは不明であるが、脇文様から推定し、三葉文を中心とする均整唐草文であると考えられる。脇三葉は、下向き, 上向き, 下向きに巻き込んでいる。瓦当面及び、顎部はナデ調整を施す。色調は黒灰色を呈する。

II類 (Fig. 20, 5)

「C区」のC-1石垣裏込めから検出されたものである。破片であり、文様も摩滅しているため全容は不明であるが、脇文様は二反転する唐草になると考えられ、三葉目は上向きである。瓦当面及び、顎部はナデ調整を施し、色調は黒灰色を呈する。

3. 平瓦

平瓦は、破片が多く全長, 全幅の観察できるものは少ない。ほとんどが細片且つ磨耗が著しく調整手法上の特徴も把握しきれなかった。胎土の組成を観察すると、細砂粒を含み、硬質で、色調が灰色及び灰褐色を呈し、厚さ2～2.5cm前後を測るものと、3～4mm大の小礫を含み、軟質で、色調が黒褐色を呈し、厚さ1.5cm前後を測るものに大別できる。5 (Fig. 20) は、厚さ1.3cmを測り、胎土は細砂粒を含み、硬質で、銀化現象がみられ色調は全体的に銀色を呈する。凹面の最前部には水切り痕が認められる。先述した平瓦と比較して、厚さ, 胎土組成等が異なる。

4. 丸瓦

丸瓦は、出土点数は多いが完形に近いものは僅少であり、全容の知れるものは3点であった。丸

瓦の中で、凹面に認められるコビキ痕によりA類、B類に分類した。丸瓦は、すべて玉縁を有するものである。

A類 瓦の凹面にコビキA手法が認められるものである。

A-1類 (Fig. 21, 7, Fig. 22, 9, Fig. 23, 13・14・16, Fig. 29, 32・33)

玉縁に対して、左下がり方向の斜位のコビキAが認められるものである。

7は、全厚2.4cmを測り、側縁端部左側は、外から0.9cm、1.9cmと内に幅広の面取りが見られる。凹面には、撚り紐痕が認められる。9は、全厚2.4cmを測り、側縁端部左側には、外から1.0cm、1.8cmと内に幅広の面取りが見られる。凹面には、棒状圧痕、布目痕が残る。13は、全厚1.9cmを測り、側縁端部左側には、外から0.9cm、1.7cmと内に広い面取りが見られる。凸面は丁寧なナデ調整を施し、凹面には側縁直下に縄目の痕が残る。14、16は、凹面の一部に布目痕が残り、16の側縁直下には縄目痕が認められる。32、33は完形品であり、平成三年度調査時の西側斜面部に堆積している黒色土層からの出土である。32は全長35.5cm、全厚17.0cm、厚さ2.5cm前後を測る。凸面はヘラ状工具による縦方向の調整を施し、さらにナデ調整で仕上げている。側縁端部左側は、外から1.2cm、2.0cmと内に幅広の面取りが見られる。右は、外から、1.0cm、1.8cmと二度にわたる面取りが見られる。凹面には、成形の際の円筒型にかぶせた袋状の布の圧痕と、横方向の縫い取りの痕が認められる。また、玉縁直下左よりに、撚り紐痕も観察できる。色調は全体的に灰色を呈しているが、凸面一部に銀化現象が見られる。33は、全長34.7cm、全幅15.6cm、厚さ2.5cm前後を測る。凸面はヘラ状工具による縦方向の調整を施している。側縁端部左側は、外から1.0cm、1.8cmと内に幅広の面取り、右側は、外から1.0cm、2.0cmの二度にわたる面取りがみられる。凹面玉縁直下右より及び、左側側縁直下には太い撚り紐を縫い付けた痕が見られる。また、成形の際の円筒型にかぶせた袋状の布の圧痕が認められる。凹凸面ともに銀化現象が著しく、色調は銀色を呈する。

A-2類 (Fig. 21, 8, Fig. 22, 10・11・12, Fig. 23, 15, Fig. 30, 34)

玉縁に対して、右下がり方向の斜位のコビキAが認められるものである。

8は、全厚2.5cmを測り、側縁端部左側は、外から0.9cm、2.0cmの二度にわたる面取りが見られる。凸面はヘラ状工具による縦方向の調整を施し、凹面には布目痕が残る。10は、凸面にヘラ状工具による縦方向の調整を施し、凹面には、緩弧線状にコビキ痕が残る。11は、全厚2.1cmを測り、側縁端部左側は、外から1.0cm、1.6cmの二度にわたる面取りが見られ、凹面の一部に撚り紐痕、布目痕が認められる。12は、全厚2.2cmを測り、凹面の一部には、撚り紐痕、棒状工具による圧痕が残る。15は、全厚2.0を測り、凸面はヘラ状工具によって縦方向の調整を施し、さらにナデ調整で仕上げている。凹面は布目が残る。34は完形品であり、平成三年度調査時に西側斜面部に堆積している黒色土層からの出土である。全長30.1cm、全幅13.8cm、厚さ2.5cm前後を測る。凸面は丁寧なナデ調整を施す。側縁端部左側は、外から1.0cm、1.7cmと内に幅広の面取り、右側は、外から1.1cm、1.9cmの二度にわたる面取りが見られる。凹面玉縁直下の位置に、太い撚り紐を一ヶ所で縫い付けた痕が見られる。また、左側側縁直下の位置に、棒状工具による圧痕が二条みられ、その上部には、同じ棒状工具による刺突が認められる。

B類 瓦の凹面にコビキB手法が認められるものである。出土した丸瓦の中で、B類の占める割合が大半である。胎土の違いにより、大まかに以下の2類に分類した。詳細は観察表を参照されたい。

B-1類 (Fig. 24, 17・18・19, Fig. 25, 20・21・22)

主に、胎土の粒子が細かく緻密であり、硬質で、色調は灰色及び、黒灰色を呈するものである。凸面にはヘラ状工具、またはナデによる丁寧な調整が施されている。

B-2類 (Fig. 26, 23・24・25, Fig. 27, 26・27・28, Fig. 29・30・31)

主に、胎土の粒子が荒く2～5mm大の小礫を含み、軟質で、色調は黒褐色及び黒色を呈し断面は赤褐色を呈するものである。今回、図示した中で、23, 24, 25を除くB-2類は、全てC区C-1石垣の裏込めからの出土である。

鱗 (Fig. 30, 35・36)

鱗片は、平成三年度調査時に本城西側斜面部において採集されたものである。35は、鱗の日玉の部分であり、直径2.5cmの半裁竹管状工具の刺突により魚鱗を表している部分が認められる。色調は端黄褐色を呈する。36も鱗片の一部であるが、35に認められる半裁竹管状工具の刺突と同様であり、胎土の組成及び、色調等からみて、同一個体、もしくは、もう一組みの鱗片の一部であると考えられる。

第Ⅵ章 ま と め

近年、県内における中世城館の発掘調査も進み、発掘件数の増加とともに土佐の戦国時代を中心とする城館資料も蓄積されつつある。各城館の歴史的背景をふまえた資料の中に、今回調査を行なった浦戸城跡も有機的な資料を得ることが出来た。ここでは、今回、発掘調査を実施した「詰ノ段」及び「東出丸」部分を中心に検出された石垣、出土した瓦をまとめ、以下に若干の考察を試みたい。

1. 遺構（石垣）と遺物（瓦）

今回、確認された遺構は「詰ノ段」の東端を区画する石塁、及び「東出丸」を区画する石垣群である。ここでは、検出された石垣を、『皆山集』所収の「吾川郡浦戸古城跡図」と比較し記述していく。

詰A区において検出された石塁は、「詰ノ段」の北東端部にあたり、天守台から南東方向に伸びる尾根の両裾部をL字状に削りだし構築している。南北に続いていたと思われる石塁の両端は削平を受け存在しない。外壁側A-3石垣は、断面を見ると、尾根の東斜面を利用し、斜面部の地山を一部L字状に削りだし水平にして石材を積み、石材と削りだした地山の間に裏込め栗石を詰め構築している。また、根石の下には、部分的に地山とは違う黄褐色の粘性土を敷き版築状に構築しているが内壁側A-1石垣ではこの粘性土は認められなかった。このことは、外壁側の石垣の石材には比較的大きな野面の自然石を用いており、根石を揃えるために粘土を補填しているものと思われる。内壁側は、A-1に使われている石材とA-2に使われている石材は、やや様相が異なり、北端隅角部の裏込めからは栗石に混じり多量の瓦片が出土している。瓦片の丸瓦の凹面を見てみると、コビキ痕が残っており、コビキA手法が認められるものが、全体の44.8%、コビキB手法が55.2%を占めており、少なからずコビキA手法からB手法に転換する時期である天正11年以降に隅角部は手が加えられているものと考えられる。ただ、地域によってはコビキ手法の転換時期（天正11年）以降もコビキA手法が残ることもあるので構築時期については、今後、再検討の必要性があると考えられる。^(註8)
^(註9)

「古絵図」（Fig. 4）を見ると、「本城」と書かれた詰ノ段を区画するように「五間四方」と書かれている天守台から太く黒い実線が描かれているが、当初、この塁線は土塁であると考えられていたが、詰A区で検出された石垣により、旧地形の尾根部を利用して構築した石塁であると判明した。詰A区石塁両端部は削平され切断されており不明であるが、古絵図によると「本城」の東限を区画する線は、天守台から南に伸びた所で西方に屈折し、さらに南に少し伸び終結している。この古絵図に見られる西方に屈折する部分が、詰A区の内壁北端隅角部（A-1とA-2の変換点）に相当すると考えられる。「本城」部分は、現在の構築物の影響で改変されており、縄張り上の遺構の有無は不明であるが、西北部分に土塁状の地形が「状」に一部残存しており、天守台方向から西方に伸びる塁線の北西角部であると思われる。この北西角部の土塁状地形部分から詰A区内壁までの東西距離は74mを測り、天守台の南東に伸びる尾根の基端部から詰A区南端までの距離は約31mである。これらのことから「詰ノ段」を推定すると、約2294㎡前後の面積があり、周囲（東、西、北）

を石畳状の墨線で囲まれ、形は長方形を呈した曲輪であったと考えられる。

一方、古絵図の中の太く黒い実線は、「詰ノ段」南西部、南東部それぞれに南に傾斜しながら突出した出丸部分にも見られる。この東側の出丸を区画する墨線が、B、C、D区で検出された石垣群である。

B区において検出された石垣は、東出丸の東斜面部に位置し、傾斜面の地山をL字状に削りだして水平にし、その上に構築している。B区北端隅角部の根石下端の標高は45.5mであり、詰A区との比高差は6.5mを測る。この北端隅角部から25°の傾斜で「詰ノ段」の方向にB-1-a石垣が延びている。古絵図にはこの「詰ノ段」の方向に屈折するラインは見えないが、東出丸の北東に城山の東山裾から延びる城道が描かれており、B-1-a石垣部分は、城道から城内に入る出入口にあたる部分であると考えられる。B-1-a石垣から南に続く石垣は、B区中央部で一端切れているが、B-1-b石垣を見ると、地山が南に向かって上がっており、石垣が切れている部分で最頂部となる。この地山の高まりは、東方に延びる尾根上にあたり、B区石垣は旧地形の東西に延びる尾根を南北に縦断し、起伏のある地形なりに構築されている。それがゆえに、地山最頂部は後世の改変の影響で削平されており石垣は残っていない。古絵図では、「三間」と書かれた南北に延びる墨線の中央部で、西方に少し屈折しているように描かれている部分が見られるが、おそらく、石垣の切断されている部分で変換点があった可能性が考えられる。この石垣が切断されている部分から南には、犬走り状の張り出し部を伴ったB-2-a石垣が南北に続く。地山は南に向かって傾斜しており、B-2-a石垣の南端部根石の標高は44.3mを測る。B-2-a石垣の南端部の地形は、東に延びる尾根と南に延びる尾根との間に谷部を呈しており、犬走り状の張り出し部は、石垣を高く積み上げるために取り付けられた足場、もしくは、補強の為に構築されたものと考えられる。B-2-b石垣は、B-2-a石垣の南が谷部にあたるため、屏風折れのように西に2回屈折し、南に延びる尾根筋に移行している。古絵図を見れば、出丸中央部を東西に区切るように「三間」と書かれた墨線が西に延びているがこの部分を境に出丸南部は曲輪の広さが狭くなる。このB-2-b石垣から西方部分は既に削平されており、トレンチ調査を行なったが西方に延びると思われる石垣は検出されなかった。地形的なことから推察して、出丸は南に傾斜しながら突出した尾根上を曲輪状に改変し、南に下がった地形を利用して、出丸のB-2-b石垣とC区との間で段部を形成していたものと思われる。

C区で検出された石垣は、出丸南東部東斜面に位置し、出丸南端部まで続く。C-1部分で断面を見ると、石垣は斜面地山を逆L字状にカットし、根石の下には黄褐色の粘土を敷き石材を置いている。また、黄褐色粘土上面は黒褐色を呈した層が見られるが、この層は、B-2-a石垣南端部からC-1部分の間に認められる。おそらく、削りだした地山の土で谷部斜面を造成して石材を配置したものと考えられる。C-1裏込めからは瓦片が出上しているが、丸瓦を見てみるとコビキB手法（B-2タイプ）の瓦片のみである。また、石垣に使われている石材も野面の自然石であり詰A区、B区の石材とは様相が違う。これらのことから考えると、出丸部分中央部であるB区を境にC区石垣は構築時期に差があるのではないかとと思われる。

C区の南端部は、今回の調査では発掘は行なえなかったが、C区石垣の延長線上に石垣の石材が

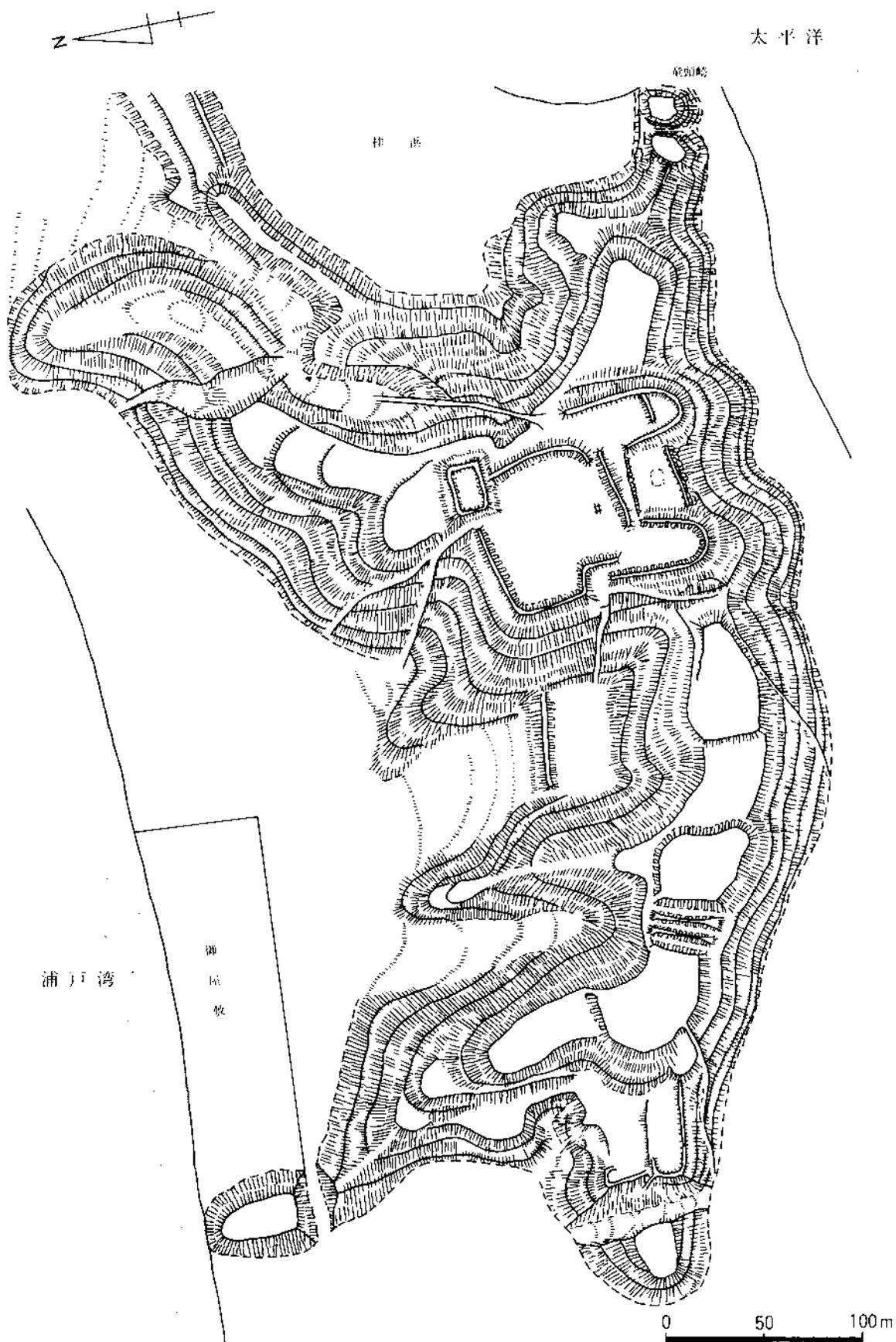


Fig. 19 浦戸城跡復元縄張り図 (池田 誠 作図)
 (池田 誠「浦戸城跡」『図説 中世城郭事典』新人物往来社 1987より一部加筆)

露出しており、石垣は出丸東斜面南端部まで既存しているものと思われる。さらに、南斜面部は、大きく削平され急斜面を呈していたが、地表面を観察してみると、裏込め栗石と思われる石が部分的に見られる。古絵図を見れば、出丸の北から続く墨線は、出丸南東部で屈折し西方に延び、さらに北に折れ、詰ノ段南部にある「水」と書かれた三列の石垣で構築される二列目まで延びている。現況から見て石垣は、古絵図と同じラインで出丸の周りを囲むように続いていたものと思われる。

D区石垣は、出丸の南西端部に位置し、内壁（D-1）と外壁（D-2）で構成される石塁である。内壁には、雁木階段がみられ、石塁上部には横矢があった可能性がある。内壁側の根石の標高は45.0mを測り、出丸南部の曲輪内はこの標高前後を測るものと考えられる。外壁側は急斜面であり、おそらくは、西側の出丸との間は谷部であったと考えられるが、現況では、後世の改変により地形は大きく変貌しており推定の域を出ない。古絵図を見れば、D区に該当する墨線は、詰ノ段南部にある「水」に関係する石垣部分に延びている。このことからすれば、D区石塁は出丸南部の曲輪からD区内壁の雁木階段を昇り、石塁上の武者走りを伝い詰ノ段に入る通路として使われていた可能性が考えられる。

以上、今回の発掘調査によって検出された石垣について概観してみたが、次に縄張り上の性格について触れてみたい。城山の縄張りは、主に丘陵東部分の山頂部に天守台と主郭である詰ノ段を置いたもので、西側丘陵部の三ノ段、二ノ段とされる曲輪と主郭西下、東下の小規模な曲輪からなる。城山の立地する半島状の地形そのものが海に囲まれており、防御的機能が凶られていると思われる。西側の三ノ段から二ノ段にかけては三重の連続した堀切が見られ、長宗我部氏が岡豊城から用いている堀切の構築方法が認められる。主に、西側に堀切等の防御施設が見られるのは、東部分が自然の要害であり、攻められ難く、陸続きである西側に重点を置いたものと考えられる。三ノ段北側には、大手口と思われる深く切れ込んだ谷間があり、詰ノ段に続く登り口がある。詰ノ段周辺は、大きく改変され原形を留めていないが、古絵図、復元縄張り図から推察すると、西側登り口から城道を登りつめた所に喰違いを呈した虎口があり、それに付属した出丸が見られる。この詰ノ段南西の出丸は、兵溜りの様な空間であったと思われる。詰ノ段の東側には、今回、調査を行なった東出丸があり、西出丸、詰ノ段に連結しており曲輪の配置から見れば、西出丸と同様に兵溜りの様な性格を持つ曲輪でなかったかと想定される。そして、城の大手を西に考えると、東方下から城道が続いている東出丸B区石垣の北端部は、搦め手になるものと思われる。

2. 浦戸城跡の変遷

浦戸城跡において、発掘調査により明らかとなった遺構は今回の調査で検出された石垣のみである。石垣の裏込め石と伴出して瓦が出土しているが、その瓦を使った礎石建物跡などの遺構は検出されていない。

県内の中世城跡の調査結果を見ると、浦戸城跡の様に石垣と瓦が共伴して検出された城跡は、岡豊城跡、中村城跡、和田城跡の三城跡があげられる。この内、岡豊城跡では、天正3年（1575）の紀年銘瓦が出土している。土佐の城郭出土の瓦の中では最も古い例であり、この時期に土佐でも瓦葺き建物が存在していたとされている。長宗我部氏と瓦工人の関係については、岡本健児氏の論考

があり、「『長宗我部地検帳』に見える瓦工人は、元親によって泉州堺から連れてこられたと考えられる」^(註11)と述べられ、堺の瓦工人との関わりを指摘されている。また、岡豊城跡出土の天正3年銘瓦から、その段階までは瓦を堺から移入していたものと見解を述べられている。出土瓦は二ノ段から出土したものが大半であり、その多くがコビキA手法^(註12)である。これらの出土した瓦は、岡豊城から大高坂（高知城）に移動する段階に、詰ノ段の礎石建物に葺かれていた瓦を廃棄したものと考えられている。また、三ノ段において土塁の腰巻石の発達した段階の石積み遺構が検出されているが、浦戸城跡に見られる様な高石垣ではない。その他、畝状空堀群や喰違い虎口、さらに瓦葺きの礎石建物等が見られるが、これらの遺構は中世山城から近世的城郭を志向して改修されたものであり、岡豊城跡は、長宗我部氏の織豊政権下への参入によって、部分的に近世的な城郭に改修された城であるといえる。

中村城跡は、天正3年の四方十川（渡川）の合戦で長宗我部軍の拠点にされた城である。詰の基壇状地形部分^(註13)において、瓦葺きと思われる礎石建物跡と瓦が検出されている。出土した瓦はコビキA、B手法のものが混在している状況である。土佐におけるコビキB手法の出現時期について松田直則氏は「礎石建物跡は出土瓦からみて天正3年以降のものと考えられており、さらに、岡豊城跡では出土してないコビキB手法の瓦が認められていることから、土佐におけるコビキB手法の出現時期は中村城の礎石建物跡以降である」と指摘されている。また、礎石建物の両端に構築された石垣は岡豊城跡に見られるような小規模なもの^(註14)ではなく、浦戸城跡の石垣の様相に類似している。中村城跡は、長宗我部氏が土佐西部の拠点とした城であり、長宗我部氏入城後に手が加えられており、詰の礎石建物を中心に拠点の城としての再整備を行なっている。この長宗我部氏による城跡の改修時期を松田直則氏は、出土した瓦、及び高石垣の存在等から天正10年以降を^(註15)あてられている。

これらの県内中世山城の調査研究結果をふまえ、今回、調査を行なった浦戸城^(註15)を見てみると、特徴的な縄張りは、西側尾根部と東側主郭部分の大きく二つに分かれ、それぞれの縄張りの構造に違いが見られる。基本的に詰を中心とする各曲輪は、城山の地形を基に形成されており、県内に見られる他の中世城跡と同一線上に位置している。しかしながら、古絵図に見られる、西側から詰ノ段に入る喰違い虎口の形態やそれに付属する西出丸、天守台を構える詰ノ段、さらに、今回の調査により明らかとなった詰ノ段、及び出丸を中心とする高石垣の存在等を考えれば、明らかに中世山城の構造を凌駕しており、織豊系大名により造営された城に類似する点がある。この点から見れば、天文9年（1544）頃、本山氏が浦戸の地に城跡を築いた縄張りを基に、永禄3年（1560）、長宗我部氏が入城後、部分的な改修が行なわれ、やがて天正19年（1591）、長宗我部元親が居城を浦戸に移した頃を頂点に、詰ノ段を中心に大規模な改修を行なったものと考えられ、土造りの城から石造りの城への変遷を見ることが出来る。出土した瓦を見てみると、コビキB手法の瓦が大半であり、検出された石垣の裏込めの栗石と伴出している。瓦以外の出土遺物は皆無であり、詳細な遺構の時期等は不明であるが、詰ノ段を中心とした東側主郭部分の改修時期は少なからず天正19年以降と考えられる。こうして今回の調査で明らかになった浦戸城跡の姿は、長宗我部氏が豊臣傘下において、戦国大名から近世的大名への変化の現われとして捉えることが出来る。このことは、中世的な山城としての防衛機能だけでなく、城を領国統治の中心として機能させることを意識しての結果であ

ろう。これらの背景として、長宗我部氏の動向を見れば、拠城である岡豊城では、城跡の東に城下町形成を試みているが立地的、地形的制約があり、さらには経済的基盤にもかかわり大高坂城に移転をする。岡豊城では十分に押し進めることが出来なかった城下町を成立させることを目的とし、領国経営のために一層の努力を行なったが、大高坂城では立地的に水害に遭いやすく、治水に失敗した。その後、豊臣傘下において、秀吉の政策である朝鮮出兵があり多くの水軍を率いる必要性、また、土佐国内の貢納物資の輸送のため陸路より海路の方が便利であるため浦戸湾を通じての海上交通への必要性が生じ、最後の居城を浦戸に選んだものと考えられる。

以上、長宗我部氏の城を中心に浦戸城跡の変遷を見てきたが、調査結果としては、中世山城から近世城郭への変化を知ることができ、長宗我部氏が四国の覇者から、織豊政権に参入することによって城に対する新しい認識を持つことになったと考えられる。ここに、長宗我部氏の豊臣傘下における居城としての変遷、そしてその影響を読み取ることが出来るのではなかろうか。浦戸城跡は、戦国時代から近世へとその激動の時代の社会的背景をそのまま投影している城である。

おわりに

今回の発掘調査の結果をもとに、浦戸城の変遷と画期の史的意味について考察を加えてきたが、荒削りで、大雑把に概観した結果となった。また、瓦についても分類をしたのみで瓦の製作技法などの多くの問題を取り上げて論じなければならなかったが、別の機会に稿を改めたい。全て先学等によって示されてきたことの援用であり、筆者自身が示し得た部分はほとんど無いといえる。土佐の中世城郭から織豊期城郭の研究は、前田和男氏や大原純一氏、池田誠氏などによって縄張り図をもとにした研究が勢力的に進められ、考古学的研究方面では、宅間一之氏や松田直則氏によって成果があげられてきている。特に、浦戸城跡については、前田和男氏の文献、縄張り図等から見た研究論考がある。先学諸氏の研究に敬意を表するのみである。

^(註16)
土佐に所在する中世城郭から織豊期城郭についての発掘調査も進み、研究の成果により、資料の蓄積も増えてきた。今後は、これらの得られた資料から、出土遺物、城郭瓦、遺構等を比較検討し、土佐における浦戸城跡の位置付け、さらには歴史的復元に向けて進めていかなければいけないと痛感している。

また、今回の調査で検出された石垣が現状保存されたことは、貴重なことであり、平成6年3月をもって浦戸城跡の発見された石垣、及び天守台が高知市史跡に指定されたことは多大な成果である。これを契機とし、今後の高知市を文化面で飛躍させるのは正にこれからであり、文化財に対する変わらぬ取り組みが期待される。

発掘調査、及び本稿をまとめるにあたっては、県内外、数多くの方々に御教示と御指導を賜った。末筆ながら御芳名を記し、深甚の謝意を表します。(敬称略)

岡本健児・前田和男・前田秀徳・大原純一・池田誠・木戸雅寿・中井均・松田直則・織豊期城郭研究会・中世城郭研究会

また、報告書作成にあたっては、森田尚宏・出原忠三・藤方正治 他、当埋蔵文化財センター調査員の方々の協力を得た。深く、感謝いたします。

《補註・参考文献》

- 註1. 宅間一之他『古良城跡Ⅰ』春野町教育委員会 1985
- 註2. 山本哲也他『古良城跡Ⅲ』春野町教育委員会 1987
- 註3. 松田直則『芳原城跡Ⅱ』春野町教育委員会 1993
- 註4. 宅間一之・出原恵三『芳原城跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1984
- 註5. 森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡第1～5次発掘調査報告書』高知県教育委員会 1989
- 註6. 平成5年～6年度に実施された高知城動物園跡地公園整備事業に伴う『御台所』の発掘調査である。中・近世陶磁器、瓦類が大量に出土し、柱穴等も検出されている。
- 註7. 吾川郡浦戸古城跡図『皆山集』所収 16×27センチ 彩色 高知県立図書館蔵
尚、本稿で取り上げた古図以外に浦戸城跡の古図は8種類ある。
- 註8. 森田克行「屋瓦」『高槻市文化財調査報告書第14冊 摂津高槻城本丸報告書』高槻市教育委員会 1984
- 註9. 加藤理文「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城Ⅳ』袋井市教育委員会 1993
- 註10. 前註5に同じ
- 註11. 岡本健児「元親の城と瓦生産」『長宗我部元親のすべて』新人物往来社 1989
- 註12. 前註11に同じ
- 註13. 松田直則『中村城跡』中村市教育委員会 1985
- 註14. 松田直則「土佐の中世城郭から織豊期城郭への変遷」『織豊城郭』織豊期城郭研究会 1994 創刊
- 註15. 前註14に同じ
- 註16. 前田和男『浦戸城跡』 1991

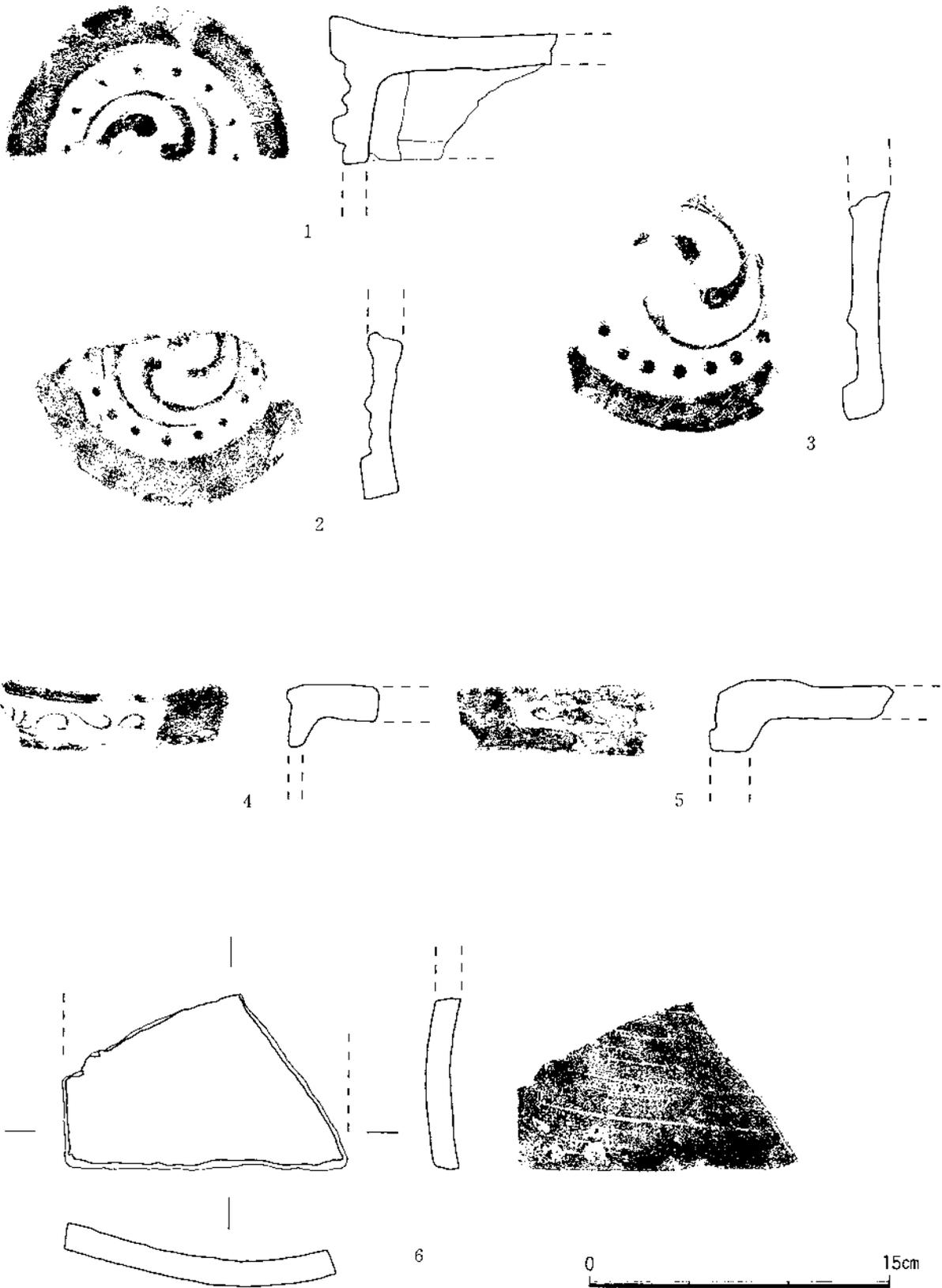


Fig. 20 軒丸瓦・軒平瓦・平瓦

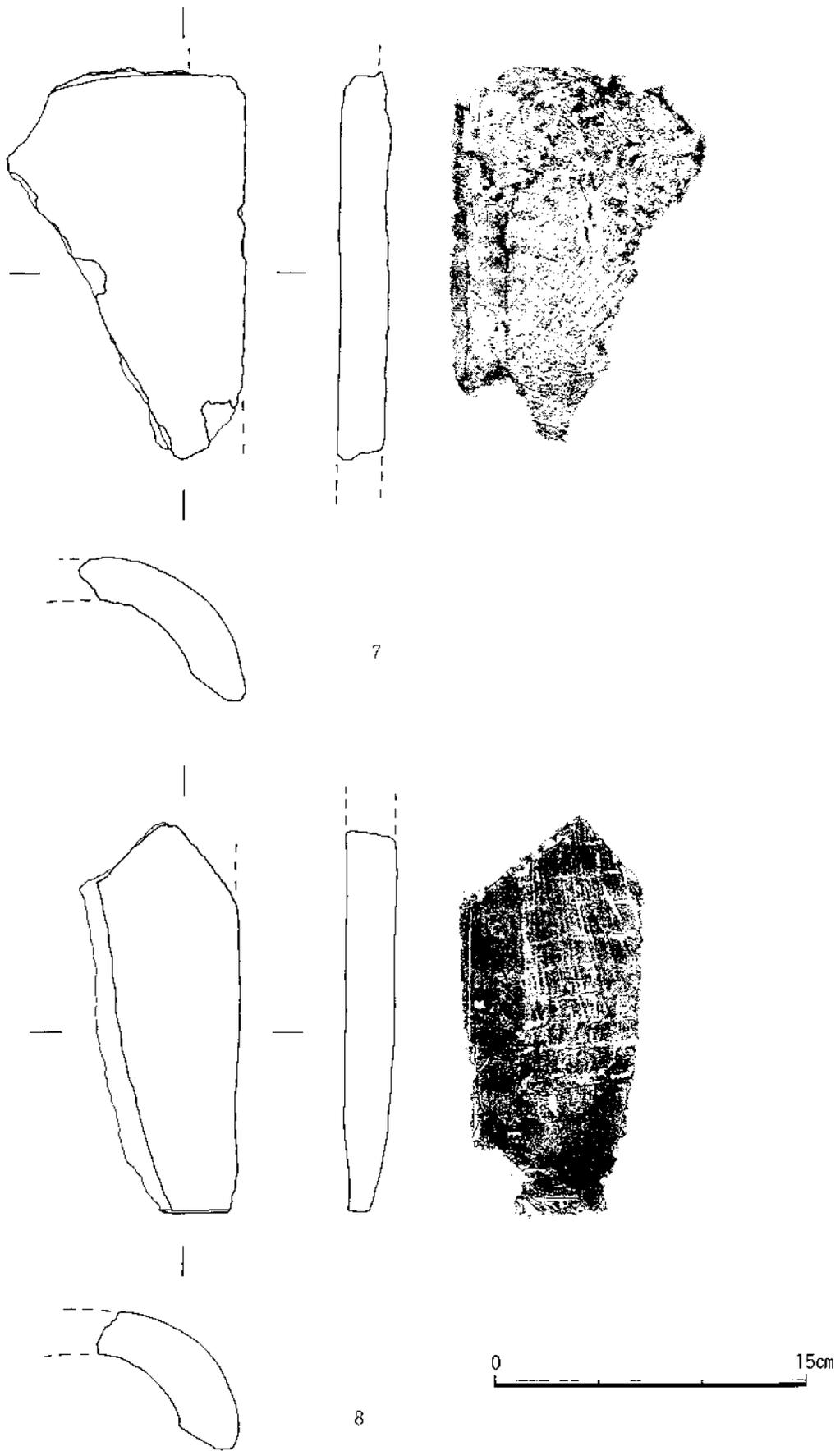


Fig. 21 丸瓦 (コビキ A)

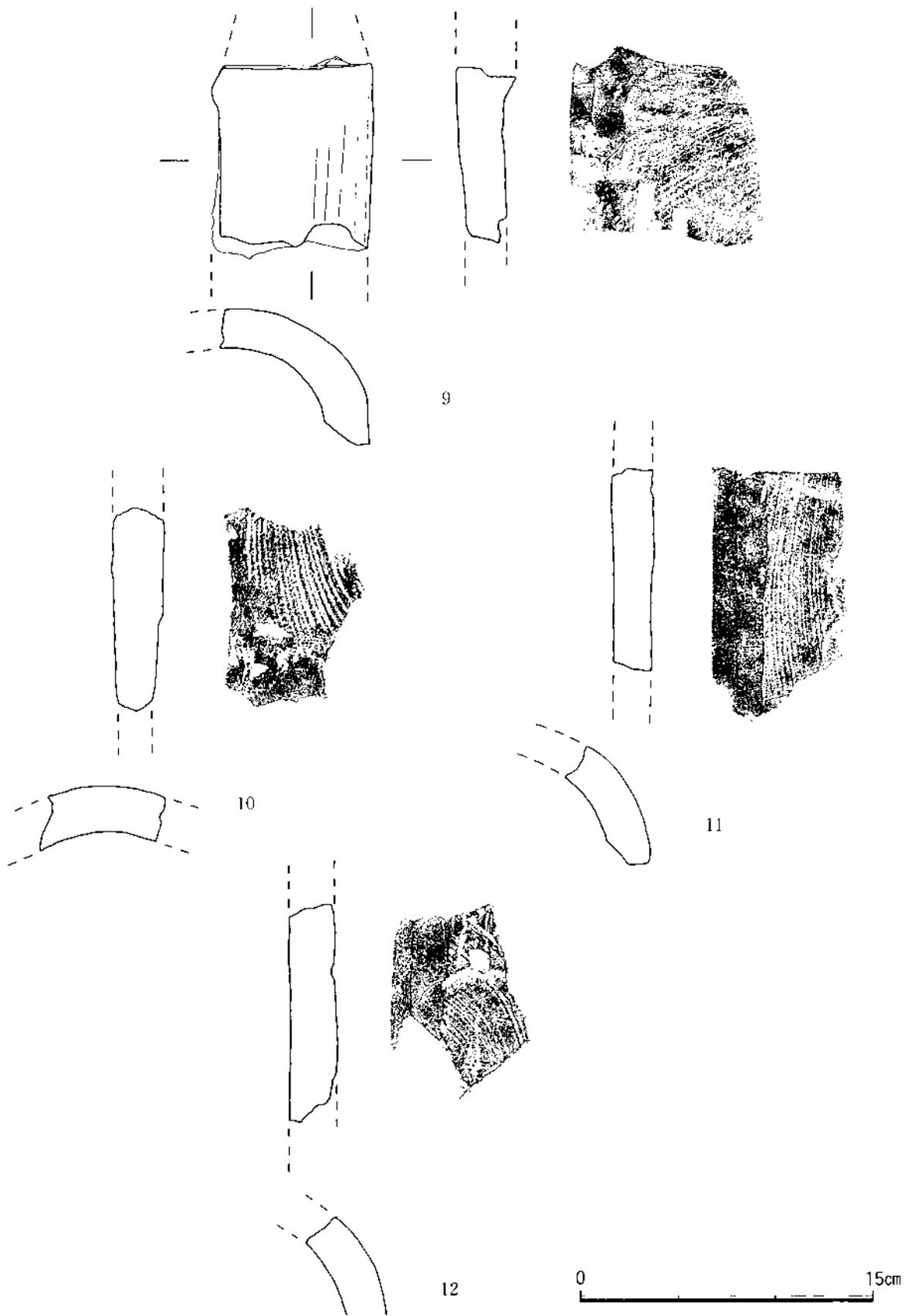


Fig. 22 丸瓦 (コビキA)

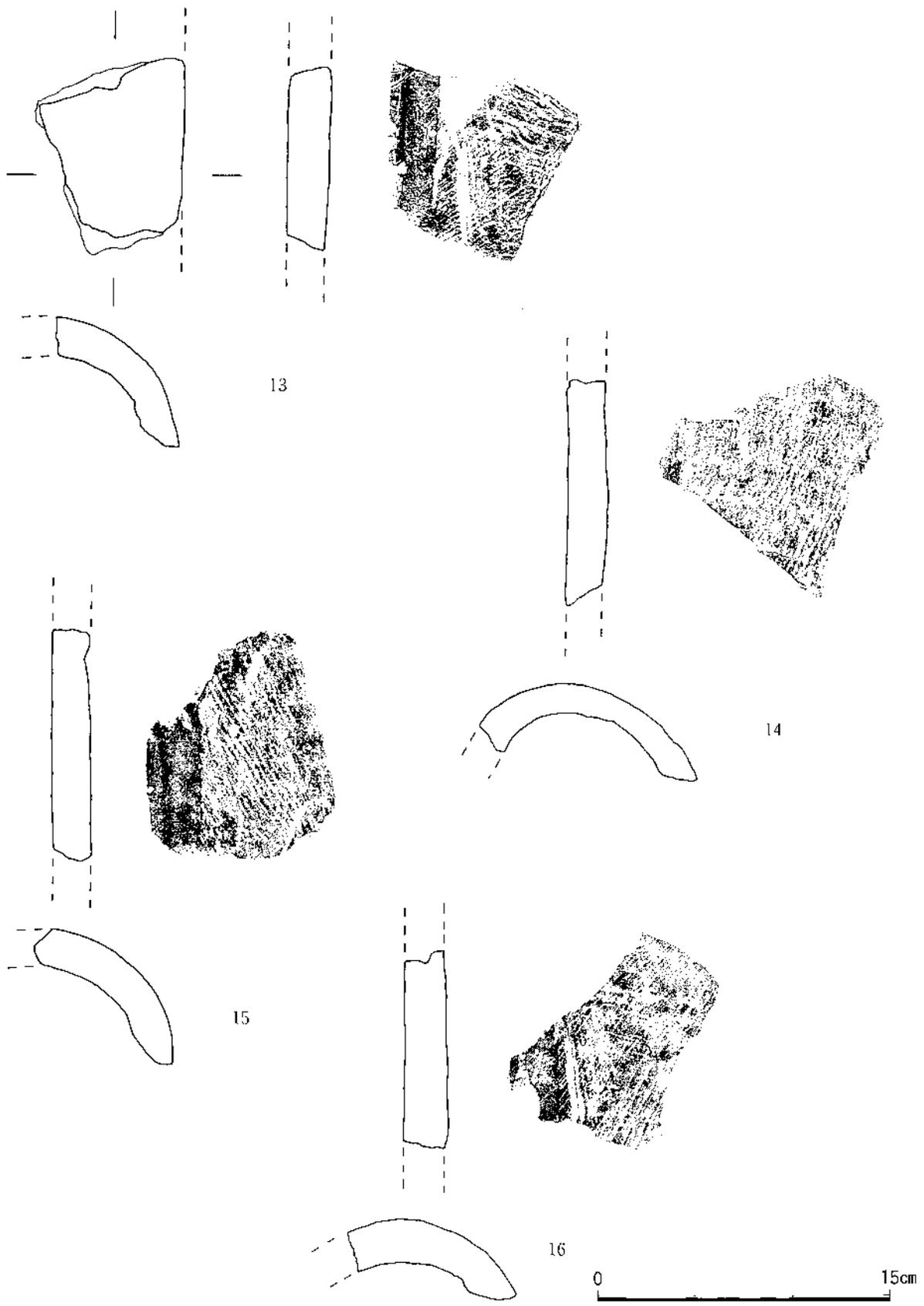


Fig. 23 丸瓦 (コビキ A)

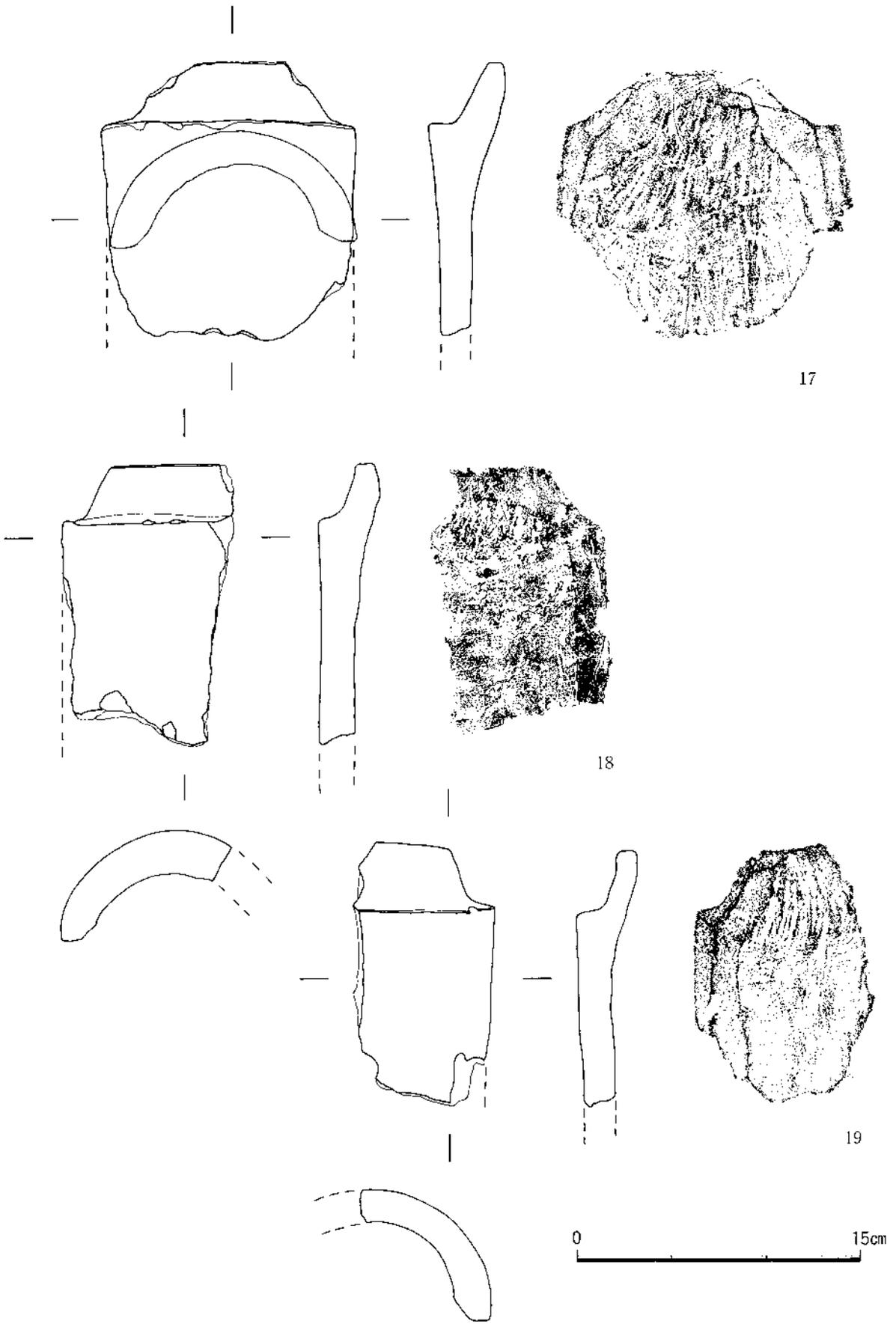


Fig. 24 丸瓦 (コビキB-1)

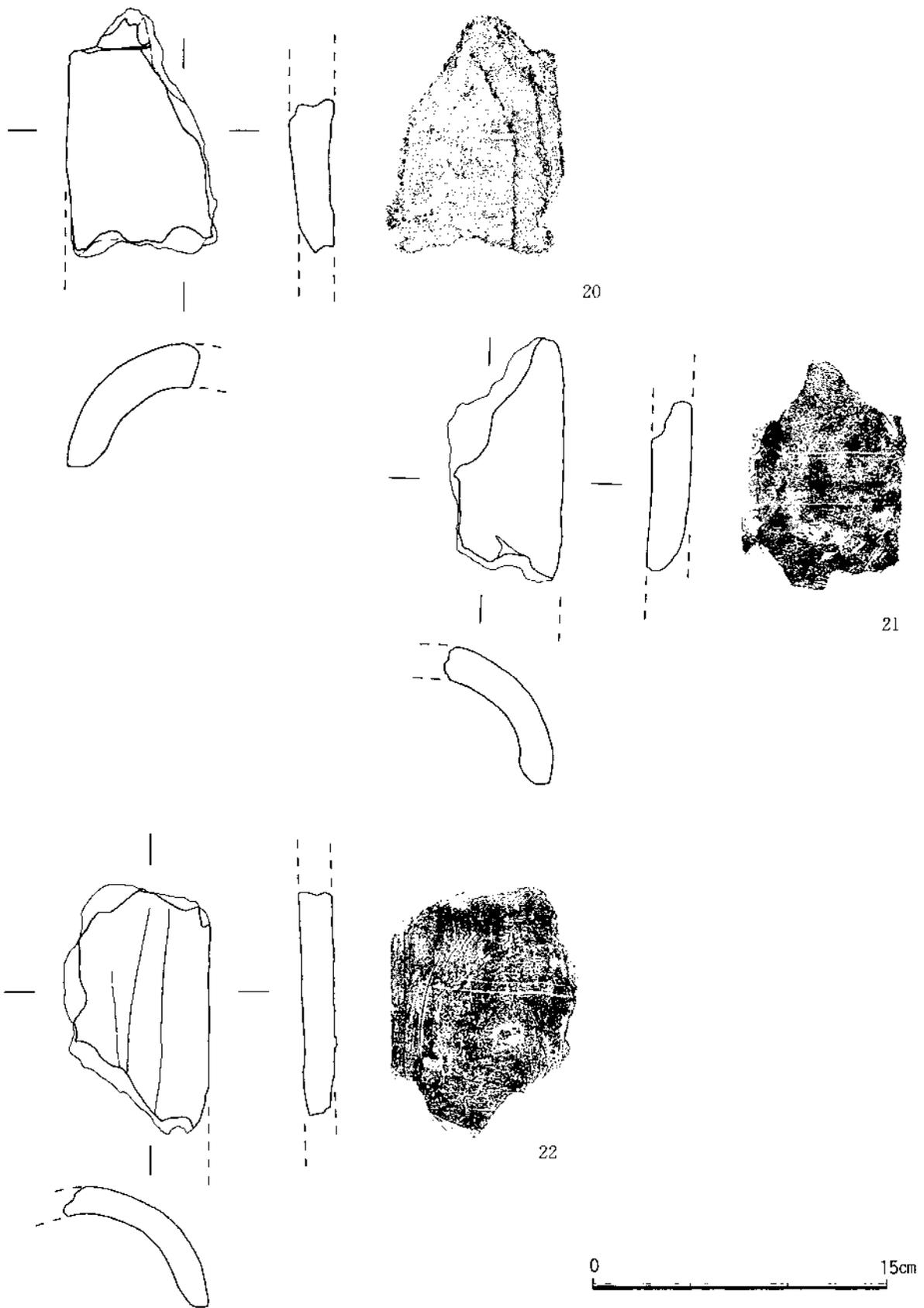


Fig. 25 丸瓦 (コビキB-1)

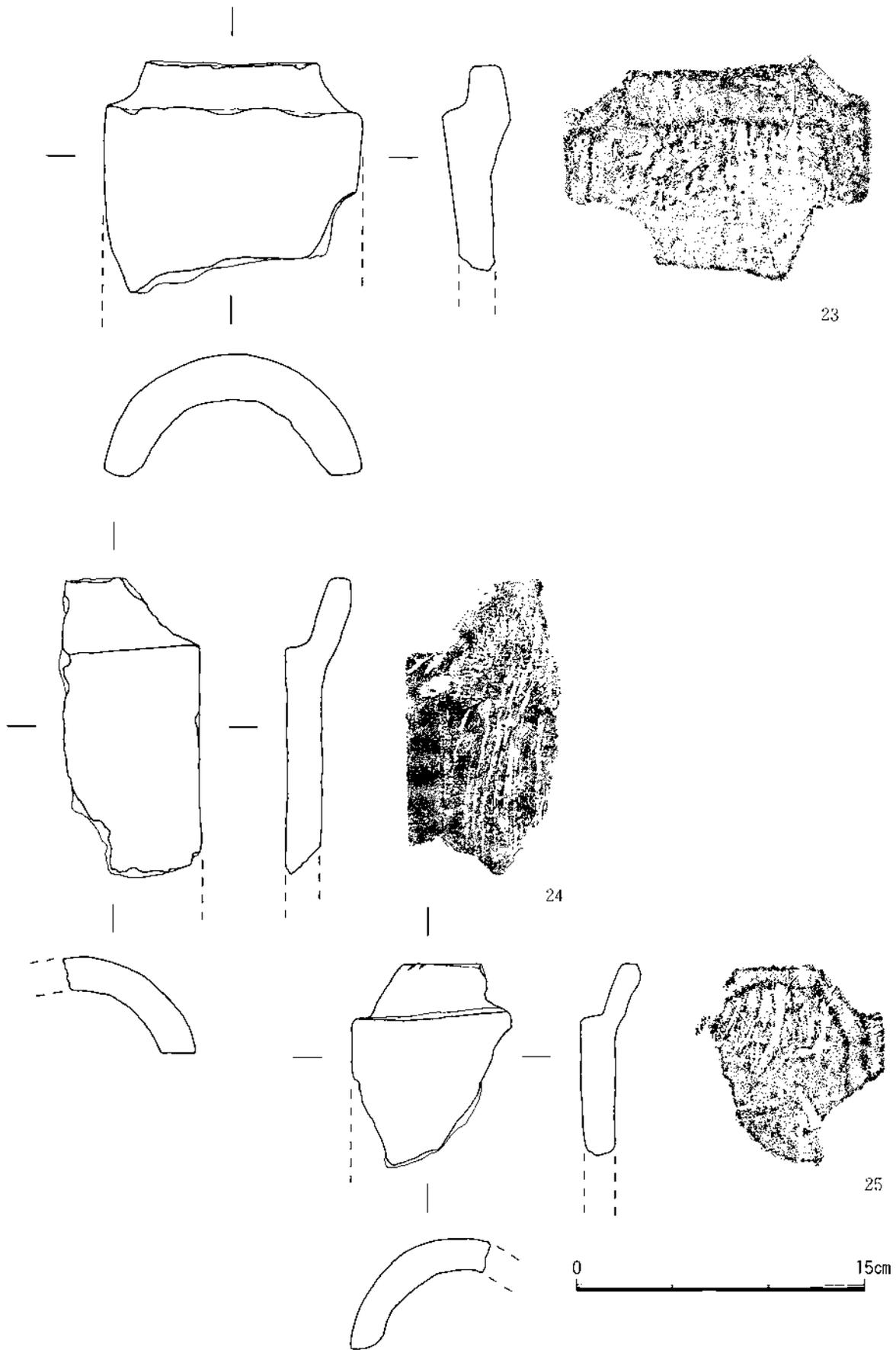
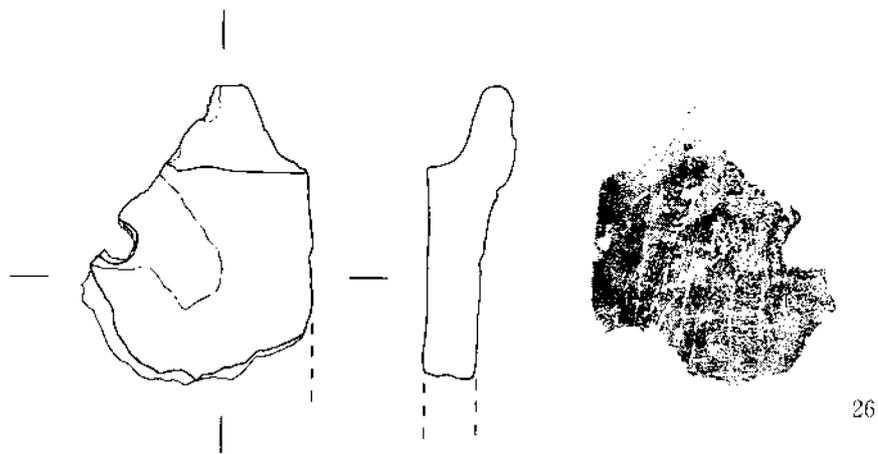
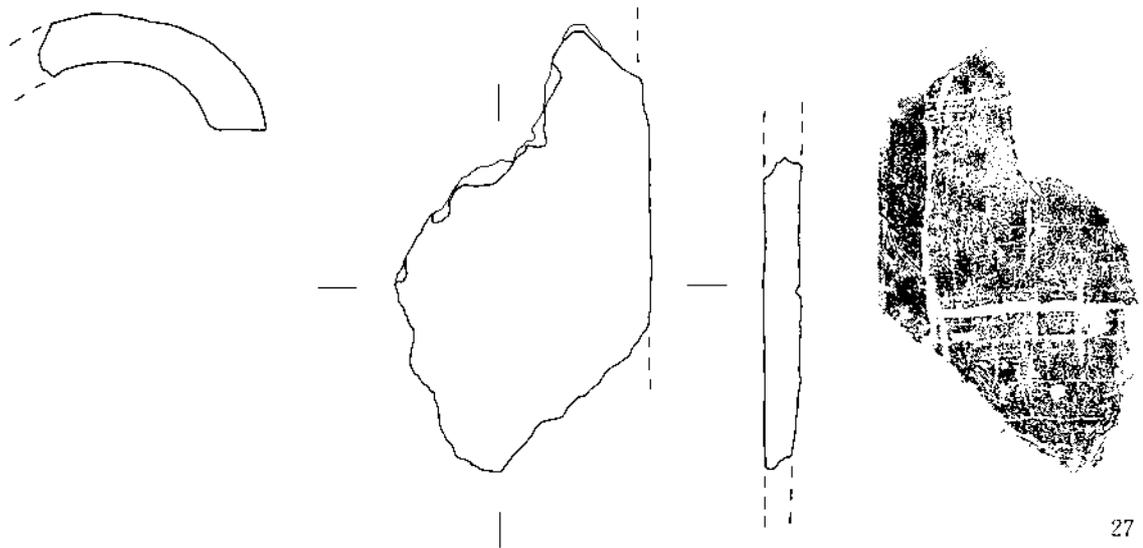


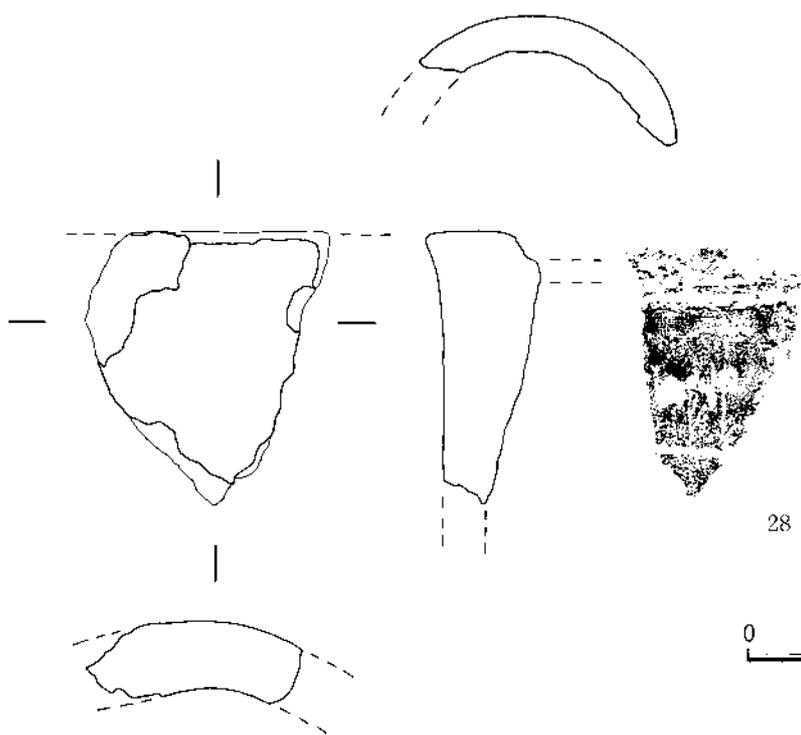
Fig. 26 丸瓦 (コビキB-2)



26



27



28



Fig. 27 丸瓦 (コビキB-2)

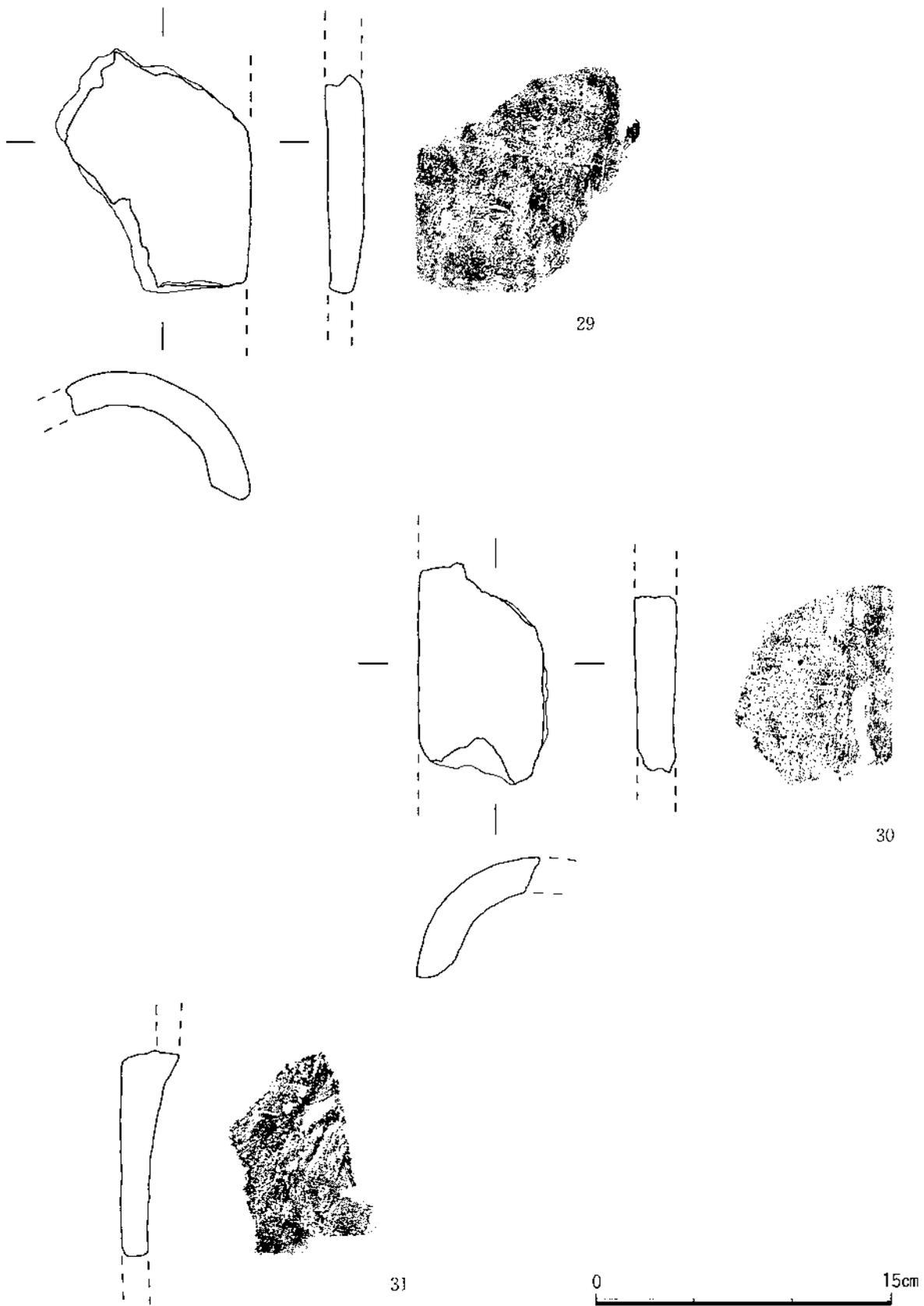
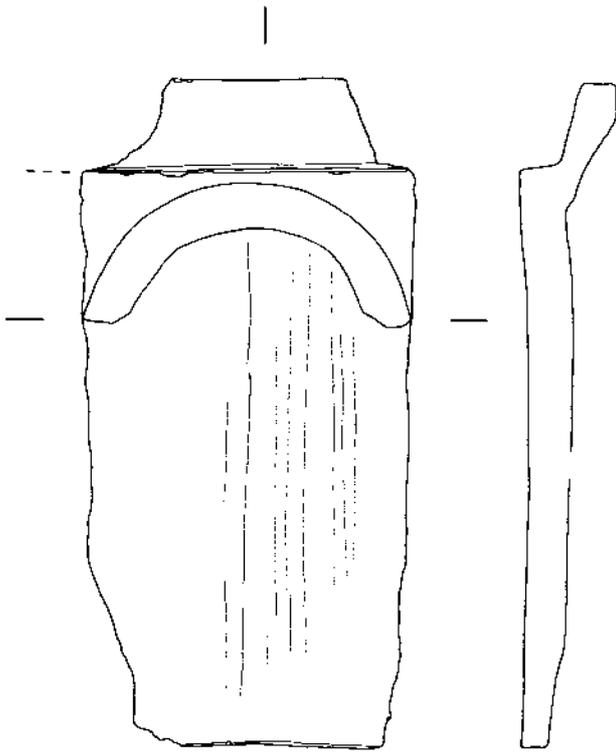
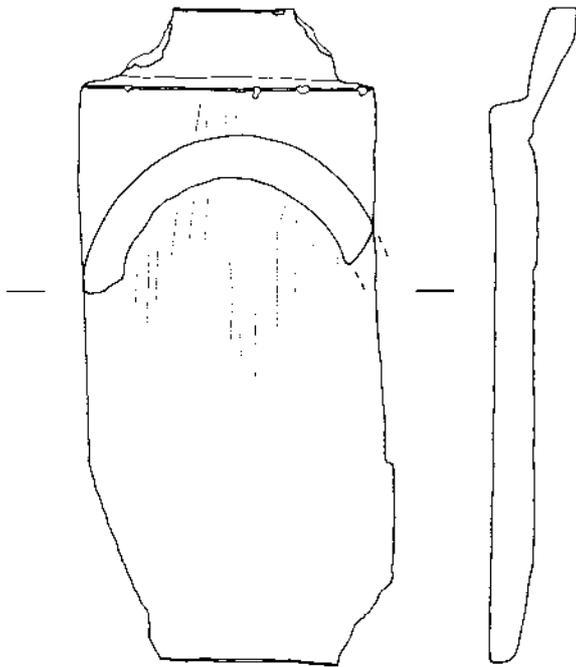


Fig. 28 丸瓦 (コビキB-2)



32



33

0 20cm

Fig. 29 平成3年度確認調査 出土丸瓦（完形，コビキA）

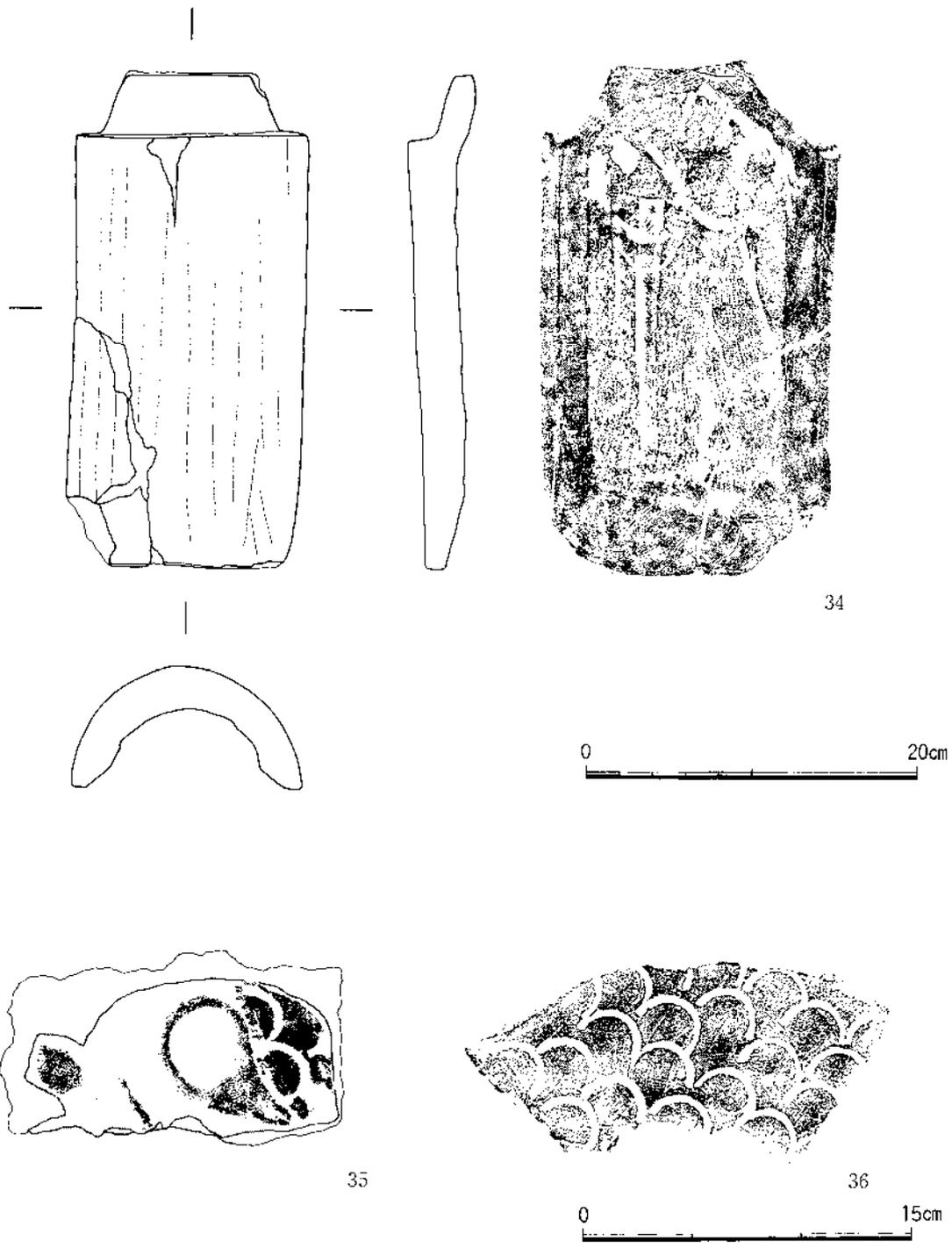


Fig. 30 平成3年度確認調査 出土丸瓦（完形，コビキA），鯪

Tab. 1 軒丸瓦計測表

単位 (cm)

挿図 番号	分類	直径	文様	珠文		周縁		瓦当厚	胎土	色調	出土地点
				数	径	幅	高				
1	I-a	13.4	9.8	14	0.4	1.8	0.6	1.8	2～3mm大の小礫を含む。	外面淡黄色 内面黒褐色	平成三年度 調査区
2	I-b	(15.7)	(11.8)	(28)	0.8	1.9	0.9	1.7	細砂粒を含む。雲母を微量含む。	淡灰褐色	〃
3	I-c	13.4	9.5	(20)	0.6	2	0.5	1.7	直径2～3mm大の小礫を含む。	黒灰色	〃

Tab. 2 軒平瓦計測表

単位 (cm)

挿図 番号	分類	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	文様	周縁				周縁高	胎土	色調	出土地点
							上	下	左	右				
4	I	(22.8)	(1.7)	(20.2)	2.8	1.7	0.5	0.4	-	2.9	0.3	直径2～3mmの小礫を含む。	黒灰色	詰A区
5	I	-	-	-	3.2	1.2	0.7	1.2	2.7	-	0.2	〃	〃	C区

Tab. 3 丸瓦・平瓦計測表

単位 (cm)

挿図 番号	器種 分類	法 量			胎土	焼成	色調	備考	出土地点
		長さ	幅	厚さ					
6	平瓦	-	-	1.3	細砂粒を含む。	良好	銀色	凹面にコビキ印。一部銀化現象。	詰A区
7	丸瓦A-1	-	-	2.4	細砂粒を含む。	不良	淡灰褐色	凹面に撚り紐痕。	〃
8	〃 A-2	-	-	2.5	細砂粒を含み、中に小礫を微量含む。	良好	淡灰色	凸面へラ調整。凹面に布目痕が残る。	〃
9	〃 A-1	-	-	2.4	細砂粒を含み、中に小礫を微量含む。	〃	灰色	凹面に棒状圧痕、布目痕が残る。	〃
10	〃 A-2	-	-	2.3	細砂粒を含み、中に小礫を微量含む。	〃	灰褐色	凸面へラ調整。	〃
11	〃 A-2	-	-	2.1	細砂粒を含む。	〃	灰褐色	凹面の一部に撚り紐痕、布目痕が残る。	〃
12	〃 A-2	-	-	2.2	細砂粒を含む。	〃	灰黒色	凹面の一部に撚り紐痕、棒状工具による圧痕が残る。	〃
13	〃 A-1	-	-	1.9	細砂粒を含む。	〃	灰褐色	凹面側縁直下に縄目痕が残る。	〃
14	〃 A-1	-	-	1.9	細砂粒を含む。	〃	黒灰色	凹面の一部に布目痕が残る。	〃
15	〃 A-2	-	-	2.0	細砂粒を含む。	〃	黒灰色	凸面は丁寧なナデ、一部はへラ調整、凹面は布目が残る。	〃

挿図 番号	器種 分類	法 量			胎 上	焼成	色調	備 考	出土地点
		長さ	幅	厚さ					
16	丸瓦A-1	-	-	2.2	細砂粒を含む。	良好	灰黒色	凹面側縁直下に織目痕が残る。部分的に布目痕が残る。	誌A区
17	〃 B-1	-	13	1.7	砂粒を含む。	〃	黒灰色	凹、凸面共に砂粒が見られ雲母片を含む。	〃
18	〃 B-1	-	-	1.9	細砂粒を含む。	〃	灰色	玉縁口縁に砂粒多量。	〃
19	〃 B-1	-	-	1.8	細砂粒を含む。	〃	灰色	凸面ナデ調整。	〃
20	〃 B-1	-	-	2.1	細砂粒を含む。	〃	灰色	凸面が焼け歪む。	〃
21	〃 B-1	-	-	1.7	0.5～1mm大の小礫を含む。	良好(硬)	灰色	凸面にヘラ状工具による調整。	〃
22	〃 B-1	-	-	1.4	細砂粒を含む。	良好(硬)	黒灰色	凸面にヘラ状工具による調整。	〃
23	〃 B-2	-	13.3	2.1	2～4mm大の礫を含む。	良好	黒褐色	凹凸面に砂粒が多量に見られる。	〃
24	〃 B-2	-	-	1.8	2～3mm大の礫、石英、チャートを含む。	良好(軟)	黒褐色	凹面に布目痕が残る。	〃
25	〃 B-2	-	-	1.8	2～3mm大の礫、石英を含む。	良好	黒褐色	凹面に布目痕が残る。	〃
26	〃 B-2	-	-	2.2	2～4mm大の礫、石英、チャートを含む。	良好(軟)	黒褐色	直径1.8cmの釘穴がある。	C区
27	〃 B-2	-	-	1.6	3～5mm大の礫、石英、チャート、雲母を含む。	〃	灰褐色	凹面に一部布目痕が残る。凸面はヘラ状工具による調整。	〃
28	〃 B-2	-	-	1.9	3～5mm大の礫、石英、チャートを含む。	不良	黒褐色	凹凸面に砂粒が多量に見られる。	〃
29	〃 B-2	-	-	1.7	1～3mm大の礫、石英、チャート、雲母を含む。	〃	黒褐色	凸面はヘラ状工具による調整。	〃
30	〃 B-2	-	-	1.9	2～3mm大の礫、石英、チャートを含む。	〃	黒褐色	凹面に2～3mm大の小礫が多量に見られる。	〃
31	〃 B-2	-	-	1.7	3～5mm大の礫、石英、チャート、雲母を含む。	〃	黒色		〃
32	〃 A-1	35.5	17.0	2.5	細砂粒を含む。	良好	灰色	凹面に擦り紐痕、一部銀化現象、凸面ヘラ調整。	平成三年度調査区
33	〃 A-1	34.7	15.6	2.5	〃	〃	銀色	凸面ヘラ調整。凹面に擦り紐痕。内外面とも銀化現象。	〃
34	〃 A-2	30.1	13.8	2.5	〃	〃	灰色	凹面に擦り紐痕。	〃

写 真 图 版

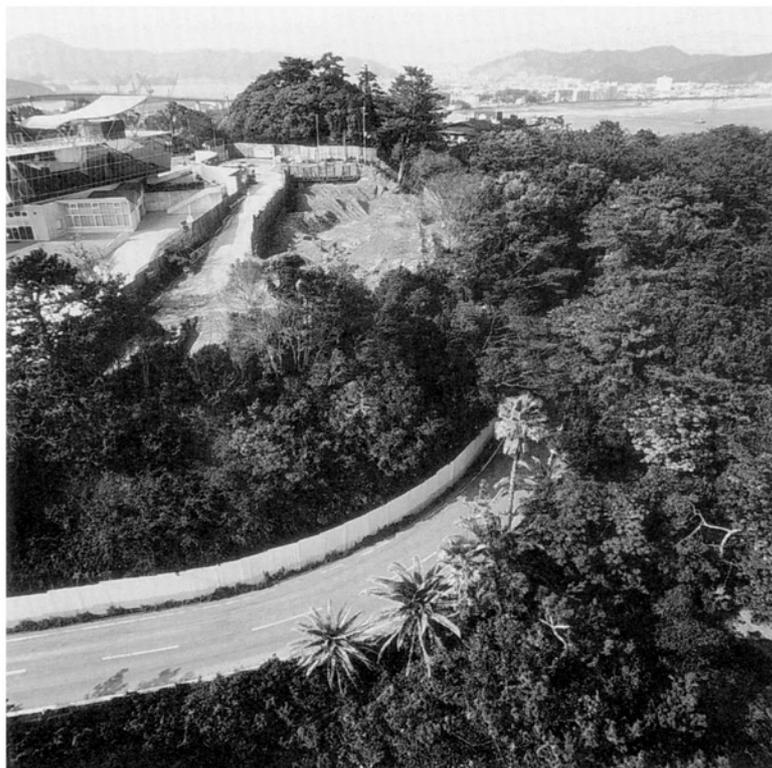


浦戸城跡全景（東より）

PL 2



天守台，詰ノ段全景（真上）



調査対象地全景（南より）



詰A区石垣



詰A区A-1石垣（西より）

PL 4



詰A区A-2石垣（北より）



詰A区A-3石垣（東より）



詰A区断面状況（南より）



詰A区A-1 石垣裏込め状況

PL 6



B区石垣全景（北東より）



B区, B-1-a石垣（北より）



B区, B-1-b石垣 (南東より)



B区, B-1-b裏込め状況 (北より)



B区, B-2-a 石垣 (北より)



B区, B-2-a, B-2-b 全景 (南より)



B区, B-2-a 犬走り状張り出し部 (南端隅角部)



B区, B-2-b 隅角部

PL 10



C区石垣全景（北より）



C区石垣全景（南より）



C区, C-1石垣 (東より)



C区石垣 (東より)



C区, C-1 裏込め状況



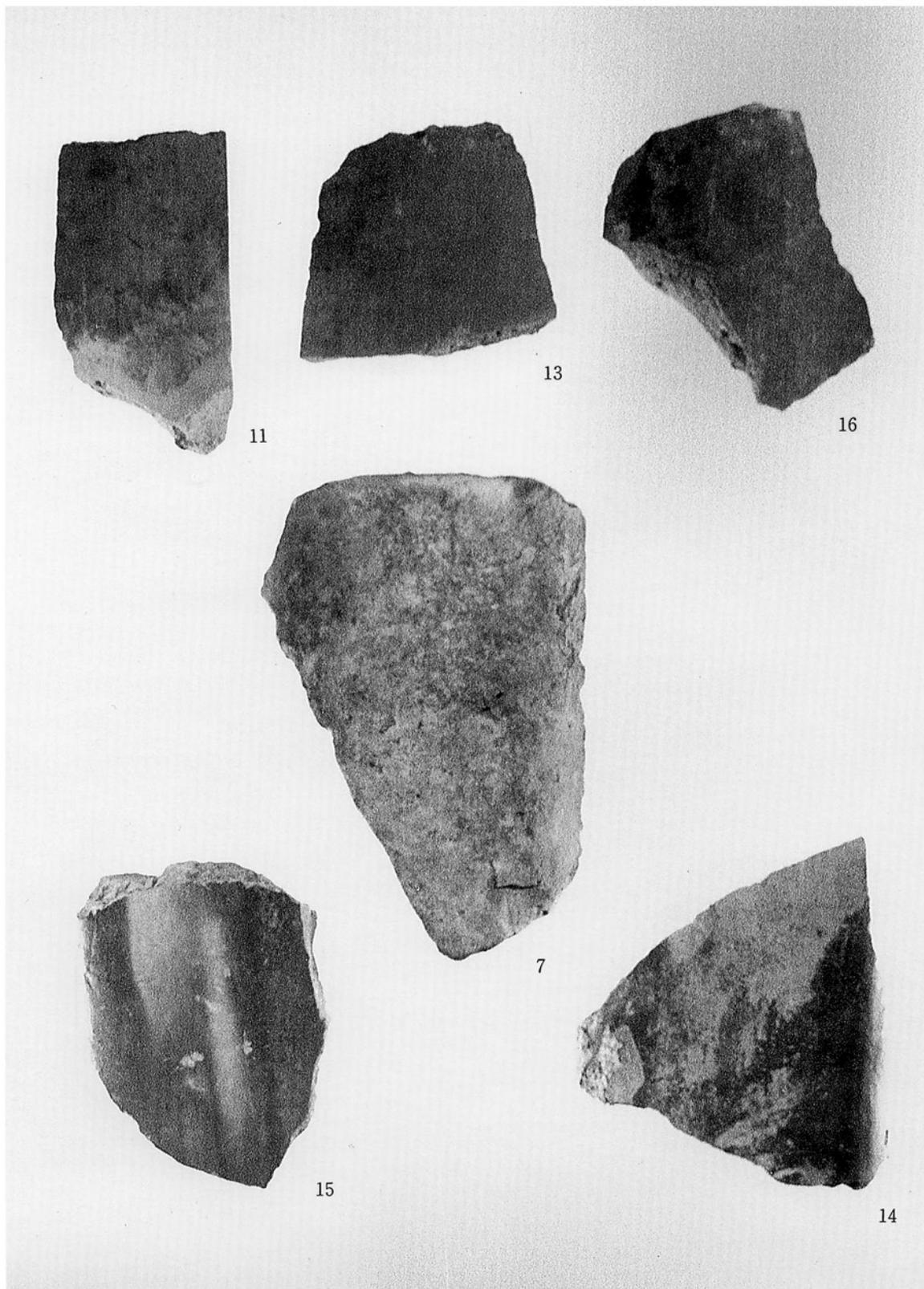
C区, C-1 断面状況



D区, D-1 (内壁) (東より)



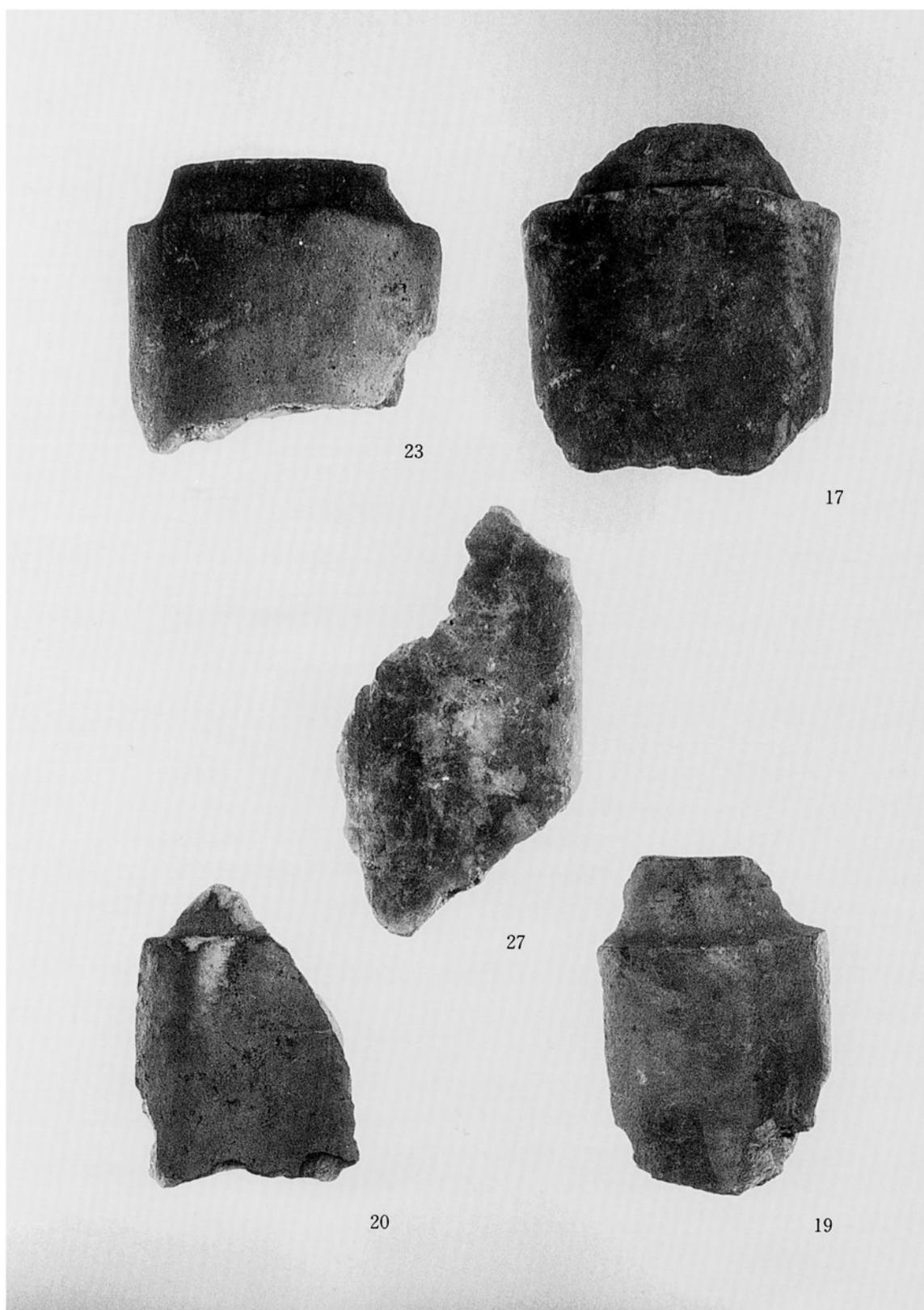
D区, D-2 (外壁) (北より)



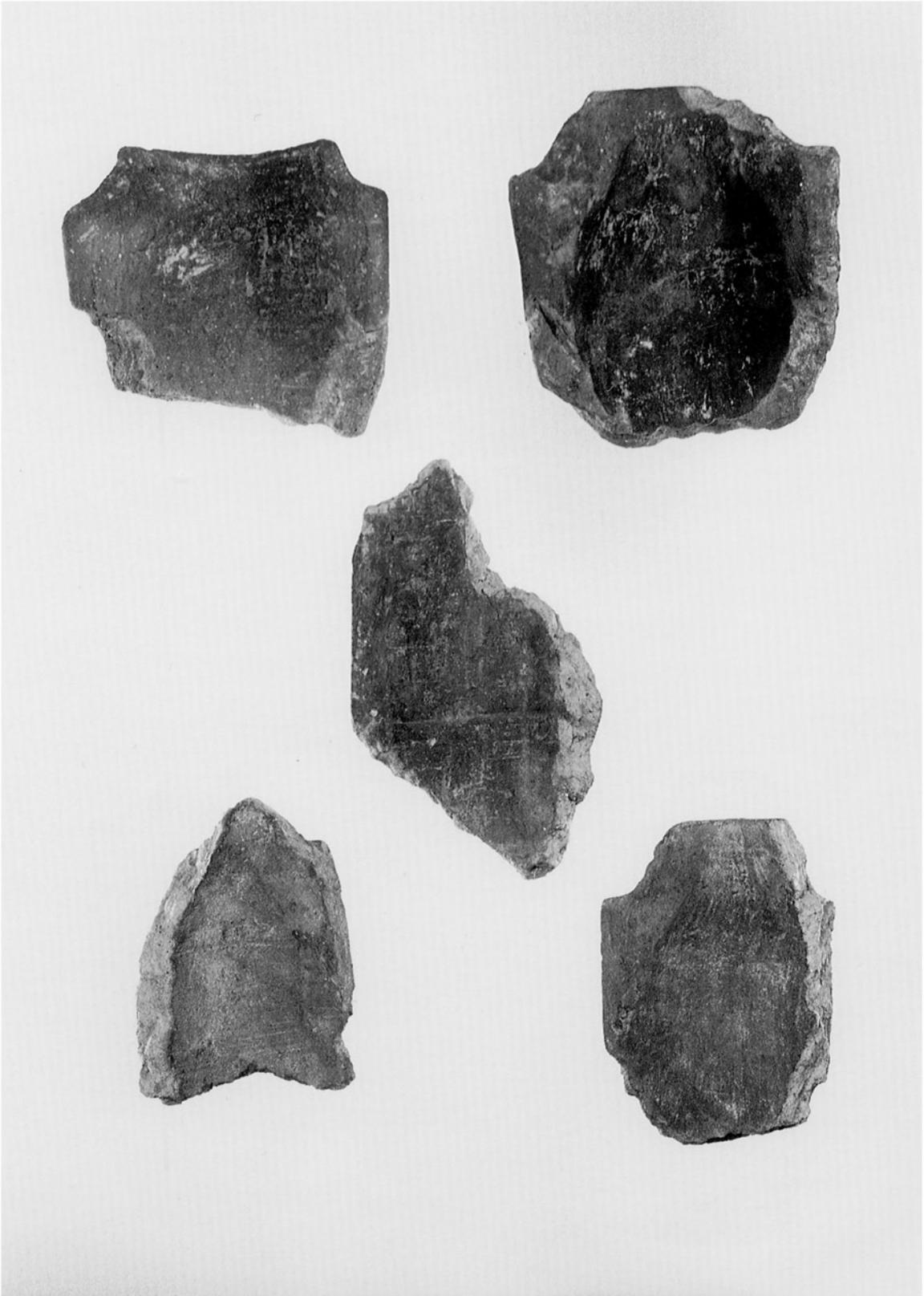
丸瓦 (コビキA)



同（裏面）



丸瓦 (コビキB)



同（裏面）

PL 18



—

32



—

33

丸瓦完形（コビキA）



34

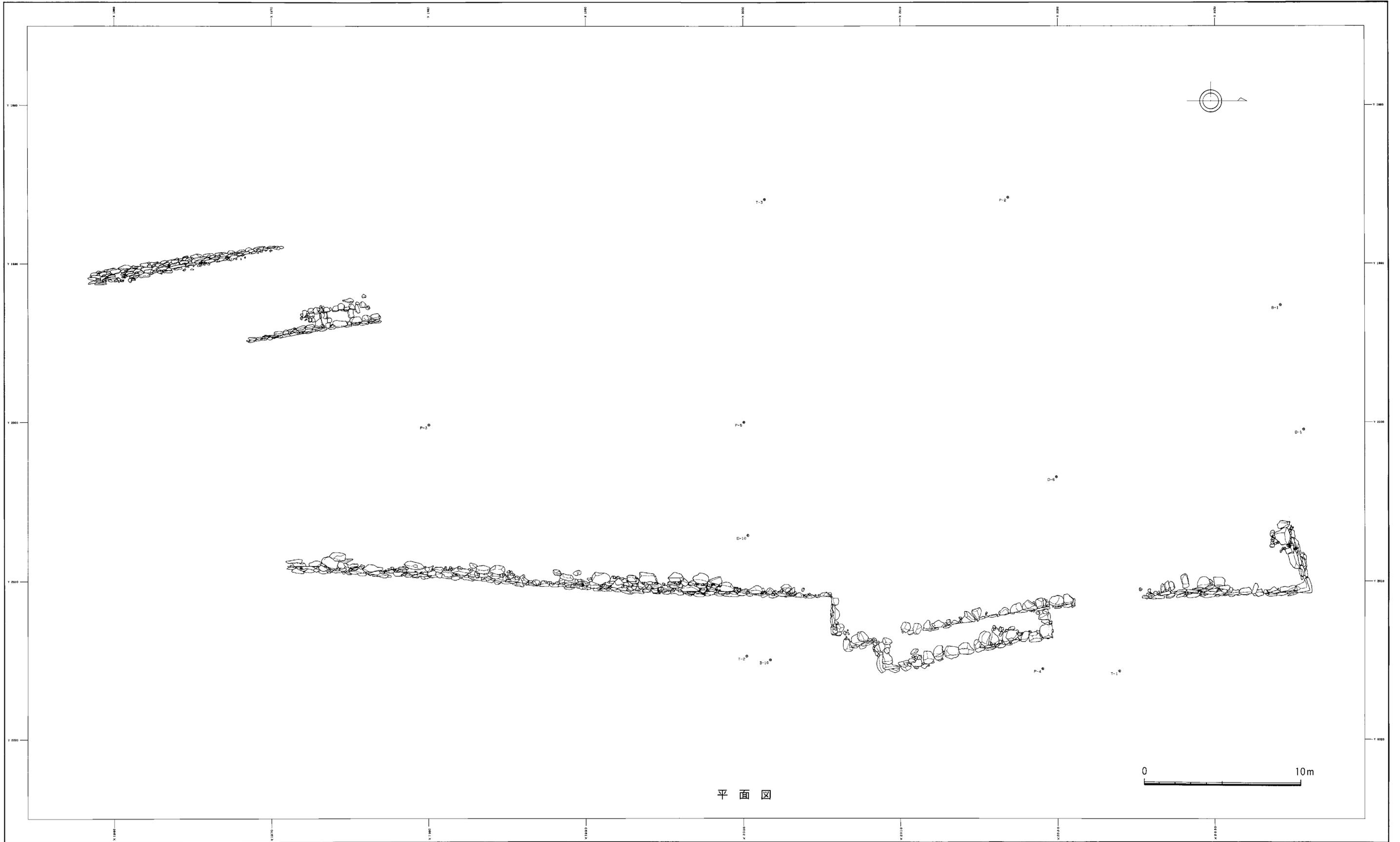
丸瓦完形（コビキA）

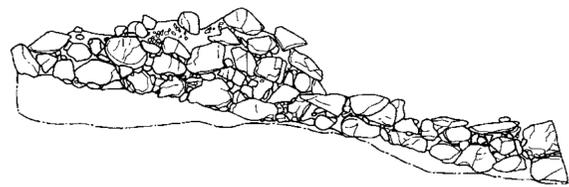
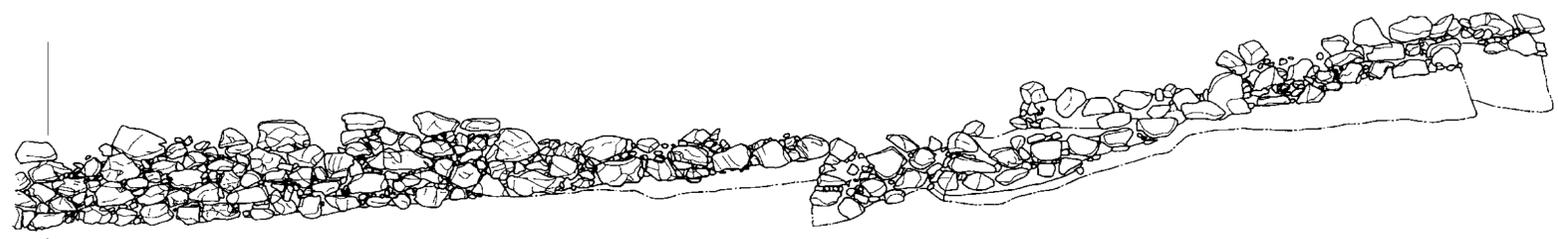
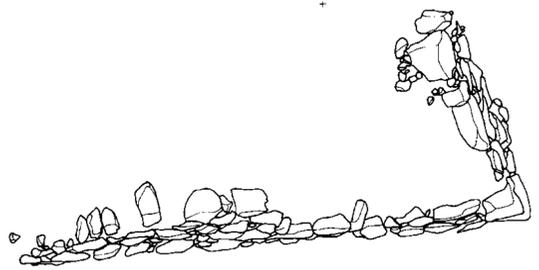
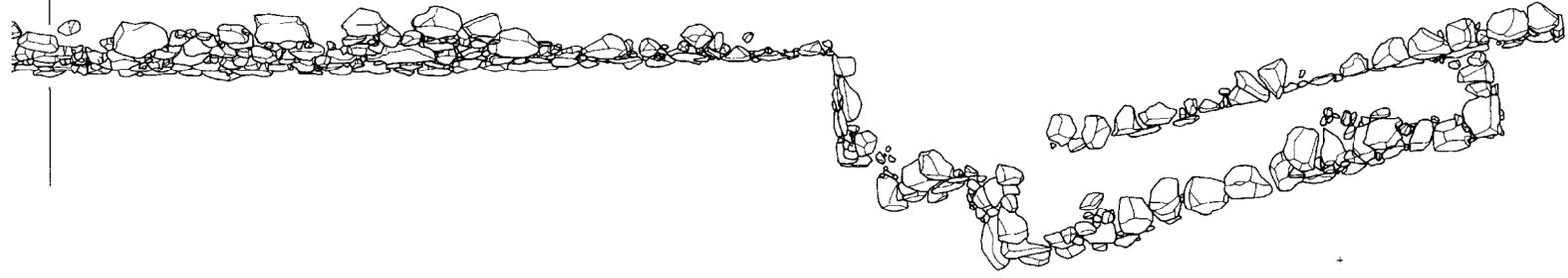
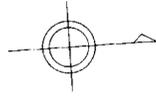
報告書抄録

ふりがな	うらどじょうせき							
書名	浦戸城跡							
副書名	国民宿舎『桂浜荘』改築工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	吉成承三・森田尚宏							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1995年2月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うらどじょうせき 浦戸城跡	こうちけんこうちし 高知県高知市 うらどあざしろやま 浦戸字城山 830-16	39201	010010	33度 29分 40秒	133度 34分 30秒	19911011) 19911020 19930812) 19930820 19940826) 19941027	240 48 611	城山西側尾根部公園整備事業に伴う立会調査 国民宿舎改築工事に伴う立会調査 国民宿舎改築工事に伴う確認調査及び本調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浦戸城跡	城館	中世 近世	石塁 石垣		瓦類(軒丸瓦, 軒平瓦, 丸瓦, 平瓦, 鯨)		「詰ノ段」, 「東出丸」を区画する石垣群を確認	

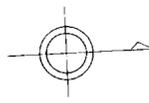


吾川郡浦戸古城跡図『皆山集』所収 16×27cm 彩色 高知県立図書館蔵



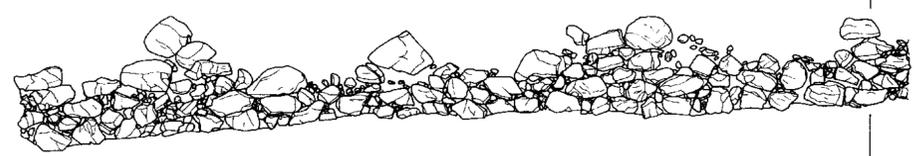


50.0
48.0
46.0
44.0



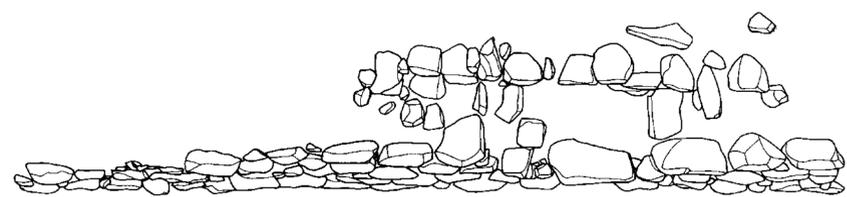
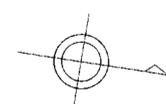
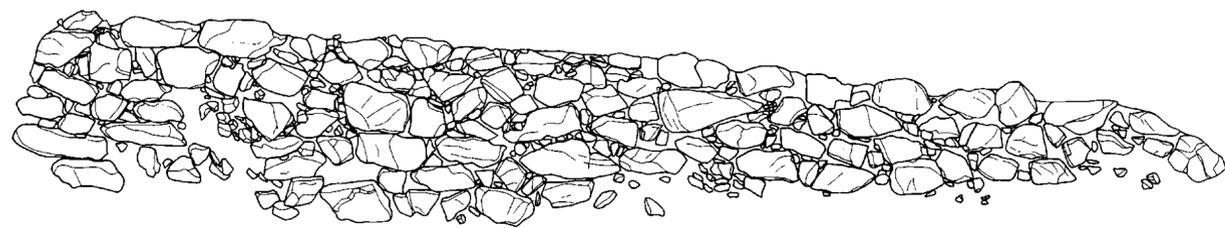
0 8 m

46.0
44.0
42.0

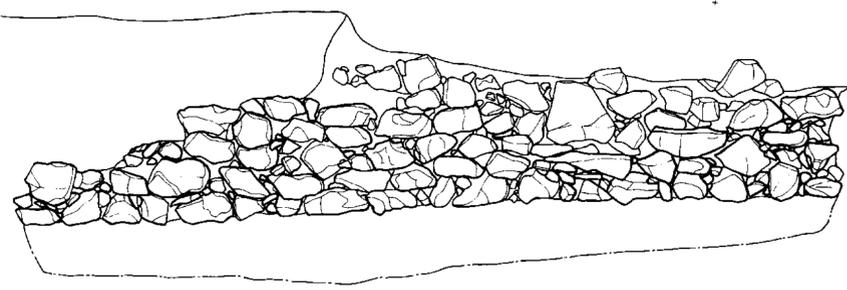


B·C区 平面图, 侧面图

43.0
44.0
45.0
46.0
47.0



0 4 m



48.0
47.0
46.0
45.0

D区 平面图, 侧面图

浦 戸 城 跡

(国民宿舎「桂浜荘」改築工事に伴う発掘調査報告書)

1995年2月

編 集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
電話 (0888)64-0671
発 行 高 知 市
印 刷 西村謄写堂